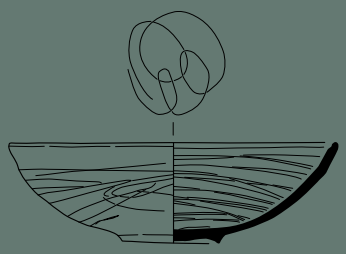
奈良市埋蔵文化財調査センター資料 No. 5

南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料—



奈良市教育委員会

2014

奈良市埋蔵文化財調査センター資料 No. 5

南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料—

奈良市教育委員会

2014

ＨＪ第 559 次調査出土　土師器皿（11 世紀～ 19 世紀）

例　言

１　本書は、奈良市教育委員会が平成 18 年度に実施した、平城京左京三条六坊十坪（ＨＪ第 559 次調査）の発掘調査で出土した中近世土器の報告と、その関連資料をまとめ、南都出土中近世土器資料集として刊行するものである。

２　ＨＪ第 559 次調査で出土した多量の遺物については、その大半を奈良県緊急雇用創出事業補助金の交付を受けて元興寺文化財研究所に整理作業を委託して行った。その委託内容は以下の通りである。

　平成 21 年度　埋蔵文化財出土遺物洗浄・マーキング作業委託

　平成 22・23 年度　「ならまち資料」整理活用事業

委託事業の成果については、平成 23 年度秋季特別展『「奈良町」の考古学－発掘された近世・近代の奈良－』でその一部を公開した。本資料集は、事業成果の中から特に重要と考える土器資料を抽出してその概要を公表し、出土資料の活用を促進するために刊行するものである。

３　本書の写真図版に示した遺物番号は、土器図版に図示した遺物番号に対応する。

４　本書の遺構図、土層図に示した座標値は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の図中の標記については単位（m）を省略した。

５　本書で使用した遺物名称・型式は下記の論文に準拠した。

　土師器羽釜　　菅原正明　1983　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

　瓦器（大和型）川越俊一　1983　「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

　瓦器（和泉型）尾上　実　1983　「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

　肥前産陶磁器　九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』

　輸入陶磁器　　横田賢次朗・森田勉　1978　「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』

６　本書に使用した写真は、奈良市埋蔵文化財調査センターと元興寺文化財研究所、佐藤右文が撮影したものである。

７　本書の執筆は、奈良市埋蔵文化財調査センター主任中島和彦と、元興寺文化財研究所研究員佐藤亜聖が共同で行い、中島が編集した。

目　次

巻首図版
例言・目次
第１章　遺跡・遺構の概要
A　遺跡の概要・・・1
B　発掘調査の概要・・・2
C　検出遺構・・6

第２章　出土土器
A　報告の方法・・・14
B　出土遺物の概要・・・17
C　出土土器の時期的変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
D　出土土器観察表・・・47

第３章　奈良町遺跡出土の土師器皿の編年
A　奈良町遺跡出土の土師器の大分類と変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
B　奈良町遺跡出土資料の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
C　各段階の年代・・68
D　まとめ・・・69

写真図版・・90

第１章　遺跡・遺構の概要

A　遺跡の概要

奈良町遺跡は、興福寺を中心として東西約 2.5m、南北約 2.7m に広がる都市遺跡である（図１）。その範囲はおおよそ奈良町 205 町内にあたり、明治 23 年の地籍図では、道路に面した短冊状の細長い宅地割りが見て取れる。

地形的には、春日山麓から西方向にのびる台地上とその裾部に位置しており、中央部を東西に流れる率川の谷筋によって台地は南北に分断される。北側の台地上の中央には興福寺が、その北東側に東大寺が位置し、南側の台地上の中央に元興寺が位置する。

これら古代寺院の存在が示すように、遺跡は奈良時代の都城遺跡である平城京跡と重複しており、発掘調査も平城京跡または古代寺院の調査として古くから行われてきた。奈良市教育委員会では、昭和 54 年度の東大寺旧境内（ＴＤ第 01 次）調査からはじまり、平成 24 年度現在で約 130 件の大小の発掘調査を行っている。図１は奈良町遺跡内で奈良市が行った発掘調査地点を○の分布で示しているが、遺跡内の調査に粗密があることがわかる。

今回報告するＨＪ第 559 次調査地は興福寺西側の高天町内で、北東方向にはしる台地の西縁辺部にあたり、その西側は西に下る斜面地となる。高天町内の発掘調査

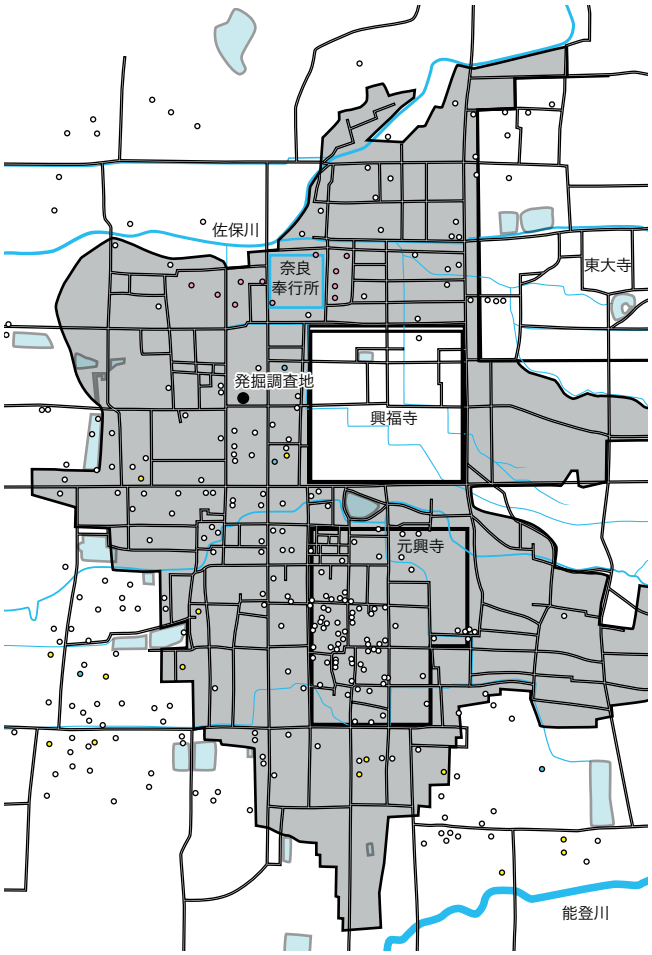


図１　奈良町遺跡の範囲とＨＪ第 559 次調査地（1/25,000）

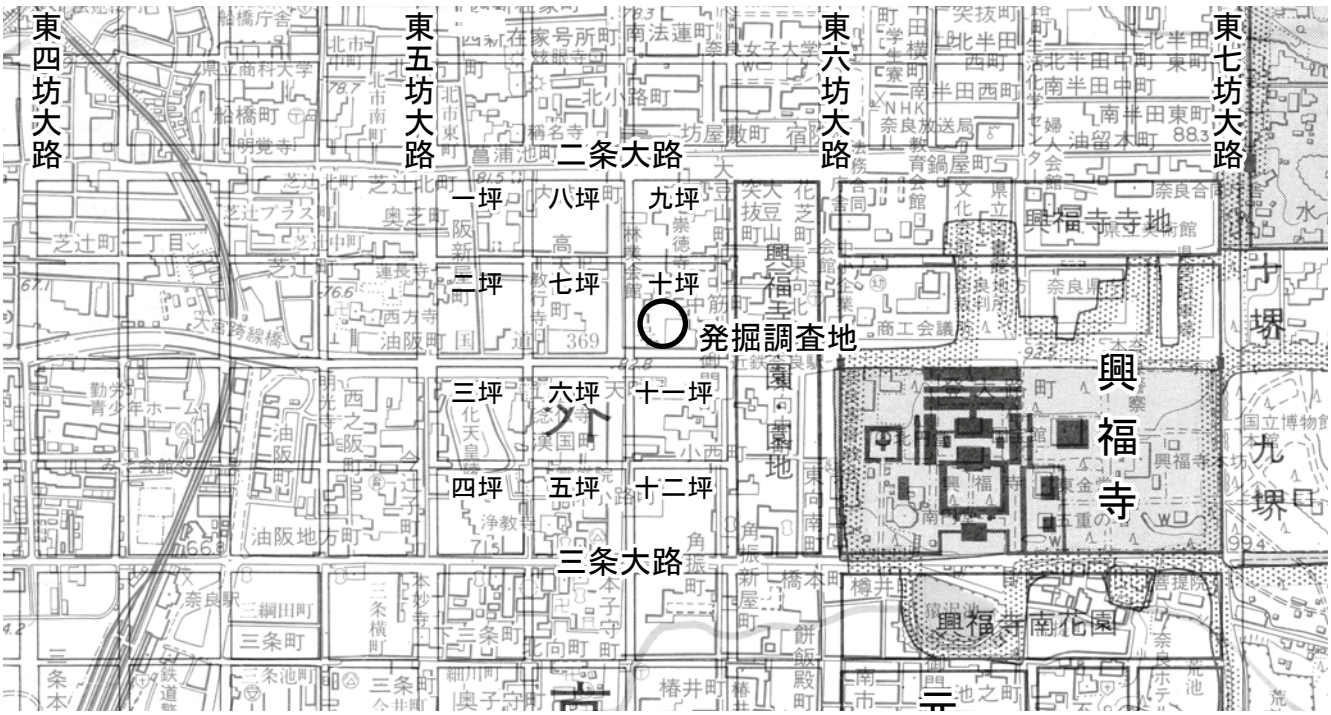


図２　ＨＪ第 559 次調査地位置図（1/10,000）

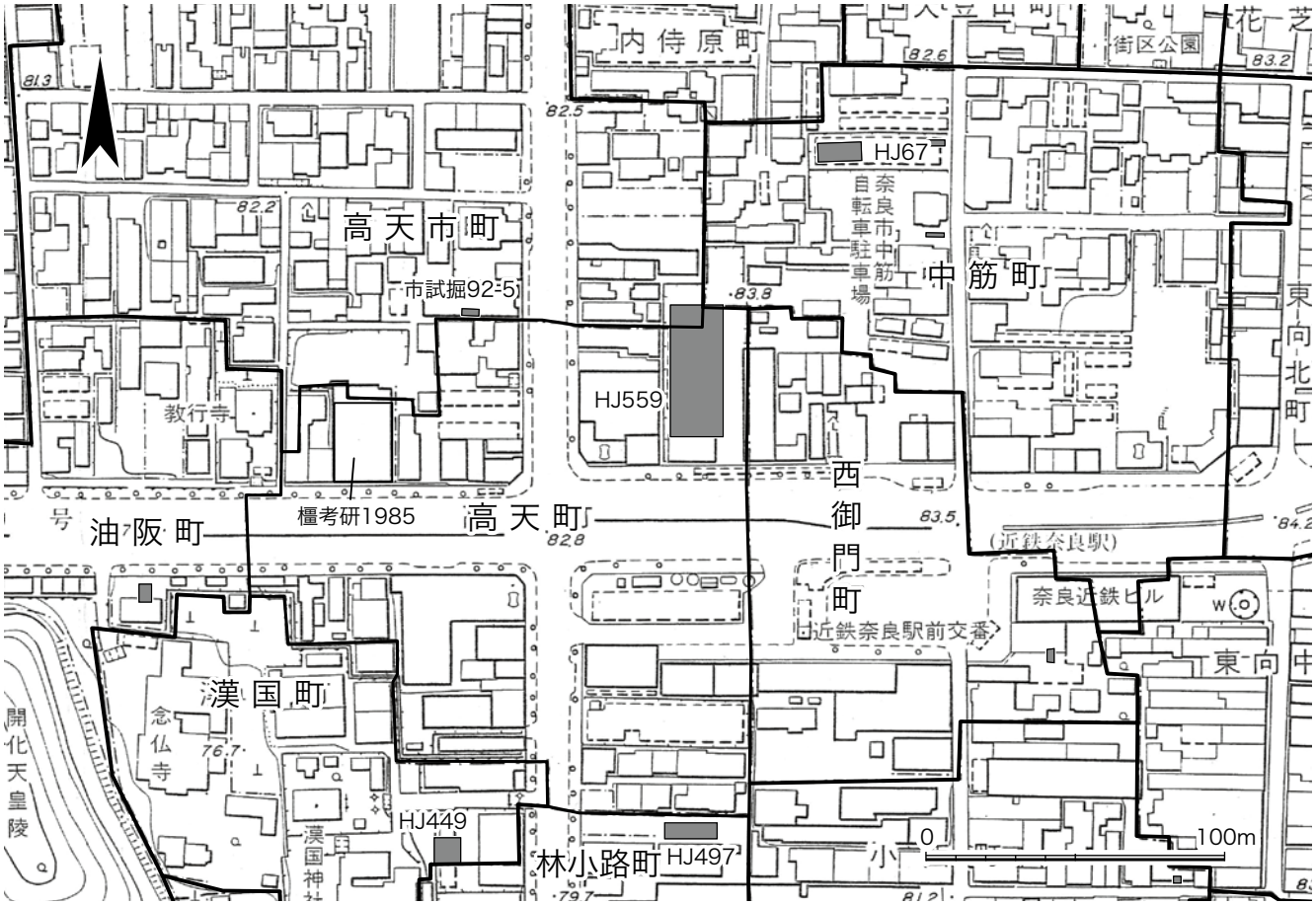


図３　発掘調査地位置図（1/2,500）

は、橿原考古学研究所が 1985 年度に１件行っており、奈良～江戸時代の各時期の遺構・遺物を数多く検出している。また南側の林小路町内の発掘調査でも奈良時代以降の遺構・遺物を数多く検出しており、奈良町遺跡内においても比較的遺構密度の高い地域である（図２・３）。

Ｂ　発掘調査の概要

発掘調査は 2006 年度に奈良市埋蔵文化財調査センターが行い、その概要を「奈良市埋蔵文化財調査年報平成 18（2006）年度」において報告している。810㎡の発掘区を南北２回に分けて設定し、上層（室町～江戸時代）と下層（奈良～鎌倉時代）の２面の調査を行った（図６・９）。井戸９基をはじめ土坑、小柱穴、石組遺構など約 1,200 基の大小の遺構を検出し、出土遺物は遺物整理箱で約 1,200 箱分が出土した。今回の報告はこの中から 13 基の遺構を抽出し、その出土土器を報告するものである。出土土器資料の報告に重点をおくため、選択した 13 基の遺構以外の詳述はさけ、報告土器資料の性格を考える上で参考となる各時期の遺構の概要を以下に記す。

発掘区内では、奈良時代後半頃と考えられる掘立柱建物と土坑が最も古い遺構で、その後 11 世紀中頃と考えられる井戸**ＳＥ 501** までの間の遺構は確認していない。11 世紀末頃から遺構の数が増加し、方形縦板組横桟留めの井戸ＳＥ 502 や、土坑ＳＫ 604 をはじめ 16 基以上の土坑が 11 世紀末頃のものである。この時期の遺構の特徴として、土師器の一括大量投棄が行われる土坑が数多い点があげられ、今回報告する土坑**ＳＫ 613** はその中の１つである。

以後、12 ～ 14 世紀後半頃には、井戸をはじめとする遺構が各時期にあり、居住域として継続的な利用が想定できる。井戸ＳＥ 506 は 14 世紀後半頃のもので、平面八角形の立派な構造をした井戸枠で注目される。この時期の遺構として土坑**ＳＫ 618・635・636・638・639・642** を選択した。いずれも土器を大量に廃棄する土坑であるが、出土状況は各々やや異なっている。

15 ～ 16 世紀中頃にはほとんど遺構が確認できないが、16 世紀後半の５基の石組遺構の出現以降から 17 世紀中頃にかけては、再び遺構・遺物数が増加する。この時期の遺構としては、高天町と高天市町境界上にある東西溝ＳＤ 107 があり、町境をはさみ南北に宅地を分筆していたことが確認できる貴重な遺構である。石組遺構**ＳＸ 808** と土坑**ＳＫ 651** がこの時期のものである。

図４　ＨＪ第559次調査　発掘区全景　北半部下層（南西から）

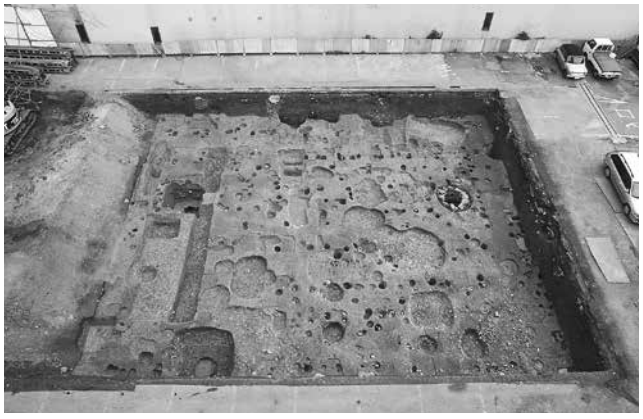


図５　ＨＪ第559次調査　発掘区全景　南半部下層（西から）

17世紀後半～18世紀後半までの遺構は、井戸**ＳＥ507**以外は確認できず、状況は不明。18世紀後半以降にはまた遺構・遺物が増加し、この時期の遺物が出土遺物の多くを占める。特に塵芥処理用と考えられる土坑が多く、多量の土器・瓦などで埋まる。土坑はＳＫ655をはじめ11基あり、**ＳＫ656･662**が最大規模である。

次に各時期の遺構の配置状況に注目すると、発掘区内の各時期の宅地割りがおぼろげながらも復原でき、町割りの変遷や宅地内の利用状況を考える上で貴重な資料と

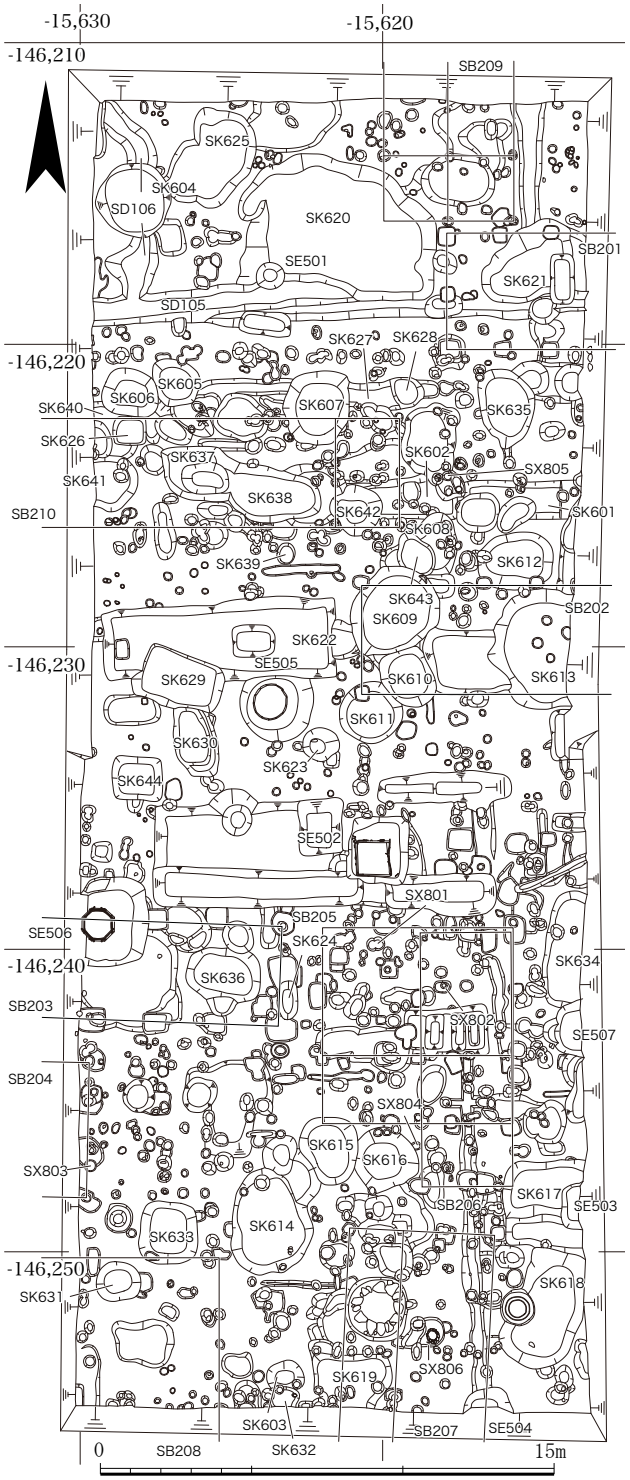
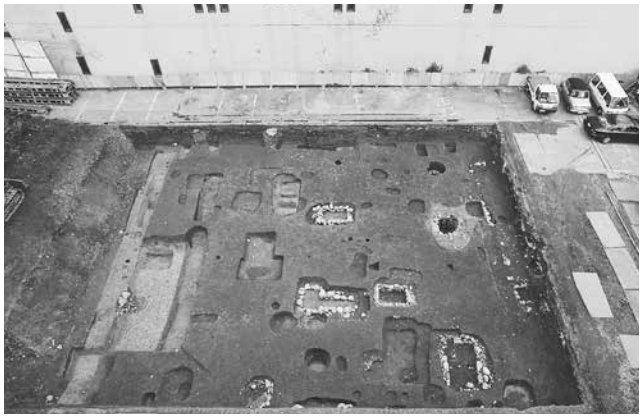


図６　ＨＪ第559次調査　発掘区下層平面図（1/250）

なる。

まず中世の遺構の分布を見ると、発掘区北側の東西溝ＳＤ105をはさみ北側が約0.3ｍ低いことから、この段差を境に南北の区画があったことが考えられる。奈良時代の整地土がＳＤ105の南側に存在し北側には存在しないこと、この整地土上に築かれる掘立柱建物ＳＢ201が段差をまたいで建つことから、段差の時期が奈良時代にさかのぼるものではないことは明らかである。

図７　ＨＪ第 559 次調査　発掘区全景　北半部上層（南西から）



第８図　ＨＪ第 559 次調査　発掘区全景　南半部上層（西から）

ＳＤ 105 やその北に隣接する土坑ＳＫ 620 の出土遺物が 12 世紀前半頃のものであること、段差の南側に沿って 11 世紀末頃の小柱穴が東西にならんでいることから、この区画は 11 世紀末～ 12 世紀中頃に設けられたと考えられる。

段差の南側では、11 世紀末～ 12 世紀の土坑が集中する場所が２カ所あり、さらにそれぞれの北側には小柱穴が集中するのが認められる。この土坑群と柱穴群が１セットで１区画を構成すると考えた場合、発掘区内には

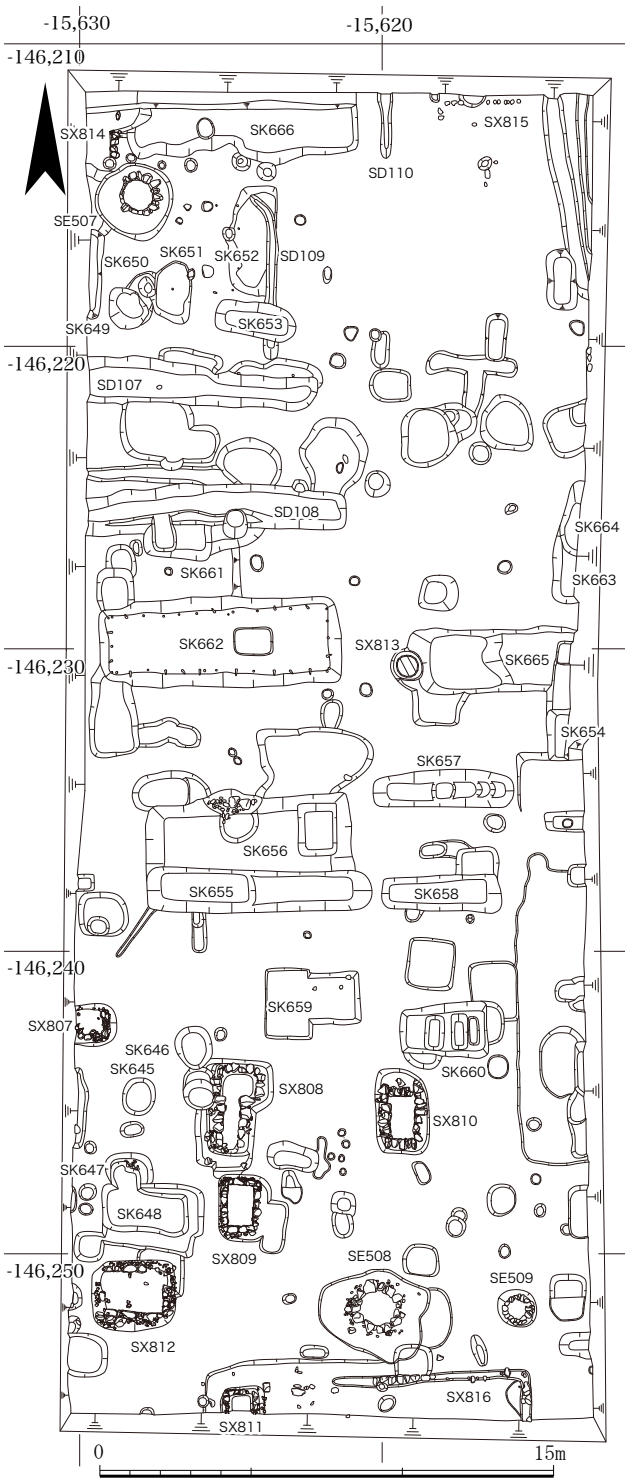


図９　ＨＪ第 559 次調査　発掘区上層平面図（1/250）

北側から１～３の３区画が南北に並び、各区画は西側の道路に間口を開いていたことが想定できる（図 11）。

江戸時代の宅地割りについては、文献・絵図と地籍図からある程度復原できる。

発掘調査地は現在おおよそ高天町内にあるものの、敷地の北西隅が高天市町、北東隅が中筋町に含まれる。地籍図をもとに現在の敷地に町境をおとすと、発掘区内に３町の町境があることがわかる（図３）。

図 10　溝ＳＤ 105（中央）を挟む南北の区画（東から）

高天町内については、「奈良町北方弐拾五町家職御改帳」（寛文 10 年（1670 年））によって当時の町人合計 50 軒分の住人・職業・宅地の間口が判明する。この各宅地を地図上に配置してゆくと、おおよそ現在の高天町内の宅地の間口と等しいことがわかり、現在の宅地割りが 17 世紀中頃まで遡ることがわかる。これによると発掘調査地内には東西に南北方向の宅地が３軒ならぶことがわかる。

また高天市町内は、住人と間口幅・奥行きを記した幕末の町絵図によって、南北にならんだ東西方向の２軒の宅地の奥部分であることがわかる。

以上の史料と、明治 23 年の「奈良町全図」の地籍図から宅地の奥の形態を復原して発掘区内に宅地をおとしたのが図 12 の発掘区内宅地割図である。これによると、発掘区内には５軒分の宅地が復原でき、便宜上これらに宅地１～５の番号をつけた。

図 12 を見れば、各町境、宅地境は必ずしも区画を明瞭に示す遺構があるわけではないことがわかる。一方で宅地１と４の境には東西溝ＳＤ 107 があり、宅地境を意識した遺構と考えられる。溝の年代は 17 世紀前半で、この時期には南北の宅地を分筆していたことがわかる。

また江戸時代後半の遺構の分布は、各宅地内に収まっており、宅地境界を越えて存在していない。特に発掘区中央に分布する大形の塵芥処理土坑は、宅地境をはさんで東西に分かれており、その掘削にあたっては境界の認識のもと行われたことがわかる。

この結果、少なくとも 17 世紀以降の遺構については、宅地１～５までの各居住者に帰属するものであることがわかる。本報告で取り上げる遺構については、土坑**ＳＫ 651** と井戸**ＳＥ 507** が宅地４の、土坑**ＳＫ 655・662** が宅地１の居住者のものである。

以上のように江戸時代の各遺構の帰属先が判明すれば、居住者の変遷が追えるとともに居住者間の比較検討

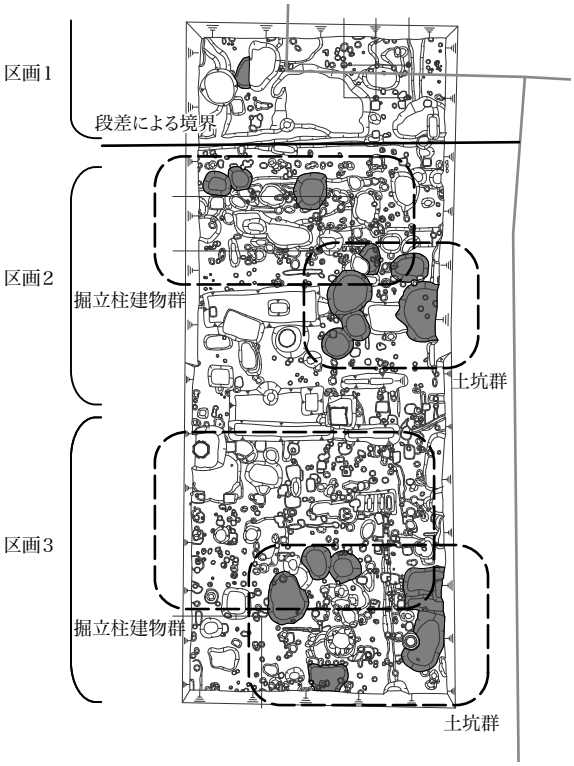


図 11　ＨＪ第 559 次調査　平安時代後期遺構配置図（1/500）

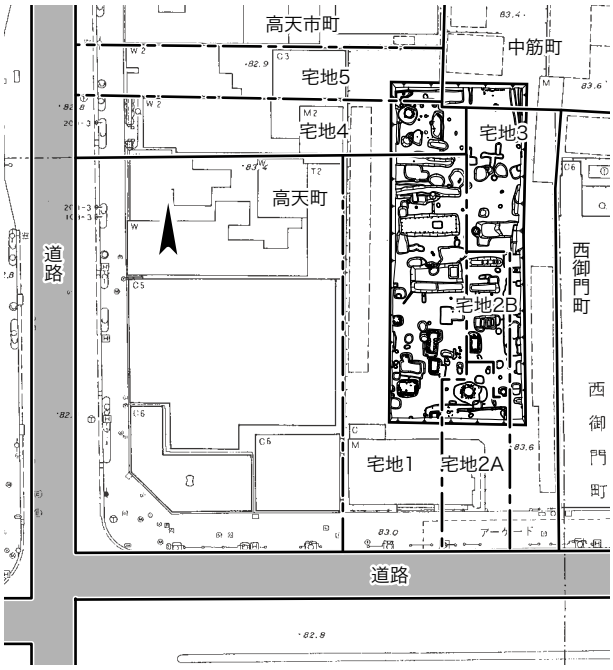


図 12　ＨＪ第 559 次調査　発掘区内江戸時代宅地割図（1/1,000）

も容易で、さらに検出遺構・出土遺物にもさらに進んだ評価を与えることができよう。

C　検出遺構

抽出した 13 遺構について詳細を記すが、平面形と規模･出土遺物については各遺構ごとに表としてまとめた。

1　ＳＥ 501

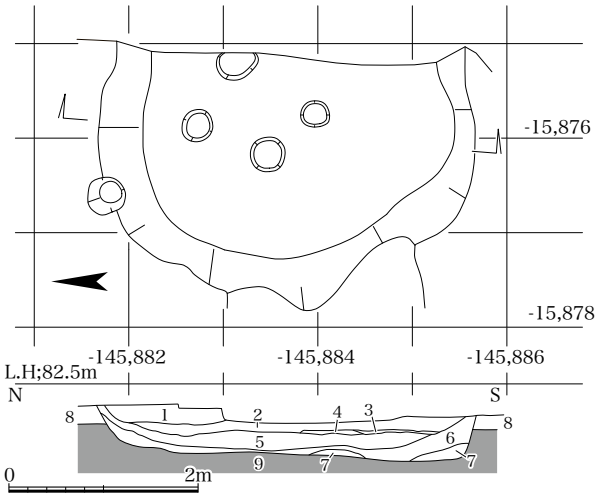
平面形	円形		
平面規模（m）	径 0.9	深さ（m）	0.8
出土遺物	土師器、黒色土器		

形態、深さから井戸と考えられる遺構であるが、井戸枠は確認していない。土器は底付近から出土した。出土遺物は少量であるが、調査地内において中世の土地利用の開始期を知ることができる遺構である。

2　ＳＫ 613

平面形	不整楕円形		
平面規模（m）	東西 2.8 以上 × 南北 4.0	深さ（m）	0.4
出土遺物	土師器、瓦器、須恵器、白色土器、白磁、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（刀子、鉄釘？）、鉄滓、石製品（砥石）		

土坑壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底付近から土器がまとまって出土した。埋土は暗灰褐色系の土で、地山の暗黄褐色粘土またはそれを含む土が間に数層堆積する。土師器皿が重なって出土するものの、秩序だって置かれたものではない。同時期の土坑が、周辺に４基ほどまとまって存在する（ＳＫ 609 ～ 612）。多数の土師器皿がまとまって出土すること、埋土の状況など類似する点が多い。



1　暗灰褐色土（土器と炭多量に含む）
2　灰褐色土（黄褐色土含む）
3　黄褐色土
4　黒灰色土
5　灰褐色土（黄褐色土含む）
6　暗灰色粘質土
7　黄灰色土
8　暗黄灰色粘土
9　明黄橙色粘土（地山）

図 14　土坑 SK613　平面・土層図（1/80）

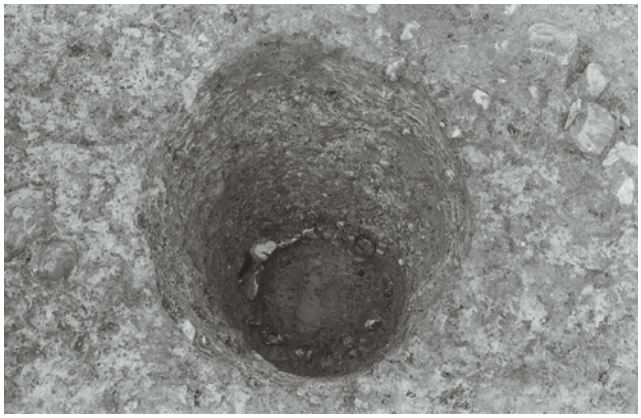


図 13　井戸 SE501（東から）

図 15　土坑 SK613（西から）

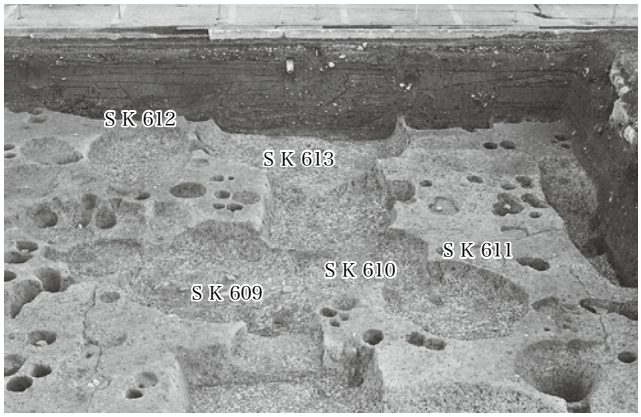


図 16　土坑 SK613 と周辺の土坑群（西から）

図 17　土坑 SK609　土器出土状況（南から）

３　ＳＫ618

平面形	楕円形		
平面規模（m）	東西 2.3× 南北 4.0	深さ（m）	0.7
出土遺物	土師器、瓦器、須恵器、白色土器、白磁、青磁、円盤形土製品、軒瓦、丸･平瓦、金属製品（鉄釘）、鉄滓、石製品（石鍋）、木製品（漆椀、曲物、箸、下駄、檜扇、櫛、しゃもじ、糸巻）		

断面形は箱掘り風に掘られており、埋土は暗茶褐色系の土で、数層に分層できる。底から 0.2 m上までの層には木片が多く含まれ、多量の箸が出土した。土器は各層中から多数出土した。

図 18　土坑 SK618 土層断面（南から）

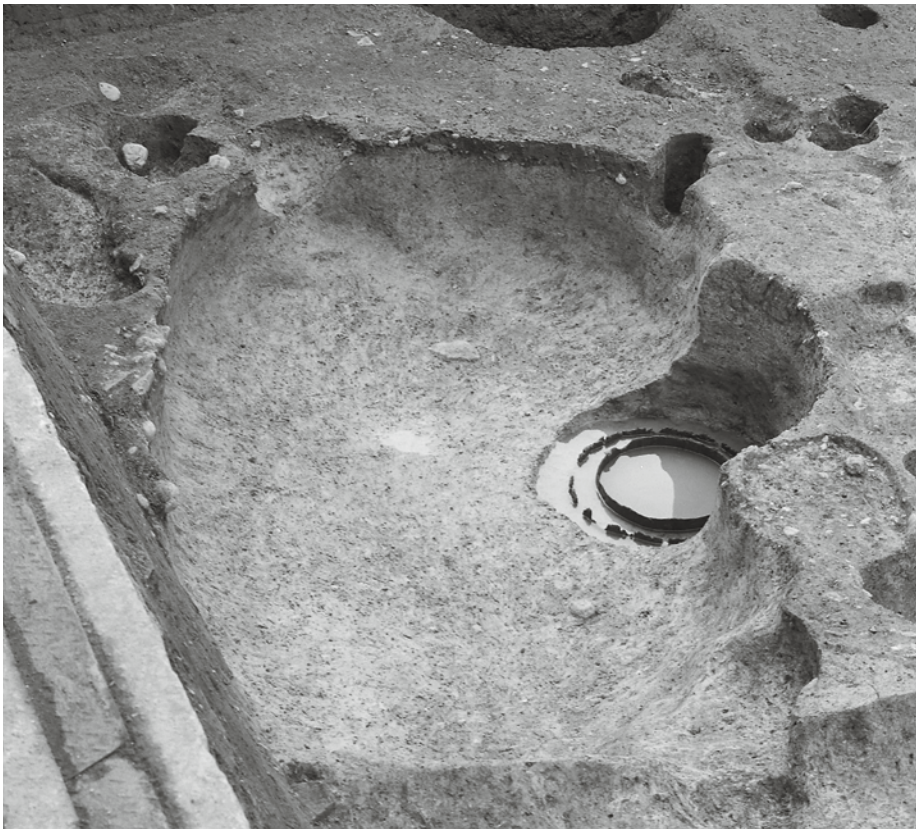
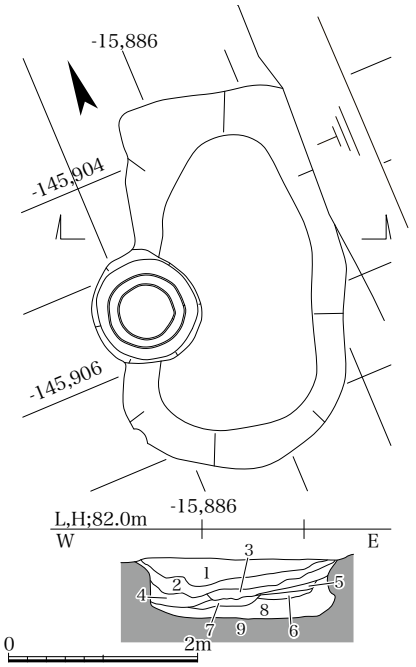


図 19　土坑 SK618（北から）



1　暗茶灰色土
2　暗茶褐色粘質土
3　暗茶褐色粘土
4　灰黒色土
5　茶褐色土と黒灰色土の混合土（木屑多く含む）
6　５層と灰白色粘土の混合土
7　茶灰色土（木片多く含む）
8　暗茶暗褐色腐食土（木片多く含む）
9　明黄橙色粘土（地山）

図 20　土坑 SK618　平面･土層図（1/80）

４　ＳＫ635

平面形	不整楕円形		
平面規模（m）	東西 1.9× 南北 2.6	深さ（m）	0.5
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、国産陶器、白磁、青磁、円盤形土製品、軒瓦、丸･平瓦、金属製品（鉄釘）、鞴羽口、石製品（石鍋）		

断面形が鉢形の土坑で、暗灰褐色系の土で埋まる。土器は主に土坑の上層の中央付近からまとまって出土しており、土坑がある程度埋まってから土器が投棄されたものと考えられる。

図 21　土坑 SK635（東から）

図 22・23　土坑 SK635 土器出土状況

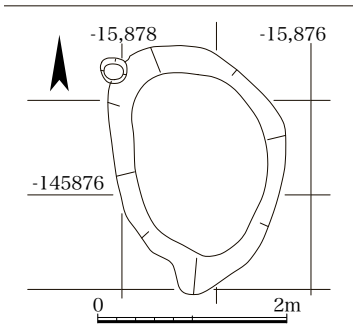


図 24　土坑 SK635　平面図（1/80）

5　ＳＫ 636

平面形	楕円形		
平面規模（m）	東西 2.5× 南北 1.8	深さ（m）	0.25
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、国産陶器、白磁、青磁、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（鉄釘）、鉄滓、石製品（砥石）		

断面形が皿状の土坑である。埋土は黒褐色粘質土の１層で、底から上面まで土器がぎっしり含まれる。遺物整理箱 46 箱分の土器が出土し、土器が完形である率も高い。土器は重なり合って出土するものもあるが、整然と配置されたものではない。南側には別の土坑が重複する。

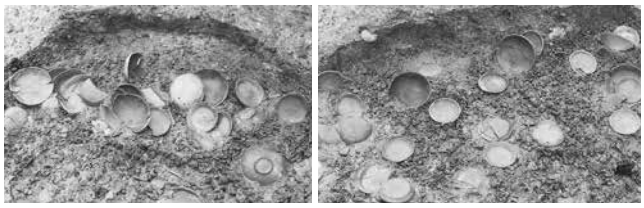


図 25・26　土坑 SK636 土器出土状況

図 27　土坑 SK636 検出状況（南から）

図 28　土坑 SK636 土層断面（東から）

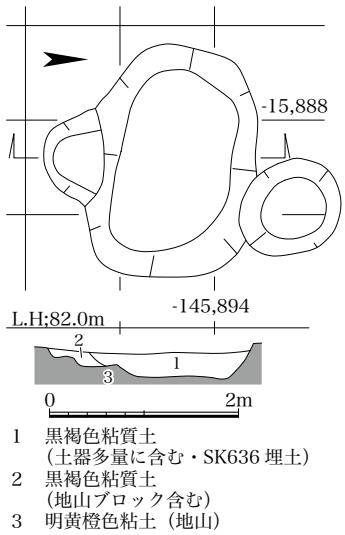


図 29　土坑 636 平面・土層図（1/80）

6　ＳＫ 638

平面形	隅丸長方形		
平面規模（m）	東西 3.4× 南北 1.9	深さ（m）	0.4
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、白色土器、国産陶器、白磁、青磁、黄釉陶器、円盤形土製品、丸・平瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘）、銅銭（漢通元寶）		

いびつな長方形の土坑で、土坑底から土器がまとまって出土する。土器を投棄した後に土で埋めたと考えられる。西に隣接して同規模・同時期の土坑ＳＫ 637 がある。

図 30　土坑 SK638（北から）

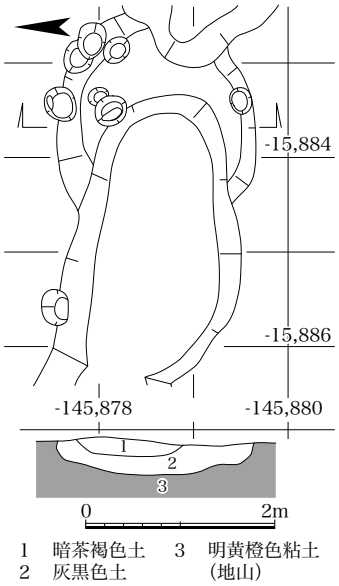


図 31 土坑 SK638　平面・土層図（1/80）

7　ＳＫ 639

平面形	楕円形		
平面規模（m）	東西 0.4× 南北 0.4	深さ（m）	0.3
出土遺物	土師器、国産陶器		

平面形は楕円形で、垂直に掘り込まれる土坑である。形態と規模は小柱穴と似るが、底からまとまって多数の土師器皿が出土しており、土器を廃棄した土坑と考えた。

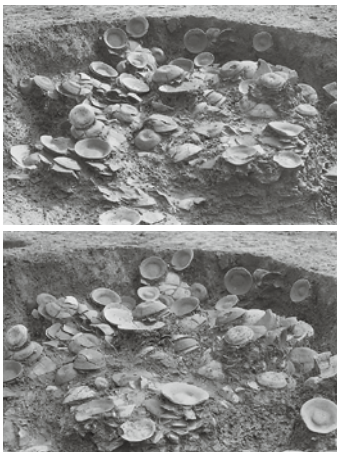
8　ＳＫ 642

平面形	円形		
平面規模（m）	径 1.7	深さ（m）	0.45
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、白色土器、国産陶器、白磁、青磁、青白磁、円盤形土製品、丸・平瓦、金属製品（鉄釘）、銅銭（元祐通寶）、鉄滓、石製品（砥石他）、		

断面形が擂鉢状の土坑である。埋土は灰黒色土の 1 層で、底から上面まで土器がぎっしり含まれる。土器は上を向いて重なり合って出土するものの、整然と配置されてはいない。同時期の遺構で土師器が多量に出土する土坑はこのＳＫ 642 のみである。

図 32　土坑 SK642 土層断面（北から）

図 33　土坑 SK642（北から）



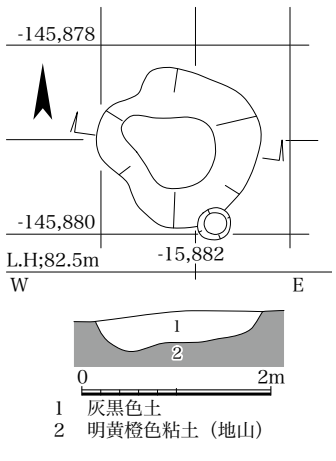


図 34 ～ 36　土坑 SK642 土器出土状況、平面・土層図（1/80）

9　ＳＸ808

平面形	逆Ｌ字形		
平面規模（m）	東西 2.4× 南北 3.8	深さ（m）	0.6
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、白磁、青磁、青花、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘、不明銅製品）、鉄滓		

石組遺構で、平面形は２つの長方形の石組遺構を接続したような逆Ｌ字形である。内法は南北が 2.4 m、東西が 1.1 mと 0.5 mで、石組は１～２段残る。南端の石は抜き取られたのか残存しない。石組遺構は他に４基確認しており、いずれもほぼ同時期で、発掘区南半部に集まる。

図 37　石組遺構 SX808（北から）

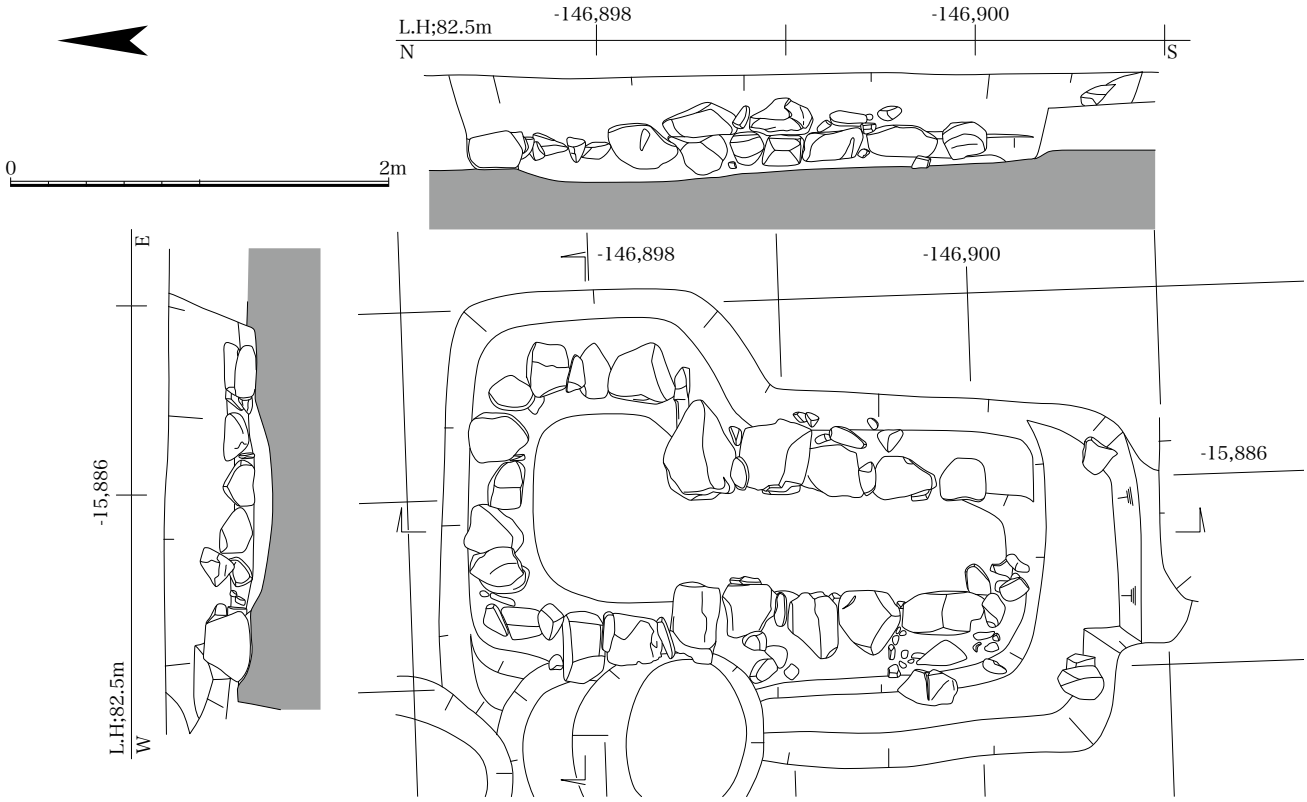


図 38　石組遺構 SX808　平面・立面図（1/40）

10　ＳＫ651

平面形	楕円形		
平面規模（m）	東西 1.3× 南北 1.4	深さ（m）	0.35
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、丸･平瓦、道具瓦、金属製品（不明鉄製品）		

土師器皿を一括で投棄した土坑で、ＳＤ 107 以北に存在する整地土を除去後に検出した。土坑の南側からまとまって土器が出土した。位置関係から、宅地４に帰属するもので、宅地４の整地時期を知る資料である。

図 39　土坑 SK651 土器出土状況（北から）

11　ＳＥ 507

平面形	円形		
平面規模（m）	東西 2.6× 南北 2.6	深さ（m）	3.6 以上
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、円盤形土製品、土人形、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（鉄釘、煙管、火箸、簪他）、石製品（砥石）、木製品（漆器椀、曲物、箸、屋根材（柿板））		

円形石組の井戸で、上から約 2.8 m分の井戸枠は抜き取られている。約 3.6 m下まで掘削したが、底には到らなかった。井戸枠抜き取り痕からは、多量の遺物が出土した。埋土には焼土・炭が多く含まれ、火災後の廃棄物を投棄したものとも考えられる。報告の土器もこの抜き取り痕出土のものである。また井戸枠内からは、屋根材である柿板が多数出土しており、周辺に柿葺き建物の存在が想定できる。

井戸は宅地４の奥に位置し、出土遺物も宅地４の住人に帰属するものと考えられる。

図 40　井戸 SE507（北東から）

図 41　井戸 SE507 土層断面（北から）

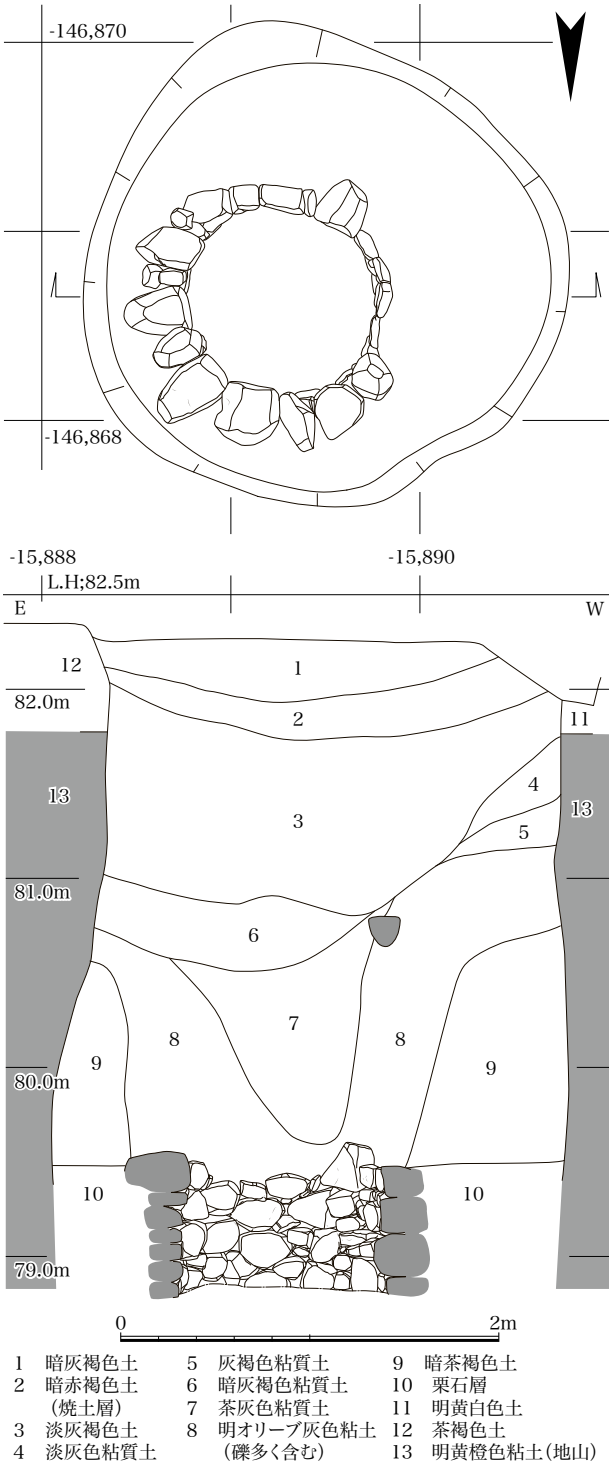


図 42　井戸 SE507　平面・立面・土層図（1/40）

12　ＳＫ656

平面形	隅丸長方形		
平面規模（m）	東西 6.8× 南北 3.8	深さ（m）	0.8
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、青花、円盤形土製品、土人形、軒瓦、丸・平瓦、桟瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘、煙管、刀子、刃物、火箸、銅鋲、簪、飾金具、銅線、銅板）、銅銭（洪武通寶、寛永通寶）、鞴羽口、坩堝、鉄滓、石製品（砥石、火打石）、木製品（漆器（椀、浅鉢、鏡箱）、下駄、櫛、栓、建築部材）、ガラス製品		

土坑ＳＫ 662 とならぶ発掘区内最大規模の土坑で、大量の遺物が出土した。土坑底は平坦で、北東隅には 1.3×1.8 m、深さ 0.5 mの平面方形の土坑がある。土器、瓦の他に建築部材や鉄釘も多数出土しており、建物除却時の廃材を投棄しているようである。最終的に、これら遺物を含む暗灰褐色土で一度に埋められている。

南側には重複する土坑ＳＫ 655 がある。この土坑もほぼ同時期のもので、塵芥処理用と考えられる。

ＳＫ 656 は、位置関係から宅地１に帰属する遺構で、宅地１では土坑埋没後に同規模の土坑ＳＫ 662 を宅地奥に新たに掘削している。ＳＫ 656 から多数の建築部材が出土することから、この時期に宅地１内で建物の除却・新築が行われたことが想定できる。紀年銘の墨書土器から安永２年（1773 年）以降のものである。

図 43　土坑 SK656（西から）

図 44　土坑 SK656 土層断面（西から）

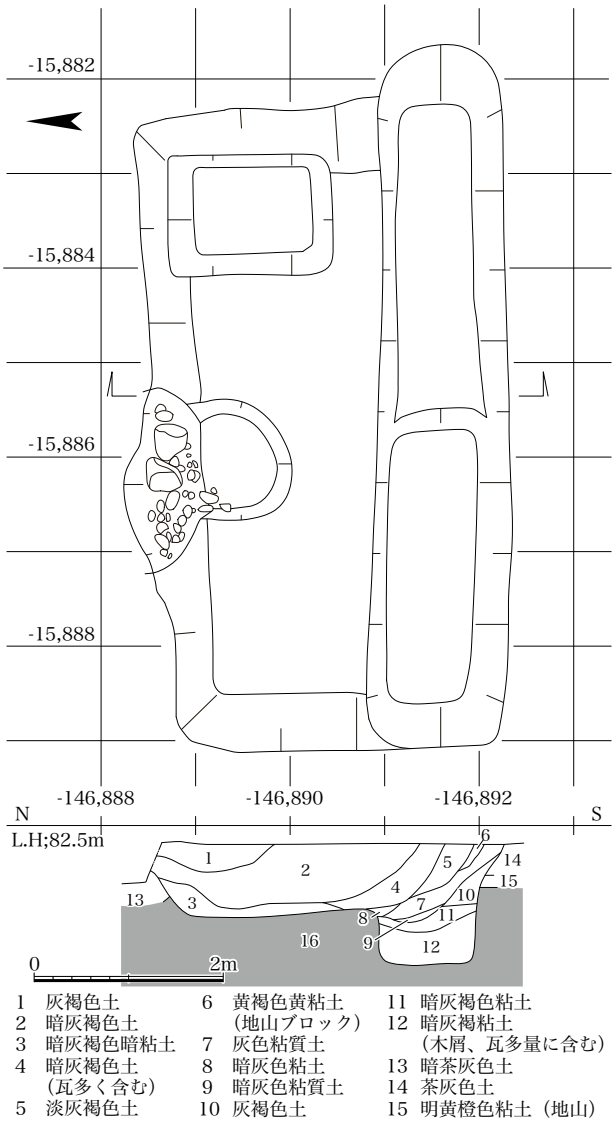


図 45　土坑 SK656　平面・土層図（1/80）

13　ＳＫ 662

平面形	隅丸長方形		
平面規模（m）	東西 8.0× 南北 3.0	深さ（m）	0.9
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、青花、土人形、軒瓦、丸・平瓦、桟瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘、刀子、銅線）、石製品（硯）、木製品（漆器椀、曲物、蓋、箸、櫛）、ガラス製品		

発掘区内最大規模の土坑で、大量の遺物（遺物整理箱 53 箱分）が出土した。土坑の底は平坦で、中央部のやや東寄りには約 1.3×0.9 m、深さ約 0.2 mの平面隅丸方形の土坑がある。断面形は台形で、土坑底の周囲には壁面の法面にあわせて杭が打ち込まれている。柵や横板はなかったが、擁壁のためと考えられる。底には暗灰色粘土が約 0.2 m堆積し、その上は大量の土器・瓦を含む灰色土で一度に埋まる。

土坑に擁壁があることから、一定の期間開口していたものと考えられる。土坑の機能が終了後に、廃棄物で埋めたものと考えられ、報告の土器もこの時期のものである。宅地 1 に帰属する遺構である。　（中島）

図 46　土坑 SK662 土層断面（東から）

図 47　土坑 SK662 土器出土状況

図 48　土坑 SK662（北西から）

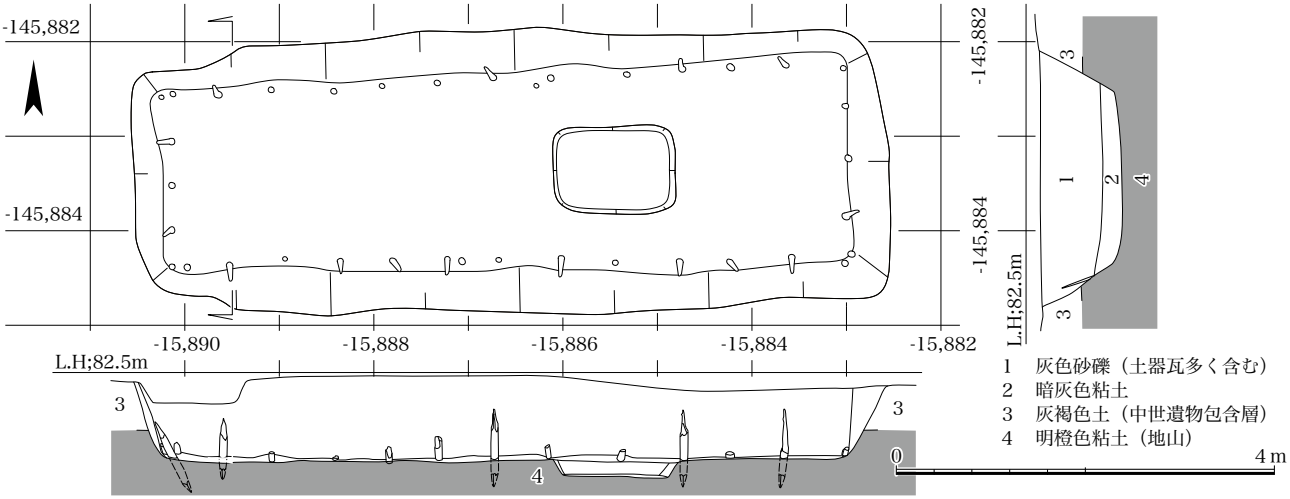


図 49　土坑 SK662　平面・立面・土層図（1/80）

第２章　出土土器

Ａ　報告の方法

ａ　報告資料の選択

ＨＪ第559次調査では、遺物整理箱783箱の遺物が出土した。その内訳は土器類が566箱、瓦類が198箱で、この他に18箱分の石製品、金属製品、木製品がある。出土遺物には奈良～近代までの各時期のものがあり、奈良町遺跡を考える上で重要な資料が得られている。今回の報告では、良好な土器の一括資料を選び、分類･計量･図化を行い、土器編年の基礎資料となるようにつとめた。

資料の選択にあたっては各時期を万遍なく扱うこととし、おおよそ11世紀から19世紀までの900年間を量･質ともに良好な13個の資料で代表させたが、残念ながら他の重要な資料は保留せざるをえなかった。

ｂ　土師器皿の大分類

奈良町遺跡出土の土師器皿は、基本的にすべて「手づくね」成形で、ロクロは使用していない。その製作技術については諸説あるが、奈良時代から江戸時代まで同一の製作技術で土師器皿を作りつづける点が、奈良の土師器生産の大きな特徴と言えよう。口縁部のヨコナデ調整と内面底のナデ調整だけが、観察される主要な調整である。外面底部には目立った調整はなく、指または掌の圧痕がまれに見られる。また、まれに内面にハケメ調整や板状工具の痕跡が見られるものがある

このような単純な製作方法の土師器皿であるが、仔細に観察すると、形態・ヨコナデ調整の範囲や施し方・胎土によって大きく以下の６群に分類できる。

・Ａ群　古代から系譜の追える一群で、形態は古代の杯・皿の延長線上にあり、比較的平坦な底部から屈曲して口縁部となる。胎土は砂を含み、焼成は良好なものが多い。存続期間が長いため、各種の形態変化をつづけながら江戸時代に至る。

11～13世紀前半頃は、胎土の色調や形態差が大きいが、13世紀の後半頃には赤褐色系の胎土のものが主流となり、形態的にも画一化する。鎌倉・室町時代にはいわゆる赤土器となる。

・Ｂ群　胎土が白色を意識した色調の一群で、いわゆる白土器とされるもの。胎土・焼成とも意図的に白く仕上げており、同時期のＡ群に比べ形態・法量分化が大きく異なる。年代的に京都の白色系の土師器皿（伊野編年[1]Ｇタイプ、小森・上村編年[2]Ｓタイプ）の影響を強くうけているものと考えられる。

・Ｃ群　灰白色の精良な胎土の一群で、形態的には比較的平坦な底部と直線的な口縁部の大～中型の皿が特徴的である。焼成はやや軟質である。Ａ・Ｂ群いずれとも系譜関係が追えず、他地域からの影響についても不明である。15～16世紀の土師器皿の半数ほどを占めるが、前代に比べ土師器皿全体の出土量は減少する。

・Ｄ群　形態と調整が特徴的な一群で、17～18世紀代の土師器皿の主体をなす。

底部の丸みが強く、底部と口縁部の境は不明瞭である。口縁部外面のヨコナデ調整の幅が狭く、口縁端部にしか調整が及ばない。内面は口縁端部にのみヨコナデ調整が施されるもの（ｄ－１群）と、幅広のヨコナデ調整で最後に口縁外側にナデ抜けるいわゆる「の」字ナデ調整のもの（ｄ－２群）がある。

全般的に器形の歪みが大きく、器壁も厚手である。胎土は砂の少ない精良なもので、黄橙色系の色調である。焼成はやや軟質気味で、時期によっては薄く層状に剝離するものも多い。

形態・調整に画一性を欠いており、生産集団は複数存在しているように見受けられる。

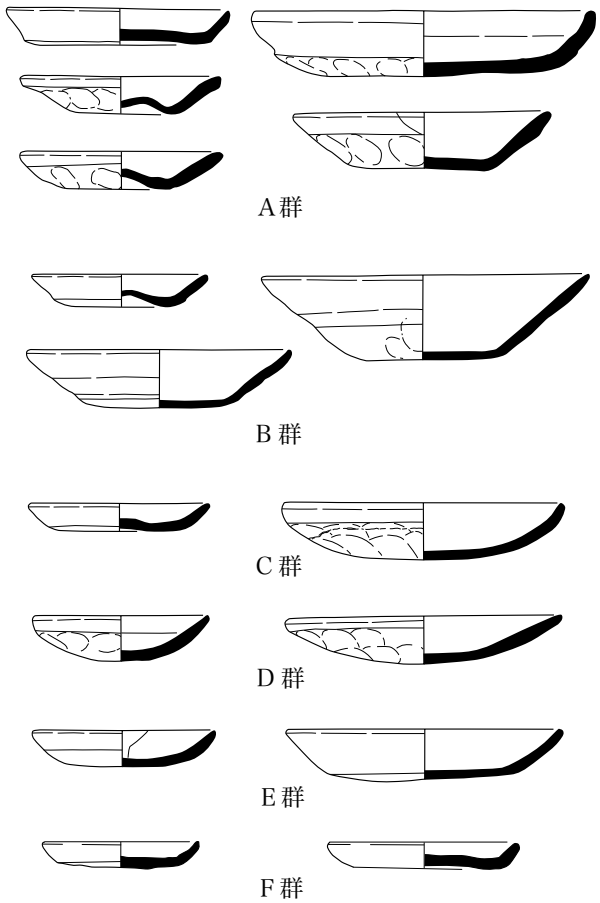


図50　土師器皿の大分類

・Ｅ群　Ｄ群土師器皿に比べ歪みが少なく、器形・調整とも丁寧な一群である。器形は、やや平坦な底部と緩やかに湾曲する短い口縁部からなる。口縁部はヨコナデ調整で、口縁部内面は幅広の「の」字ナデ調整である。器壁は薄く、焼成もよく全体的に端正な作りである。胎土は黄橙色・灰白系の色調である。

18 世紀代を中心に一定量出土しているが、遺跡・遺構によって出土量の差がはげしい。

・Ｆ群　褐色系の胎土で浅い皿の一群。平坦な底部と内湾する短い口縁部からなる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、この調整によって内面の底部と口縁部の境は浅く窪む。焼成は良好である。

胎土の特徴はＡ群土師器皿と類似しており、Ａ群土師器皿が消滅後にＦ群土師器皿が出現することから、生産地が同一とも考えられるが、器形・製作技術など連続性が確認できておらず、別群として取り扱う。

・その他　これらに含まれない土師器皿も出土しているが、他地域からの搬入品であったり、生産が継続せず変化が追えないものと考えられる。

以上見てきた各群の特徴からは、伝統的な製作技術の共有、共通の意図または要求による器形、採取粘土からみた製作地の近似性が読み取れる。そしてこれらの条件を満たすものとして、一地域内の土器生産者集団が想定される。この土器生産者集団は、１人から複数の製作者で構成されると考えられ、各群内での細分は構成員の数を反映するものもあろう。

ｃ　Ａ群土師器皿の分類

中世の土師器皿の主流となるＡ群は、生産期間の長さと規模から、型式変化を遂げながら推移してゆく。その変遷を追うために、さらに分類することとした。分類は、遺物整理作業時に佐藤が作成したものをもとに、中島と佐藤が協議し、最終的に中島が調整した。

まず皿の形式によって以下のように分類する。

皿Ａ　いわゆる「て」字状口縁の土師器皿

皿Ｂ　平底の皿

皿Ｃ　底部を押し上げる、いわゆる「へそ皿」

皿Ｄ　口縁部を内側に折り返す、いわゆる「コースター状」皿

皿Ｅ　平底だが底部が狭く、立ち上がり部から口縁部までが長いもの。奈良町遺跡内では一般的な形態ではないが、ＳＫ 636 から多量に出土している。

また、皿Ｂについてはさらに細分類を行う。分類については、個別の土師器皿を構成する諸属性について軽重を設け、①器高、②口縁部の形態、③口縁部ナデの段数、の順に設定した。これら諸属性の組み合わせによって形式・型式を設定している（表１、図 51）。各属性項目の細別は以下のとおりである。

①器高　各形態内における相対的な関係

Ⅰ　普通の深さ。

Ⅱ　口径に対し器高が高い。

Ⅲ　口径に対し器高が低い。

②口縁部の形態

１　外反する（ａ端部のみ短く外反する　ｂ底部から口縁部にかけて広く外反する）。

２　丸く収める。

３　口縁部を引き上げ気味に収める。

４　口縁部外面を強いヨコナデ調整によって沈線風に窪ませ、外反または外反風の口縁部とするもの。基本的に二段ヨコナデ調整を伴う。

この２要素の組合せで、12 種類の型式が設定でき、①と②の属性の組合せで型式名とした。しかし、実際に出土しない型式があるため、６種類の型式が確認でき、さらに細部の形態の変化を含めると、９種の型式となった。

またこれらには、口縁部のヨコナデ調整の差によって次の２種に分け、必要と認められた場合、型式名の後に付す。

ｘ　一段ヨコナデ調整。

ｙ　二段ヨコナデ調整。

ｄ　土師器皿計測の方法

各分類ごとに口径を計測し、細別・法量に従って破片数をカウントした。器高でのみ判別するＡ群皿ＢⅡ類は小片では判別できないため、すべてⅠ類にまとめた。なお計測対象としては、口径の８分の１以上が残存している破片を対象とした。破片数のカウントについては、接合個体も破片ごとに数量をカウントしている。

法量の計測に際しては 1㎝単位で読み取り、歪みの大きい破片については平均的数値を採用した。また口径は口縁部外側で、器高は中心線上を計測した。（中島・佐藤）

１）　伊野近富　1987 「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

２）　小森俊寛・上村憲章　1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』３（財）京都市埋蔵文化財研究所

表１　Ａ群土師器皿の分類表

形式	①器高	②口縁部形態	口縁部ナデ	大	小	その他	形式	細分	備考
皿Ａ	Ⅰ				○		Ⅰ		「て」字状口縁
	Ⅱ				○		Ⅱ		「て」字状口縁・器高が高い
皿Ｂ	Ⅰ	1	x・y	○	○		1-1a	a	口縁端部のみ外反させる
				○	○			b	口縁部全体を長く外反させる
		2	x・y	○	○		1-2a	a	通常の皿形態
				○			1-2b	b	成形やや粗く、杯形の器形。いわゆる赤土器
		3	x・y	○	○		1-3	a	口縁端部を上方へ引き上げる
				○	○			b	口縁端部を面取りする
				○	○			c	口縁端部を面取りの後ナデ仕上げし、端部下半を丸みをもっておさめる
		4	x・y	○	○		1-4		口縁端部を二段ナデ調整で外反風に仕上げる。
	Ⅱ		x・y	○	○		Ⅱ		口径に対し器高が高い
皿Ｃ					○			a	成形が丁寧で皿Ｂの小皿の底部を押し上げただけのもの
					○			b	成形がやや粗く、胎土は赤褐色を呈するいわゆる赤土器の「へそ皿」
皿Ｄ				○	○				コースター状
皿Ｅ				○					底部が狭いもの

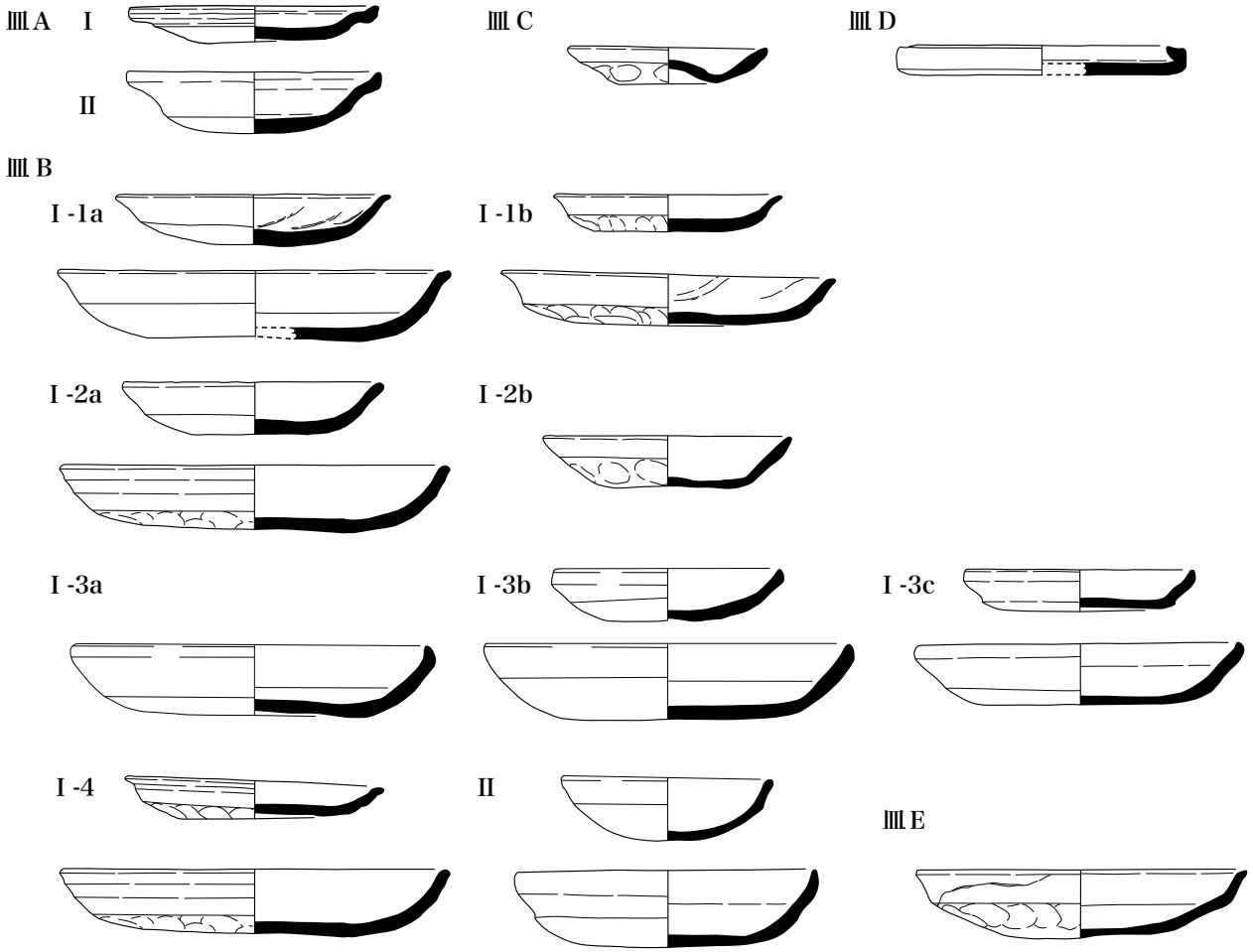


図 51　Ａ群土師器皿の分類図

B　出土遺物の概要

以下､各遺構の出土遺物について概要を報告したのち、土師器皿についてその様相を中心に解説する。なお、近世の土師器皿については、型式分類が整理作業実施時に確定しておらず、型式毎の分析は行っていない。また各遺構出土の遺物組成の詳細は表２・３（Ｐ 24・25）に一括して掲載しているので参照されたい。

１　ＳＥ 501（図 70）

a　遺物概要

土師器皿、黒色土器Ｂ類椀が出土した。破片総点数は 16 点。遺物総数が少なく組成比などを検討することはできない。

土師器皿Ｉ -1 類（１・２）は口径 11㎝前後で、薄手で器高が低い。

黒色土器Ｂ類椀（３）は底部外面を除く内外面に丁寧なヘラミガキを行い、見込み部には放射状の丁寧な暗文を施す。

b　土師器皿の組成内訳および口径分布

土師器皿は完形品が二個体出土しているのみで、分析に耐えうる資料ではない。

２　ＳＫ 613（図 70）

a　遺物概要

土師器皿・羽釜・鍋、瓦器椀・皿、須恵器鉢、白色土器皿・高杯が出土した。破片総点数は 7,482 点。

出土遺物のうち土師器皿の比率が約 96% と高率で、これに反比例するように瓦器椀の比率は 3.5% と低い。輸入陶磁器の比率は 0.2% で、すべて白磁である。

土師器皿はすべてＡ群で、皿Ａ（４～ 12）・皿Ｂ・皿Ｄ（35）がある。皿Ｂにはさらに、Ｉ - 1（13 ～ 15・28）・Ｉ - 2（16 ～ 21・29・30）・Ｉ - 4（22 ～ 26・31 ～ 35）型式がある。皿Ａの７、皿ＢＩ - 2 の 29 はやや深い器形であるが前後の時期への継続性が認められず、13 世紀に出現しているⅡ型式とのつながりも不明である。

土師器釜（41）は大和Ｂ型のもので、頸部外面には連続する無文のタタキ板の痕跡が、内面には無文のタタキの当て具痕跡が見られる。

瓦器椀（36 ～ 38）はいずれも大和型のもので、38 がⅡ段階Ａ型式、37 がＩ段階Ｄ型式、36 がＩ段階Ｃ型式のものである。いずれも高台接地部が摩滅し、37 は内面に被熱痕が残る。

瓦器皿（39・40）はいずれも内面のみヘラミガキを施し、見込み暗文は格子状の暗文を施す。

b　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 1,646 点、その他の口縁部破片が 2,412 点、底体部片が 3,108 点ですべてＡ群である。

形式ごとに見ると、皿Ａと皿Ｂがそれぞれ 1 / ３と 2 / ３を占めている。主体となる皿Ｂは、口径が 10㎝と 16㎝代に集中し大小の皿を作り分けていることがわかる。一方皿Ａは口径が 10㎝代に集中しており、明らかに小皿のみを製作している。

皿ＢはＩ - 1、Ｉ - 2、Ｉ - 4 が主体でそれぞれ約 20％前後ある。一方皿Ｂを､小皿（13㎝未満)､大皿（13㎝以上）としてその比率を型式別にみると、Ｉ - 1、Ｉ - 2、Ｉ - 4 の小皿:大皿比が、それぞれ 1 :0.6、1 :0.5、1 ：1.5 となる。Ｉ - 4 型式内の大皿の比率の高さが目立ち、型式ごとの偏りが見て取れる。

３　ＳＫ 618（図 71）

a　遺物概要

土師器皿・高台付皿・椀・鉢・羽釜、瓦器椀・小椀・皿、須恵器鉢・壷、灰釉陶器椀・壷、山茶椀、白色土器皿・高杯、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿）が出土した。破片総点数は 15,870 点。

出土遺物のうち約 97% を土師器皿が占める。土師器皿の比率はＳＫ 613 同様高い。瓦器椀はＩ段階Ｄ型式･Ⅱ段階Ａ型式の双方が混在する。その比率は 2.1％と低い。白色土器の出土比率はＳＫ 613 とほぼ同じであるが､回転台成形土師器が出土するのは当遺構のみである。輸入陶磁器の比率は 0.5% で、白磁が主体である。

土師器皿はすべてＡ群で、皿Ａ（42・43）・皿Ｂ・皿Ｄ（60）がある。皿Ｂにはさらに、Ｉ - 1（44 ～ 48・61・62）・Ｉ - 2（49 ～ 54・63・64）・Ｉ - 4（55 ～ 59・65 ～ 67）型式がある。

回転台土師器皿（69・70）はいずれも底部がヘラ切りで、69 はヘラ切り後板目の圧痕が残る。胎土は手づくねのものと同じである。

土師器鉢（68）は三足を貼り付け、脚部に面取りを施す。内外面ナデ調整を施すが、内面下半には板状工具によるナデが確認できる。

白色土器（78）は削り出しの輪高台で、畳付部に回転糸切痕を残す。

土師器釜（79）は大和Ｂ型のもので、頸部外面には連続する無文のタタキ板の痕跡が、内面には無文のタタキの当て具痕跡が見られる。

瓦器皿（71）は底部外面に放射状のユビオサエ痕が顕著にみられ、内面はジグザグ状の暗文を密に施す。

瓦器小椀（72）は体部外面に分割磨きを施し、口縁

部には使用痕と思われる5㎜程度の欠損が見られる。

瓦器椀（73）は大和型Ⅰ段階Ｄ型式のものである。口縁部外面に二段のナデを施し、高台接地部は使用のため、摩滅する。

輸入陶磁器は白磁で、75がⅡ類、74がⅣ類である。

東播系須恵器鉢（77）は口縁端部が体部に対して直交し、内外両面に突出する。口縁部はわずかに「S」字状に屈曲する。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が4,021点、その他の口縁部破片が5,381点、底体部片が5,959点ですべてＡ群である。

皿Ａの出土量が減少し６％足らずとなり、皿Ｂが主体となる。皿Ｂの口径は15㎝と10㎝代が中心で、ＳＫ613に比べ大皿において縮小傾向が見て取れる。皿Ａは口径10㎝代が中心でＳＫ613と同様の傾向である。

皿Ｂは型式別ではⅠ－４が42％と最大で、Ⅰ－１・２がそれぞれ25％前後でそれに次ぐ。小皿（13㎝未満）：大皿（13㎝以上）の比率は、いずれの型式も１：0.4～0.6と小皿が多数となる。

４　ＳＫ635（図72）

ａ　遺物概要

土師器皿・椀・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、須恵器鉢･壷、白色土器椀、国産陶器（常滑産甕、東海産鉢）、輸入陶磁器（青磁碗・皿、白磁碗・皿）が出土した。破片総点数は3,205点。

土師器皿の出土比率は約72％で多数を占めるが、瓦器が約17％と報告資料中で最大の比率を占める。また瓦質土器も約0.25％と僅かながら出現している。輸入陶磁器は0.3％で、青磁と白磁がほぼ同率で出土する。

土師器皿はすべてＡ群で、皿Ｂ・皿Ｃ（93）・皿Ｄ（94）がある。皿Ｂにはさらに、Ⅰ－２（80～88・95～97）・Ⅰ－３（89～92・98～102）・Ⅱ（103）型式がある。

土師器羽釜は大和Ｈ型（115）、大和Ｂ型（116）の他に、口縁部が直立する小型のもの（114）がある。115・116とも体部に無文のタタキ板と当て具痕跡がある。115は体部下半の被熱が著しい。

瓦器椀は口径13㎝代・器高４㎝代が中心でⅢ段階Ｂ型式のものである。

瓦質土器鉢（113）は、破片であるが方形になるものと考えられる。内外面を緻密なヘラミガキ調整する。

輸入陶磁器の白磁皿（166）は肉厚の削り出しの輪高台で、体部上半のみに釉を漬け掛けする。

東播系須恵器鉢（110～112）はいずれも口縁端部を内傾させ、外側部分をやや肥厚させる。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が810点、その他の口縁部破片が585点、底体部片が910点ですべてＡ群である。

皿Ａはほぼ姿を消し、新たに底部をやや上げ底状にする皿Ｃが出土する。皿Ｃは後代の「へそ皿」風のものではなく、底部全体が盛り上がる皿Ｃａ型式である。「へそ皿」を意図したものというより、口縁部の成形手法の結果によるものと考えるが、詳細は不明である。

皿Ｂは出土量の9.7割と大多数を占める。口径は13㎝と９㎝代が中心で、大皿と小皿に分かれる。皿Ｃは９㎝代の小皿のみである。

皿Ｂは型式別では、Ⅰ－２とⅠ－３で95％とほとんどを占める。また深い器形のⅡ形式が出土している。出土比率は計測できなかったが、大型破片中に含まれる率から見て、出土量は非常に少ないものと想定できる。

５　ＳＫ636（図73・74）

ａ　遺物概要

土師器皿・椀・鉢・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、須恵器鉢・壷、国産陶器（常滑産甕、東海産鉢・壷）、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿他）が出土した。破片総点数は14,749点。

土師器皿が約86％と大多数を占めるが、瓦器の比率が約13％とやや高めである。瓦質土器は約0.14％と僅かながらも占めている。輸入陶磁器は約0.14％で、青磁と白磁が同比率で出土する。

土師器皿はほぼすべてＡ群で、皿Ｂ・皿Ｃ・皿Ｄ・皿Ｅ（152～158）がある。皿Ｂにはさらに、Ⅰ－１（117～122・143・144）・Ⅰ－２（123～138・145～149）・Ⅰ－３（139～142・150・151）・Ⅱ（159）型式がある。また４点であるが京都産の白色系の皿が出土している。京都産の土師器皿は、年代を考える上で重要な資料となる。

墨書土師器皿（160）は太い眉と大きな目、団子状の鼻を描き、口角部には上向きの牙が表現されている。鬼面を描いたものと考えられる。

土師器羽釜（161・162）はいずれも大和Ｈ型のものである。161は内面を板状工具によるナデ調整を行う。

土師器椀（169）は非回転台成形の輪高台のもので、内外面ナデ調整で仕上げる。

瓦器皿（168）は内面見込み部に12～15往復のジグザグ状暗文を十字状に交差させる。形態・調整からみ

て、典型的な大和型ではなく、形式は不明である。

瓦器椀は大和型（166・167）以外に、非常に特徴的な型式不明もの（163 ～ 165）がある。後者は口径 13㎝代を中心とし、外面のヘラミガキは体部下半に及び、内面見込み部には２～３回転のらせん状暗文を施す。口縁端部の沈線がなく、器壁が厚い。大和型は、口径 13㎝代、器高４㎝代で、Ⅲ段階Ｂ型式のものである。

瓦質土器鉢は楠葉産（172）と大和産（173）がある。173 は内面をヘラミガキ調整し、見込み部には格子状の暗文を施す。外面はヘラケズリ調整後ヘラミガキ調整し、外底面には板圧痕がある。

東播系須恵器鉢（170）は口縁端部が内傾し、外面に広い面をもつ。内面の使用痕が著しい。

常滑産陶器甕（171）は口縁縁帯部が上下方向に発達し出している。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 4,996 点、その他の口縁部破片が 3869 点、底体部片が 3,849 点で京都産の４点を除きすべてＡ群である。Ａ群には皿Ｂ・皿Ｃ・皿Ｄ・皿Ｅがある。

皿ＥはＳＫ 636 に特有の形式で、土師皿全体の 15％を占める。他の遺構からの出土はほとんどない。口径は 13㎝前後が中心で小皿はない。

皿Ｂは土師器皿の 84％を占める。口径は 13㎝と９㎝代が中心で、大皿と小皿に分かれる。小皿はＳＫ 635 に比べ８㎝代の量が多く、時期的にやや後出するものと考えられる。型式別では、Ｉ－２が 44％、Ｉ－１が 23％、Ｉ－３が 15％の順となる。Ｉ－１の出土量が多い点も、この時期のものとしては特異である。Ⅱ類も確認できるが、出土量は少量と考えられる。口径はＳＫ 635 に比べ縮小している。

６　ＳＫ 638（図 75）

ａ　遺物概要

土師器皿・耳皿・羽釜、瓦器椀・小椀・皿、瓦質土器浅鉢、鉢類、白色土器椀、山茶椀、国産陶器鉢・鉢・甕、青磁皿・壷、白磁碗・皿・合子、黄釉盤・天目椀他が出土した。破片総点数は 2,641 点。

出土比率は土師器皿が約 91％で、一方瓦器椀が約４％と著しく低下する。土師器が完形で出土する率が高いのに対し、瓦器は破片資料が多く、両者のあり方は大きく異なる。また東播磨産の須恵器に対して、東海産の陶器の占める率が高い点も注目される。輸入陶磁器は約 1.2％で、白磁が約２/３を占め、白磁の主体は 12 世紀頃の玉縁碗または端反り碗である。13 世紀の奈良町遺跡内では龍泉窯系の青磁に比べ白磁の出土率が高く、１つの特徴である。

土師器皿はＡ群の他に、少量の京都産の白色系の皿がある。Ａ群には皿Ａ・皿Ｂ（174 ～ 177・180 ～ 186）・皿Ｃ（178・179）・皿Ｄ（187）がある。皿ＢはＩ－２（174 ～ 177・180 ～ 184・186）が主体でＩ－３（185）も少量ある。京都産の白色系の皿は「へそ皿」の小皿（188・189）と口径 11㎝のもの（190）が出土している。

土師器羽釜は大和Ｈ型（198・200）と口縁部を直立させるもの（199）である。

瓦器椀（191）は復原径 10㎝前後で内外面に疎らなヘラミガキ調整を施す。

瓦質土器深鉢（201）は外面を縦方向のヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整の後横方向のヘラミガキ調整を施す。外底面には離れ砂が付着する。

白色土器（192）は削り出しの低い輪高台である。

東播系須恵器鉢（194）口縁端部を内傾させて外側を断面三角形状に肥厚させる。

白色土器（192）は削り出しの低い輪高台である。

東海系陶器鉢（202）は、内底面には重ね焼きの痕跡が残る。山茶椀（193）は南部系のものである。

輸入陶磁器の白磁皿（195）はⅨ類の口禿皿で、外底面の釉薬はかき取る。天目椀（196）は下地塗の後黒釉を施す。胎土は暗褐色で砂粒をやや多く含む。盤（197）は黄褐釉を施釉する。胎土中に長石粒を多く含む。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 944 点、その他の口縁部破片が 719 点、底体部片が 752 点ある。この内Ａ群が 918 点、京都産が 26 点である。Ａ群には皿Ｂ・皿Ｃ・皿Ｄがある。ほとんどのＡ群の胎土は赤褐色を呈する。

皿Ｂ・Ｃの口径は８～９㎝代と 11㎝代が中心だが、9・10㎝代にも一定量の出土がある。口径による区別がやや不明確ではあるが、大皿と小皿の口径値が近接した結果であり、器形は明瞭に大小を作り分けている。大皿は平坦な底部と直線的な口縁部からなり、低い台形の器形になる。皿Ｃは口径が 8㎝代の小皿のみ出土する。京都産の「へそ皿」と比べると、器高が低い点・底部の押し出しが小さい点が見て取れる。

皿Ｂの型式はＩ－２が約 73％を占め、特に大皿では 85％と多数を占める。

７　ＳＫ 639（図 75）

ａ　遺物概要

土師器皿・羽釜、国産陶器甕が出土した。破片総点数は 190 点。

土師器皿の出土比率は約 99% と高比率である。遺物総量が少なく、遺構の形態や性格も他の土坑と異なり、単純な比較は出来ない。

土師器皿はほぼＡ群で構成され、加えて京都産の白色系の皿が少量出土する。Ａ群には皿Ｂ（206 ～ 211）・皿Ｃ（203）がある。京都産の皿（204・205）には「へそ皿」と平底の小皿がある。

土師器羽釜（212）は大和Ｈ１型で、鍔は短い断面台形のものである。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 120 点、その他の口縁部破片が 39 点、底体部片が 27 点ある。このうち京都産のものが 19 点で、あとはＡ群である。Ａ群には皿Ｂ・皿Ｃがあり、ほとんどの胎土は赤褐色を呈する。

皿Ｂ・Ｃの口径は８～９㎝代と 11㎝代が中心である。皿Ｃは口径が 8㎝代の小皿のみ出土する。

ＳＫ 638 とよく似た傾向を示しており、ほぼ同型式のものと考えられる。

８　ＳＫ 642（図 76・77）

ａ　遺物概要

土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦質土器浅鉢・擂鉢、鉢類、山茶椀、国産陶器擂鉢・鉢・甕、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿、褐釉陶器壷他）が出土した。破片総点数は 9,722 点。

出土比率は、土師器皿が 98% と高比率である。瓦質土器の比率は 0.4% と低い。須恵器の出土比率が低下する一方、東海産の甕の率が高くなる。輸入陶磁器の比率は約 0.16% で、青磁と白磁がほぼ同率で白磁の率がこの時期としては高い。

土師器皿は、Ａ群（213 ～ 247）とＢ群（250 ～ 280）で構成され、京都産のもの（249）が少量加わる。Ａ群は口径８㎝代の小皿と、10㎝代の大皿とからなり、小皿はすべて「へそ皿」である。胎土の色調は赤褐色で、いわゆる「赤土器」の典型例である。

Ｂ群皿は口径が７～ 16㎝代まであり、種類が多い。胎土の色調はやや黄味を帯びた白色で、いわゆる「白土器」の典型例である。

256 と 257 は白色系の色調をするものの、形態・調整手法が明らかにＡ群のものである。同様な例が他の資料にも確認できることから、Ａ群土師器の生産者が意図的に白色に焼き上げたものと考えられる。一方で口径が同時期のＡ群皿と同じ９・10㎝代のみしか出土しておらず、Ａ群皿の生産過程の製品を一部流用したものと想定できる。逆に、赤褐色に焼き上げたＢ群皿は現在確認していない。Ａ群とＢ群の関係を知る上で興味深い事実である。

土師器羽釜は、大和Ｂ型（286）と大和Ｈ型（287）、直交する口縁でやや小型のもの（281）がある。
286・287 は体部をタタキ成形し外面には無文のタタキ板、内面には無文の当て具痕跡が残る。287 の鍔は短く断面台形である。いずれも胎土は、浅黄色で精良である。281 は体部外面は未調整で、内面はナデ調整で部分的にハケメ調整がある。ややピンク味を帯びた白色の胎土である。

瓦質土器浅鉢（283）は内湾した口縁部で、内面と口縁端部外面に横方向のヘラミガキ調整をする。外面には菊花の大型単体スタンプ文を３つ一単位で施す。

山茶椀（285）は北部系のものである。内面は使用による摩滅のため、非常に平滑である。

白磁碗（284）はⅣ類のもので、混入品か。

褐釉陶器壷（282）は内外面に褐釉を施釉し、口縁端部の釉薬を掻き取る。口縁端部の一部には目跡が残る。胎土は灰色で、輸入陶磁器であるが、産地は不明。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 3,606 点、その他の口縁部破片が 3,816 点、底体部片が 2,142 点である。Ａ群が 1,739 点、Ｂ群が 1,867 点で、京都産が少量ある。

Ａ群の皿の口径はグラフでは８～ 10㎝までが一つのまとまりになっているが、おおよそ 8㎝代の小皿と 10㎝代の大皿に明瞭に作り分けている。小皿はすべて「へそ皿」である。大皿は底部が狭くなる（底部径が縮小）とともに口縁部が長くなり、よりいっそう台形味を強く帯びた器形となる。また口縁端部のヨコナデ調整の幅も狭くなる。

Ｂ群の皿の口径は７～ 13㎝まで万遍なく分布し、他の資料から見ても、７～ 16㎝まで１㎝単位で各口径が存在するようである。そのため、口径分布表に見られる口径の数値は、使用されたＢ群土師器の各口径ごとの多寡を示していることとなる。ＳＫ 642 の場合は、口径７㎝代と 10㎝代のものが最も使用されたものとなる。

９　ＳＸ 808（図 77・78）

ａ　遺物概要

土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢、鉢類、国産陶器擂鉢・鉢・甕、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿、青花碗・皿他）が出土した。破片総点数は 1,640 点。

土師器皿の出土比率が約 45% と前段階に比して著し

く減少する。これに反して瓦質土器が比率を高め、約37％と増加している。国産陶器も信楽産陶器の出現によって比率を約５％に上げている。輸入陶磁器の比率は約1.3％で、この中では白磁の比率が高い。土師器は未だ過半数を占めるとはいえ、その優位性が大きく変質していることが見て取れる。

土師器皿は、Ａ群（288～300）とＣ群（301～314）で構成される。

Ａ群は口径が７～８㎝代のものの他、20㎝代の特大のものが１点ある。口縁部の強いヨコナデ調整によって、内面の底部と口縁部の境が沈線状に窪むものが多く、また底部もやや上げ底状になる。胎土の色調はにぶい黄橙色系で、赤褐色に焼き上がるものはない。

Ｃ群は口径が７～13㎝代まで各種ある。胎土は灰白色系の色調で、砂分が少なく精良である。

323～325は土師器の蓋で、油煙墨製作時の採煤用の土器である。頂部に環状の取っ手があるが、欠損する。内面は密なヘラミガキ調整で、著しく煤が付着する。胎土は精良である。現在も油煙墨の採煙作業にはこの形態の土器が使用されており、現状では最古の類例の１つである。

土師器羽釜（316）は大和Ｉ型で、体部をタタキ成形し、外面には無文のタタキ板、内面には無文の当て具痕跡が残る。（315）は大和Ｈ型であるが、この時期のものとしては珍しく混入品か。

瓦質土器擂鉢（327・328）は、縦方向のハケメ調整の後、口縁部外面に横方向のハケメ調整を施す。328の内面には10本一単位の擂目がある。捏鉢（329）は、外面が縦方向のハケメ調整、内面が横方向の幅広ヘラミガキを密に施す。風炉（326）は内面ナデ調整、外面研磨を行う。内面には粘土接合痕が残る。

国産陶器には信楽産・備前産のものがある。319は信楽産の擂鉢で、４本一単位の擂目を有し内面下半は使用のため摩滅する。318は信楽産の壷で、肥厚するＴ字状口縁を持つ。年代的には古いものである。327は備前産の捏鉢で、体部外面中央に粘土接合痕が残る。焼成は良好で、使用痕はほとんど見られない。

輸入陶磁器の青磁碗（320）は龍泉窯系のもので、ヘラ描きの細蓮弁を外面に描く。釉薬は厚く、貫入がある。青花碗（321）はＥ群、皿（322）はＢ群である。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が242点、その他の口縁部破片が246点、底体部片が240点ある。このうちＡ群が110点、Ｃ群が132点ある。

Ａ群の皿は口径が７～８㎝代のものが中心で、大皿と小皿の峻別はできない。

Ｃ群の皿はＢ群同様に、７～13㎝まで１㎝ごとに各種の口径が存在している。ＳＸ808では口径９㎝代と12㎝代の出土が多い。

10　ＳＫ651（図79）

ａ　遺物概要

土師器皿・羽釜、瓦質土器壷・鉢類、国産陶器椀・皿・国産磁器碗・皿が出土した。破片総点数は1,020点。

土器組成は土師器皿の出土比率が84.8％と同時期の他の遺構と比べて非常に高いが、出土遺構の特異性とも考えられる。国産磁器が出現しはじめる時期である。

土師器皿はＡ群（330～335）が主体で、Ｄ群（336～339）が少量ある。

Ａ群は口径が７～８㎝代のもので、ＳＸ808に比べ底部は平坦である。胎土の色調はやや橙色を帯びるものが多く、再び赤色を意図して焼き上げているようである。完形で出土するものが多い。

Ｄ群は口径が７～13㎝代まで各種ある。胎土の色調は黄橙色系で、砂分を含まない精良な胎土である。

土師器羽釜（341）は、体部をタタキ成形するが、器壁は前代のものに比べ厚い。口径が大きくなり器高も縮小し、浅鍋化がすすむ。法量的に大和Ｉ型の最終末のもので、同形態・同法量の外型作りの炮烙が供伴する例がある。

瓦質土器壷（342）はいわゆる火消壷で、焼成は良好で燻しがかかる。外面底部付近に縦方向の板状工具のナデ調整痕が残る。内面は板状工具による横方向のナデ調整で、口縁付近はハケメ調整である。

国産磁器は肥前産のみで、丸碗（30）の他青磁染付の天目碗がある。

国産陶器は肥前産の椀のみである。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が120点、その他の口縁部破片が84点、底体部片が68点ある。Ａ群が61点、Ｄ群が59点ある。

Ａ群は口径が8㎝代のもののみで、Ｄ群は７～13㎝代まで各種あり、10㎝と12㎝代のものが多い。

11　ＳＥ507（図79）

ａ　遺物概要

土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器椀・皿・擂鉢・甕他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は3,993点。

出土比率は土師器が約58％と依然高く、土師器皿に

限っても約46%を占めている。残りの40%を瓦質土器と国産陶磁器が分け合う。陶器は信楽産、磁器は肥前産が主体である。

土師器皿はＡ（343）・Ｄ（346～362）・Ｅ（344・345・363～365）群で構成され、Ｄ群が主体となる。以下、江戸時代の土師器皿は、遺物整理時には型式の確定ができていなかったため、各群の出土点数・口径の分布は不明である。

Ａ群は口径６～７㎝代で、口径の縮小が進む一方、器高がやや高くなっている。胎土の色調は橙色系である。

Ｄ群は、口径が７・８・10・11・12㎝代のものを確認している。胎土の色調は黄橙色系である。

Ｅ群は、口径が６～７・10・12㎝代のものを確認している。いずれも底部には、掌の圧痕が規則的に連続してある。胎土の色調は黄橙色系である。

土師器炮烙（368・369）は、外型作りの底部に口縁部を作り付ける。口縁部と底部の接合方法には２種ある。底部の粘土円盤の端部を外反させその上に口縁部を接合するもの（Ａ技法）と、底部の粘土円盤の内面端部の上に口縁部を接合し、その後接合部分の外面をヘラケズリ調整するもの（Ｂ技法）である。Ａ技法は、口縁部と底部の境の突起部分または鍔の下面部分に、外型から外した痕跡が底部から連続してあり識別は容易である。またＡ技法では鍔を新たに貼り付ける必要がなく、Ｂ技法では新たに鍔を貼り付ける点で大いに異なる。

368は、Ａ技法で鍔のない型式で、胎土の色調は橙色系である。369は、Ｂ技法で鍔のある型式で、胎土の色調は黄橙色系である。

370は土師器鉢で、平底で内湾した口縁部である。内外面を丁寧にヨコナデ調整し、底部は成形台から外したままの未調整である。胎土の色調は黄橙色系で、産地は不明である。内底面には煤が付着する。

国産磁器は肥前産のみである。366は、体部外面に草花文を描く丸碗である。

国産陶器には、肥前産・信楽産がある。367は肥前産のいわゆる「京焼風陶器」椀で、外面に山水文を描き高台内に印を押捺する。371は信楽産の擂鉢である。見込み部には格子状に擂目をいれる。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が1,332点、その他の口縁部破片が297点、底体部片が225点ある。Ｄ群を主とし、Ａ群とＥ群が少量含まれるが、検討できるデータは限られる。

Ａ群皿は口径６～７㎝代のもののみ確認できる。

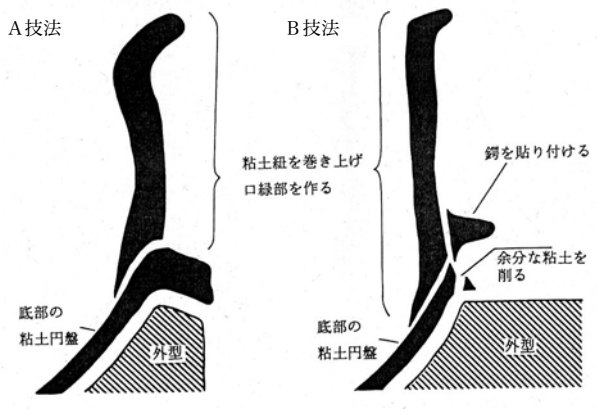


図52　土師器炮烙の製作技術模式図

Ｄ群の口径は、７～12㎝代まで各種あるようで、７～８㎝代のものが目立つ。Ｅ群については、数種類の口径が確認できるが詳細は不明である。

口径が７㎝代のみのＡ群と、数種類の口径の皿を作りわけるＤ・Ｅ群が存在することは明らかなようである。

12　ＳＫ656（図80）

ａ　遺物概要

土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器椀・皿・擂鉢・鍋他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は11,087点。

出土比率は、土師器が約50%、瓦質土器が約４％と前代から減少する一方、国産陶磁器が合わせて約45%と大きく増加している。この時期としては土師器皿も多数出土しており、信楽産陶器と肥前産磁器の増加がそれを上回ったことが要因である。

土師器皿はＡ群（372～375）がわずかながら出土し、Ｄ群（382～394）とＥ群（376～380）が主体となる。

Ａ群は、口径が７㎝前後である。器高が高く深みのある皿形のものの他、扁平で板状の器形（372・373）がある。後者は口縁部のヨコナデ調整も施されておらず、胎土も砂礫の多い粗い作りである。他現場でもしばしば出土しており、何らかの用途で作り分けられているようである。胎土は橙色系の色調である。

Ｄ群は、口径７・９・10・11・12㎝代のものを確認している。口径が７㎝前後のものの出土が多く見られる。内面を、「の」字状にヨコナデ調整するものの比率が高い。

Ｅ群は、口径７・10・11㎝代のものを確認している。胎土は橙色系の色調である。

381は外型作りと考えられる土師器皿で、１点出土している。底面は未調整である。

土師器高台付皿（395・396）は手づくね成形で、内外面はすべてユビオサエ調整で、口縁端部や脚部の裾すら一切ヨコナデ調整しない。胎土に砂が多く、Ａ群の土

師器皿に特徴が似る。

土師器炮烙は､外型作りの底部に口縁部を作り付ける。いずれもＡ技法で、鍔を作るもの（398）と、鍔のないもの（397）とがある。橙色系の胎土である。

国産磁器は肥前産のもののみである。丸碗が多く、広東碗は出土していない。しかしながら丸碗には素描きの壽文（401）・梵字文などがあり、広東碗の出現時期の頃と考えられる。使用者の焼き物の嗜好を反映しているのであろうか。碗の 402・403 は、断面台形のどっしりとした高台で、畳付部は露胎である。403 の外面には神輿が描かれ、対面には宋の詩人杜常の三体詩「華清宮」が書かれる。

国産陶器は信楽産のものが多数を占め、多くの器種をまかなっている。399 は鉄釉の仏飯具で、外底部には「安永貳癸巳 / 七月 / 廿八日 / イ / 奉徳 / 胤清无悦 / 尊前」と墨書される。安永２年（1773）の有紀年銘資料として貴重である。405 は信楽産の擂鉢で、見込み部には放射状の擂目がある。404 は堺産の擂鉢で、見込み部にはウールマーク状の擂目がある。

ｂ　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 2,785 点、その他の口縁部破片が 920 点、底体部片が 767 点である。Ｄ群を主とし、Ａ群とＥ群が少量含まれるが、ＳＥ 507 同様検討できるデータは限られる。

Ａ群皿は口径６～７㎝代のもののみ確認できる。

Ｄ群の口径は、７～12㎝代まで各種あるようで、７～８㎝代のものが目立つ。Ｅ群も数種類の口径が確認できるが詳細は不明である。

ＳＥ 507 と同様に、口径が７㎝代のみのＡ群と、数種類の口径の皿を作りわけるＤ・Ｅ群が存在することは明らかなようである。

13　ＳＫ 662（図 81・82）

ａ　遺物概要

土師器皿・炮烙・舌出し、瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器椀・皿・擂鉢・鍋他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は 9,783 点。

出土比率は、土師器が約 20% に激減し、瓦質土器のも約 5.8% と低い。これに対し国産陶器が約 54%、国産磁器が約 20% と、国産陶磁器が土師器に代わって土器組成の主体となる。特に施釉陶器の増加が目立ち、その多くは京焼系の信楽産陶器である。

土師器皿はＦ群（406 ～ 426）が新たに出現する。Ｄ群（427 ～ 432）とＥ群（433 ～ 437）も引き続き存在する。各群の正確な比率は不明だが、Ｆ群の比率が他の群に比べ高いようである。

Ｆ群は、口径が６・７・12㎝代のものがあり、６㎝代のものが多い。胎土はすべて橙色系の色調である。

Ｄ群は、口径６㎝代のもののみ確認している。いずれも内面を「の」字状にヨコナデ調整する。胎土は灰白色系の色調である。

Ｅ群は、口径６㎝と 11㎝代のものを確認している。胎土は灰白色系の色調である。

土師器高台付皿は、手づくね成形で、内外面はすべてユビオサエ調整で、口縁端部や脚部の裾すら一切ヨコナデ調整しない。439 は、脚部内面に粘土板を重ね合わせた痕跡が残る。440 には脚部内面に「春日社」の墨書がある。胎土の特徴がＡ群に似るもの（438・440）とＤ群に似るもの（439）とがある。

446 は土師器で、浅鉢の口縁部の一端を舌状にのばした麻浸しと呼ばれる器形である。本来は麻糸を紡ぐ際に使用される土器であるが、茶器の灰器・花活けに転用される例がある。なお 446 は舌部を欠損する。手づくね成形で、内面と口縁部をヨコナデ調整する。外面は未調整であるが表面が平滑で、皿状の外型を用いてるように見られる。

土師器炮烙は､外型作りの底部に口縁部を作り付ける。すべてＡ技法で、鍔または鍔風のものを作るもの（447・500・501）と、鍔のないもの（448・449）とがある。500 と 501 の鍔の外側はヘラケズリ調整される。447 ～ 449 は橙色系の胎土で、500・501 は黄橙または灰白色系の胎土である。

国産磁器には肥前産と瀬戸産が多数を占めるが、三田産や産地不明のものもある。504・506 が肥前産、505・507 が瀬戸美濃産である。505 は同じ絵柄のものが数個体ある。

国産陶器は信楽産のものが多数を占め、そのほとんどは京・信楽系と称される製品である。442 ～ 445・441・510 は灰釉の灯明皿と灯明受けとカンテラ。511 は鉄釉の土瓶、512 は灰釉の行平鍋、513 は鉄釉の三耳壷でいわゆる腰白茶壷、515 は高台付の擂鉢で、見込み部には放射状の擂目がある。外底面に「六つ□」と墨書する。

508 と 509 は奈良の赤膚産の皿で、外面の高台付近に瓢箪で囲われた「赤ハタ」の刻印がある。509 は赤褐色の胎土で、暗緑色の灰釉を掛け内面には鉄絵で草花文を描く。508 は黄橙色系の胎土で、灰オリーブ色の灰釉を掛け内面には白泥で文様を描く。この他「赤ハタ」の刻印があるものが１点、刻印はないが 508 と同一のも

表２　遺構出土土器組成表１

種類	産地等	器種	SE501		SK613		SK618		SK635		SK636		SK638		SK639	
			点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)
土師器		皿	6	60.00	7166	95.78	15361	96.80	2305	71.92	12714	86.20	2415	91.44	187	98.42
		高台付皿					1	0.01								
		耳皿											1	0.04		
		回転台皿					7	0.04								
		椀					1	0.01	1	0.03	3	0.02				
		鉢									29	0.20				
		香炉					7	0.04								
		甕					1	0.01								
		羽釜			32	0.43	53	0.33	242	7.55	37	0.25	44	1.67	1	0.53
		鍋			2	0.03										
		不明					1	0.01			1	0.01				
	小	計	6	60.00	7200	96.23	15470	97.24	2548	79.50	12784	86.67	2460	93.14	188	98.95
須恵器	東播磨系	鉢					2	0.01	28	0.87	7	0.05	5	0.19		
		甕							15	0.47			1	0.04		
		器種不明			1	0.01					30	0.20	1	0.04		
	産地不明	器種不明					3	0.02	8	0.25						
	小	計			1	0.01	5	0.03	51	1.59	37	0.25	7	0.27		
黒色土器		B類椀	4	40.00												
	小	計	4	40.00												
瓦器		椀			217	2.90	305	1.92	545	17.00	1840	12.48	100	3.75		
		皿			46	0.61	33	0.21	6	0.19	29	0.20	3	0.11		
		小椀					1	0.01					1	0.04		
	小	計			263	3.51	339	2.14	551	17.19	1869	12.68	104	3.90		
瓦質土器		鉢							7	0.22	21	0.14	11	0.42		
		甕							1	0.03						
		不明					1	0.01								
	小	計					1	0.01	8	0.25	21	0.14	11	0.42		
白色土器		皿			1	0.01	5	0.03								
		椀							2	0.06			1	0.04		
		高杯			2	0.03	1	0.01								
	小	計			3	0.04	6	0.04	2	0.06			1	0.04		
灰釉陶器		壺					1	0.01								
		椀					1	0.01								
	小	計					2	0.01								
山茶椀	小	計					1	0.01					2	0.07		
国産陶器	焼締陶器	鉢類							1	0.03	1	0.01	8	0.30		
		甕類							34	1.06	14	0.09	15	0.57	1	0.53
		壷類									2	0.01	1	0.04	1	0.53
		小　計							35	1.09	17	0.12	24	0.91	2	1.05
	施釉陶器	椀類														
		他									1	0.01				
		小　計									1	0.01				
	小	計							35	1.09	18	0.12	24	0.91	2	1.05
輸入陶磁器	青磁	碗類					2	0.01	3	0.09	6	0.04				
		皿							1	0.03	3	0.02	1	0.04		
		壺											2	0.08		
		他									1	0.01				
		小　計					2	0.01	4	0.12	10	0.07	3	0.11		
	白磁	碗類			14	0.19	42	0.26	3	0.09	6	0.04	13	0.49		
		皿			1	0.01	39	0.25	1	0.03	1	0.01	6	0.23		
		合子											3	0.11		
		他					1	0.01	2	0.06	2	0.01	2	0.08		
		小　計			15	0.20	82	0.52	6	0.19	9	0.06	24	0.91		
	陶器	壺									1	0.01	1	0.04		
		椀											2	0.08		
		他											2	0.08		
		小　計									1	0.01	5	0.19		
	小	計			15	0.20	84	0.53	10	0.31	20	0.14	32	1.21		
合		計	10	100.00	7482	100.00	15870	100.00	3205	100.00	14749	100.00	2641	100.00	190	100.00

表３　遺構出土土器組成表２

種類	産地等	器種	SK642		SX808		SK651		SE507		SK656		SK662	
			点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)
土師器		皿	9564	98.37	728	44.39	865	84.80	1854	46.43	4472	40.34	1521	15.55
		高台付皿	3	0.03			1	0.10	4	0.10	6	0.05	3	0.03
		羽釜・鍋	71	0.73	189	11.52	36	3.53	157	3.93	108	0.97	85	0.87
		焙烙							262	6.56	749	6.76	350	3.58
		鉢類									114	1.03	7	0.07
		焜炉類									141	1.27	2	0.02
		他			8	0.49	1	0.10	5	0.13	16	0.14	8	0.08
		不明							17	0.43	2	0.02		
	小	計	9638	99.14	925	56.40	903	88.53	2299	57.58	5608	50.59	1976	20.20
須恵器	東播磨系	鉢	5	0.05										
		甕	1	0.01										
	小	計	6	0.06										
瓦器		椀	32	0.33										
		皿	3	0.03										
		他	1	0.01										
	小	計	1	0.01										
瓦質土器		擂鉢・捏鉢	1	0.01	142	8.66			50	1.25	1	0.01	1	0.01
		鉢類	9	0.09	452	27.56	22	2.16	541	13.55	416	3.75	318	3.25
		浅鉢	4	0.04									25	0.26
		焜炉類											200	2.04
		他	3	0.03	8	0.49	13	1.27	18	0.45	26	0.23	4	0.04
		不明	22	0.23	7	0.43	1	0.10	1	0.03	36	0.32	15	0.15
	小	計	39	0.40	609	37.13	36	3.53	610	15.28	479	4.32	563	5.76
山茶椀	小	計	1	0.01										
国産陶器	焼締陶器	椀類	1	0.01	2	0.12								
		皿類	2	0.02										
		鉢類	1	0.01	34	2.07	4	0.39	45	1.13	129	1.16	99	1.01
		甕類	17	0.17	47	2.87	3	0.29	104	2.60	181	1.63	111	1.13
		他			1	0.06					2	0.02	3	0.03
		小　計	21	0.22	84	5.12	7	0.69	149	3.73	312	2.81	213	2.18
	施釉陶器	碗類					20	1.96	176	4.41	462	4.17	483	4.94
		皿類					5	0.49	53	1.33	74	0.67	177	1.81
		鉢類					16	1.57	199	4.98	583	5.26	452	4.62
		壷・瓶・甕類					3	0.29	69	1.73	618	5.57	1404	14.35
		水注類									303	2.73	848	8.67
		鍋釜類					1	0.10	6	0.15	270	2.44	1172	11.98
		蓋類					1	0.10	1	0.03	119	1.07	471	4.81
		他							1	0.03	11	0.10	35	0.36
		小　計					46	4.51	505	12.65	2440	22.01	5042	51.54
	小	計	21	0.22	84	5.12	53	5.20	654	16.38	2752	24.82	5255	53.72
国産磁器		碗類					20	1.96	347	8.69	1778	16.04	1324	13.54
		皿類							29	0.73	138	1.24	177	1.81
		鉢類					1	0.10	25	0.63	78	0.70	216	2.21
		壷・瓶類							13	0.33	102	0.92	63	0.64
		蓋類							3	0.08	92	0.83	157	1.60
		水注類							5	0.13	12	0.11	17	0.17
		他									4	0.04	3	0.03
	小	計					21	2.06	422	10.57	2204	19.88	1957	20.01
輸入陶磁器	青磁	碗類	2	0.02			3	0.29	3	0.08	3	0.03	8	0.08
		皿			1	0.06								
		他	3	0.03							3	0.03		
		小　計	5	0.05	1	0.06	3	0.29	3	0.08	6	0.05	8	0.08
	白磁	碗	2	0.02	5	0.30	1	0.10	3	0.08	14	0.13	16	0.16
		皿	4	0.04	5	0.30	2	0.20	1	0.03	2	0.02	1	0.01
		他	2	0.02	4	0.24	1	0.10	1	0.03	8	0.07	2	0.02
		小　計	8	0.08	14	0.85	4	0.39	5	0.13	24	0.22	19	0.19
	青白磁	皿	1	0.01										
	青花	碗			2	0.12					3	0.03	4	0.04
		皿			3	0.18					8	0.07		
		他			1	0.06								
		小　計			6	0.37					11	0.10	4	0.04
	陶器	壷	2	0.02							2	0.02		
		椀			1	0.06								
		小　計	2	0.02	1	0.06					2	0.02		
	小	計	16	0.16	22	1.34	7	0.69	8	0.20	43	0.39	31	0.32
合　計			9722	100.00	1640	100.00	1020	100.00	3993	100.00	11087	100.00	9783	100.00

のが１点ある。さらに 508 と似た胎土の製品が数多くあり、無刻印の赤膚産陶器が他にもあることが考えられる。514 は堺産の擂鉢で、見込み部にはウールマーク状の擂目がある。502 は北九州上野産の壷で、小倉名物の三官飴の容器である。１個体のみ出土した。

503 は青花鉢で、古い型式で伝世品か。

b　土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 741 点、その他の口縁部破片が 466 点､底体部片 314 を数える。D･E･F 群から構成されるが､正確な比率は不明。概観すると、F 群が主流を占めるようである。

F 群の口径は６・７・12㎝代が確認できるが、６㎝代を主に生産しているようである。

D・E 群は、口径６㎝と 11㎝代のものを確認しているが、前代のように多様な口径が存在するかは不明。ただD群の口径は６㎝代が多く、これ以上の口径はE群が占めており、D・E 群間に作り分けがあるようにも見られる。いずれにしろ､江戸時代後半の報告資料は少なく、今後の課題である。　（中島・佐藤）

C　出土土器の時期的変遷

これら報告した 13 遺構の出土土器の組成を棒グラフ化したのが下図である。

土師器は、中世を通じて９割ほど占めており、江戸時代のＳＥ 507 の頃から構成比を減少させてゆく。これは一見土師器の減少のように見られるが、江戸時代の遺構からの土師器の出土量は約 2,000 ～ 5,600 点あり、中世の遺構と比べても遜色はない量である。土師器の比重の低下はむしろ、国産陶器の増加による出土量全体の増加が原因と考えられよう。しかし一方で、一万点を超すような土師器の出土がなくなっており、土師器の大量消費という行為も失われていったことが想定できる。その時期は、むしろ中世の後半代のＳＫ 624 の頃を最後とするようである。　（中島）

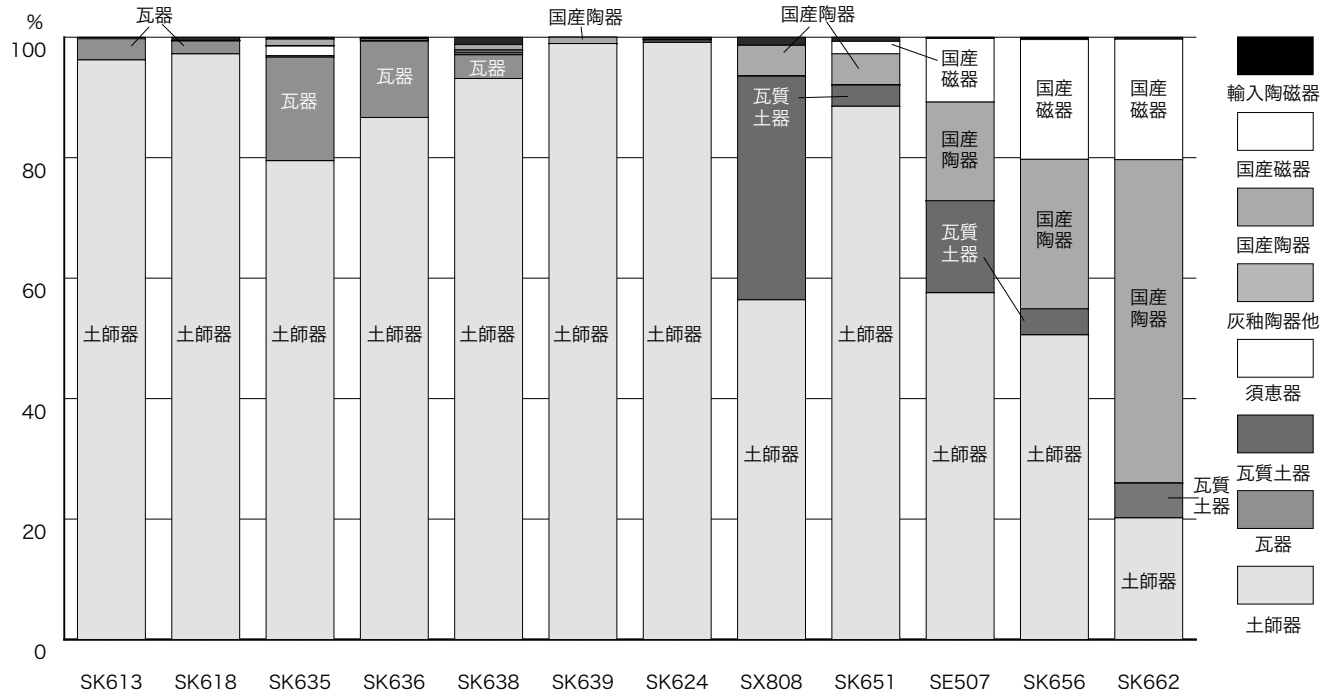


図 53　ＨＪ第 559 次調査　遺構別出土土器組成

表４　ＳＫ 613　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿A				13	49	381	35	12	1	1			490	2	492	
皿B	Ⅰ-1			6	25	150	51	23	8	23	41	76	255	148	403	
	Ⅰ-2			6	12	133	27	15	4	28	29	29	193	90	283	
	Ⅰ-3a					10		1	1	2		1	11	4	15	
	Ⅰ-3b												0	0	0	
	Ⅰ-3c												0	0	0	無効破片数
	Ⅰ-4			3	12	111	22	23	19	40	80	122	171	261	432	口縁
	小計	0	0	15	49	404	100	62	32	93	150	228	630	503	1133	2412
皿C													0	0	0	体部
皿D					1	7	2	8	3				18	3	21	3108
皿E													0	0	0	合計
合　計				28	99	792	137	82	36	94	150	228	1138	508	1646	7166

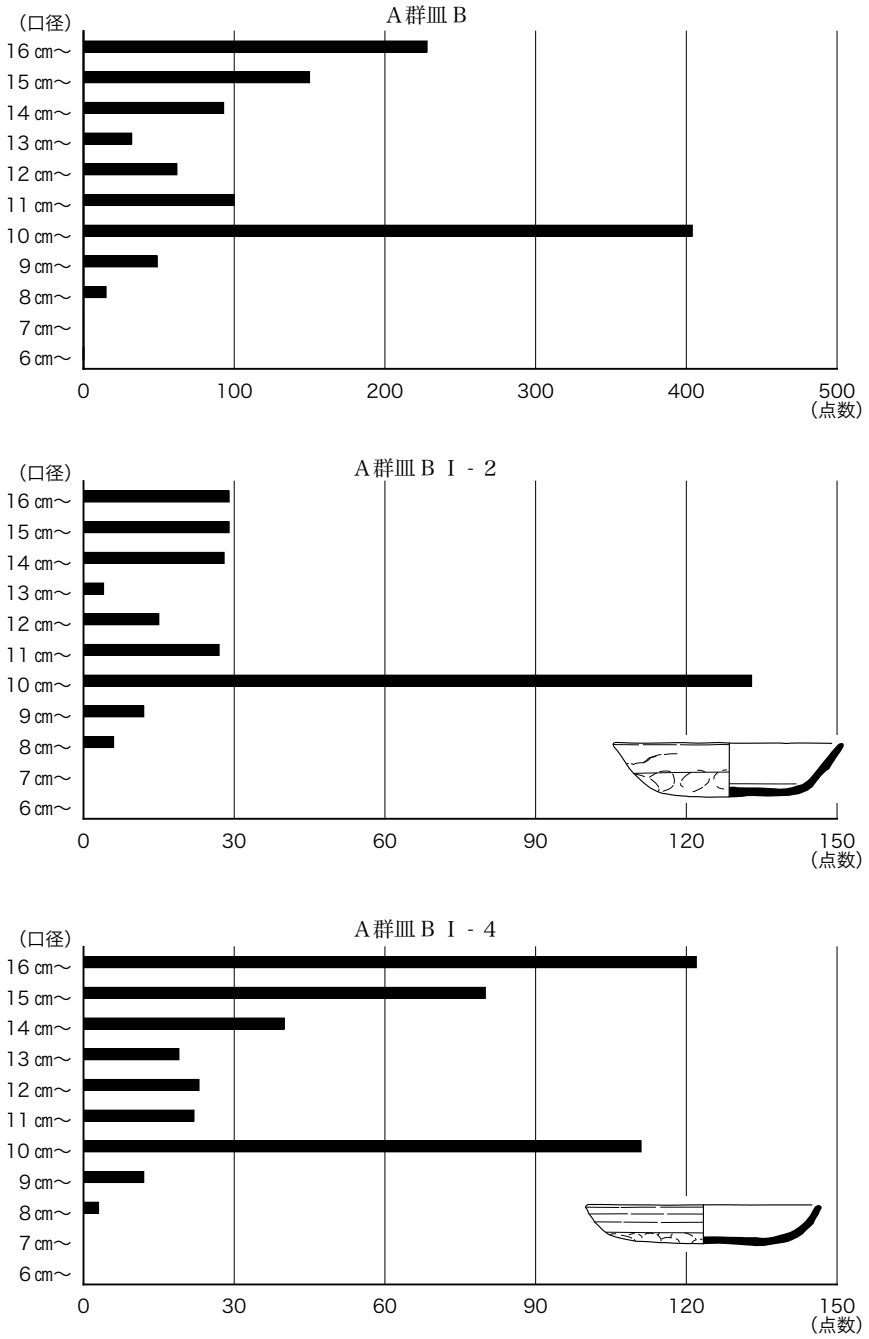


図 54　ＳＫ 613　土師器型式別口径分布

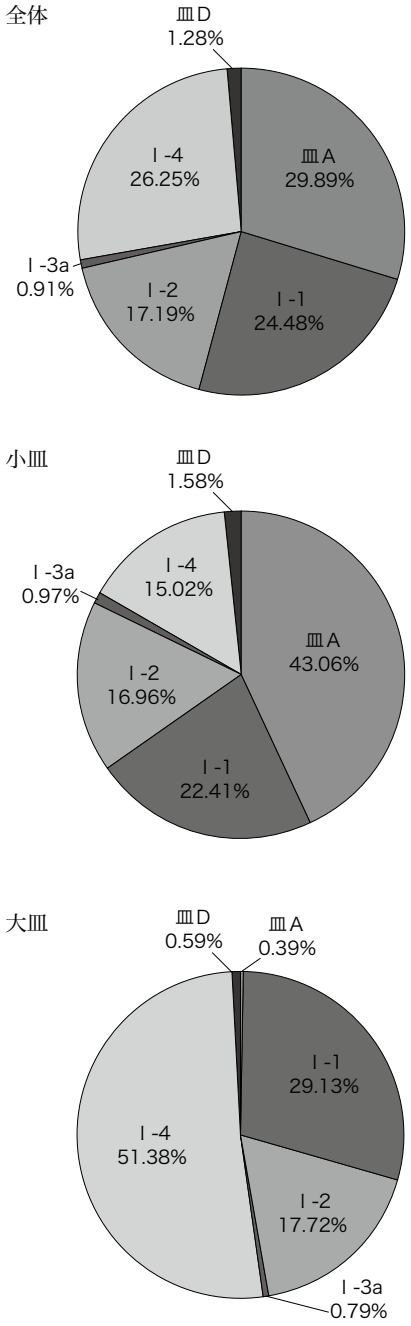


図 55　ＳＫ 613　土師器型式別出土比率

表５　ＳＫ 618　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿A				17	43	141	24	3					228	0	228	
皿B	Ⅰ-1			37	89	486	111	35	47	73	94	54	758	268	1026	
	Ⅰ-2			48	98	403	95	68	47	104	133	57	712	341	1053	
	Ⅰ-3a				1	5	4	1		1			11	1	12	
	Ⅰ-3b												0	0	0	
	Ⅰ-3c												0	0	0	無効破片数
	Ⅰ-4			22	82	704	187	65	95	144	282	107	1060	628	1688	口縁
	小計	0	0	107	270	1598	397	169	189	322	509	218	2541	1238	3779	5381
皿C													0	0	0	体部
皿D						4	5	4	1				13	1	14	5959
皿E													0	0	0	合計
合　計		0	0	124	313	1743	426	176	190	322	509	218	2782	1239	4021	15361

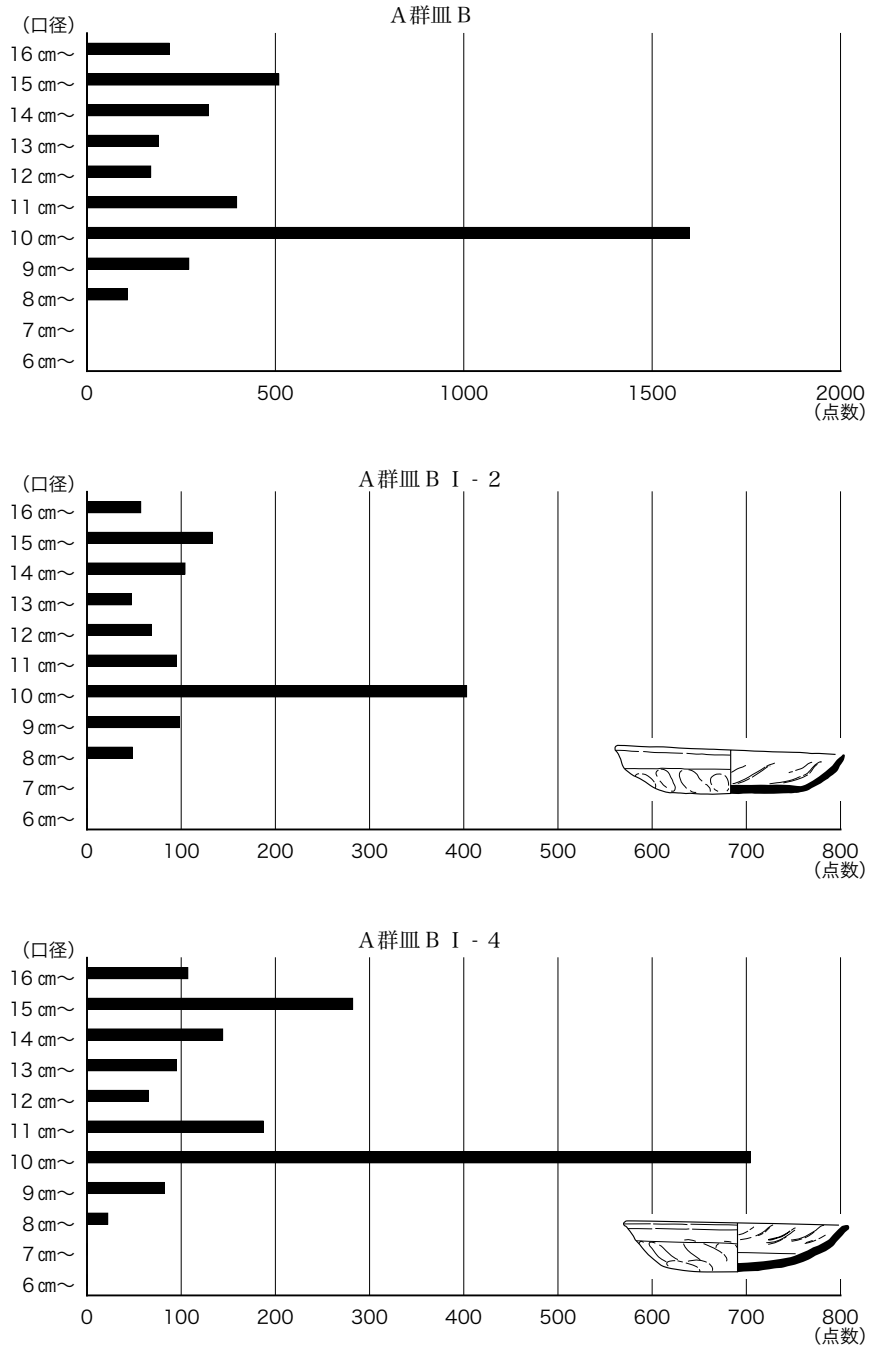


図 56　ＳＫ 618　土師器型式別口径分布

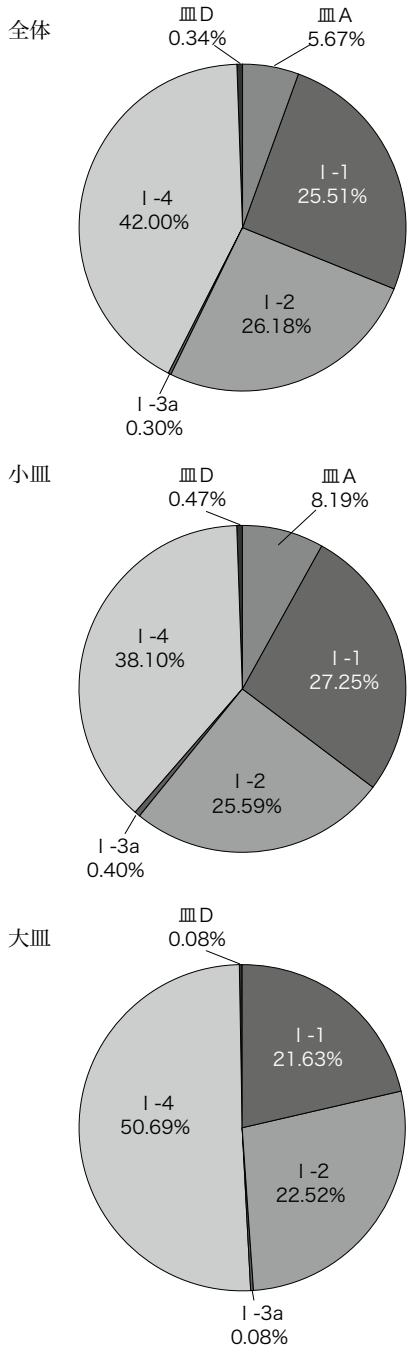


図 57　ＳＫ 618　土師器型式別出土比率

表６　ＳＫ 635　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿A				1		2							3	0	3	
皿B	Ⅰ-1			4	2	3	2			1	2		11	3	14	
	Ⅰ-2			26	169	69	23	21	98	18	5	1	287	143	430	
	Ⅰ-3a								5				0	5	5	
	Ⅰ-3b			1	3	1	1	4	4				6	8	14	
	Ⅰ-3c			13	105	29	8	25	118	25	1	1	155	170	325	無効破片数
	Ⅰ-4												0	0	0	口縁
	小計	0	0	44	279	102	34	50	225	44	8	2	459	329	788	585
皿C					16		1						17	0	17	体部
皿D			1	1									2	0	2	910
皿E													0	0	0	合計
合　計			1	46	295	104	35	50	225	44	8	2	481	329	810	2305

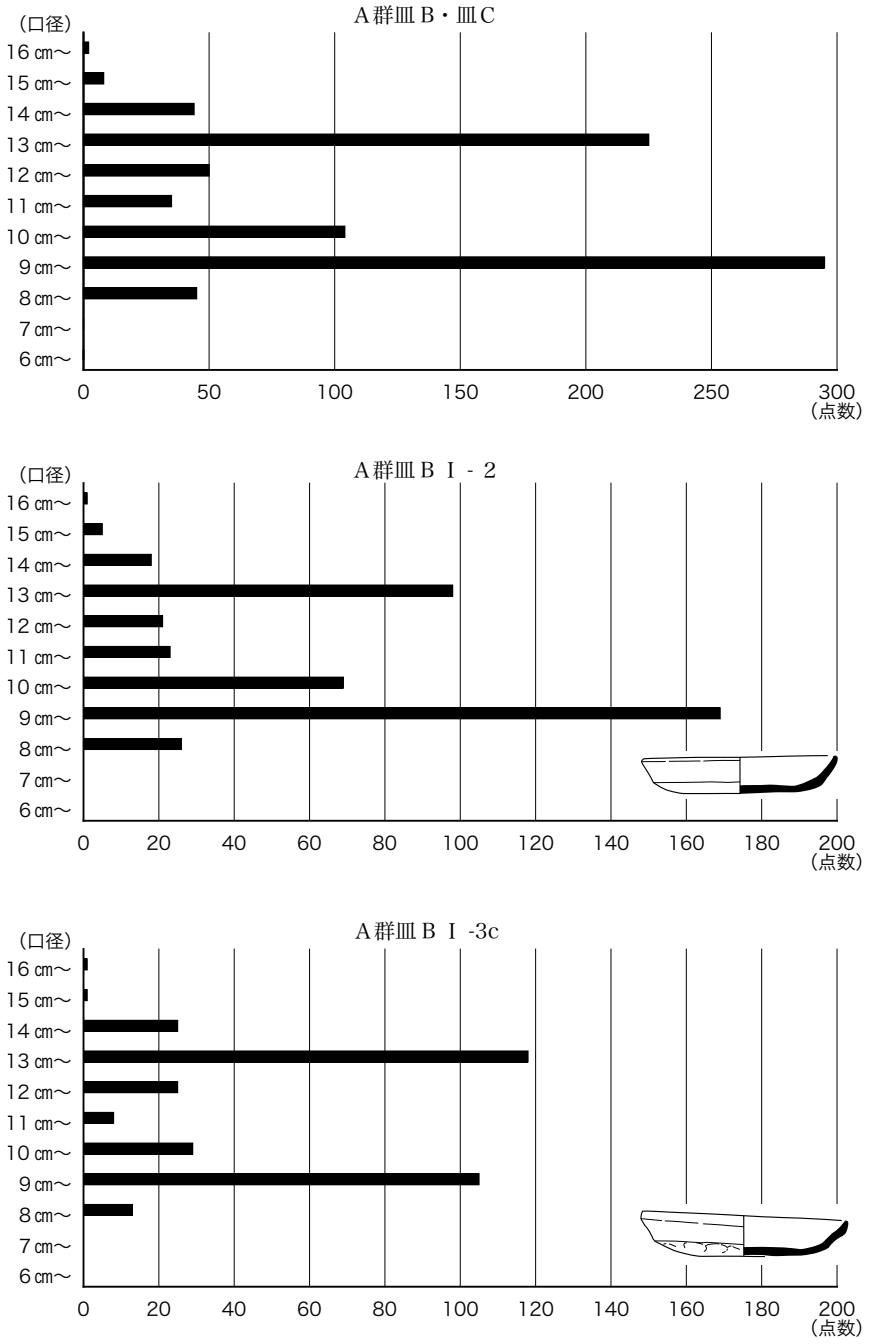


図 58　ＳＫ 635　土師器型式別口径分布

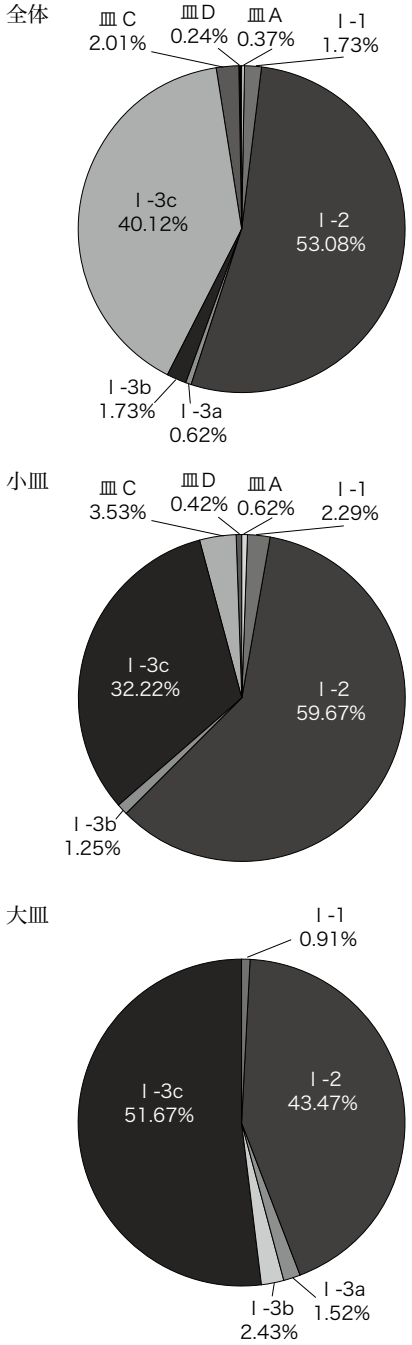


図 59　ＳＫ 635　土師器型式別出土比率

表７　ＳＫ 636　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿A						1	1	1					2	1	3	
皿B	Ⅰ-1			217	406	177	95	52	183	35	1		895	271	1166	
	Ⅰ-2			388	907	316	125	136	250	72	12		1736	470	2206	
	Ⅰ-3a						11	1					11	1	12	
	Ⅰ-3b				6	5	2	6	12	2			13	20	33	
	Ⅰ-3c			61	255	78	38	100	192	30	11		432	333	765	
	Ⅰ-4												0	0	0	無効破片数
	小計	0	0	666	1574	576	271	295	637	139	24	0	3087	1095	4182	口縁
皿C					19	2	1		2				22	2	24	3869
皿D				8	2								10	0	10	体部
皿E						4	57	204	387	96	24	1	61	712	773	3849
京都産							1	3					1	3	4	合計
合　計				674	1595	583	331	503	1026	235	48	1	3183	1813	4996	12714

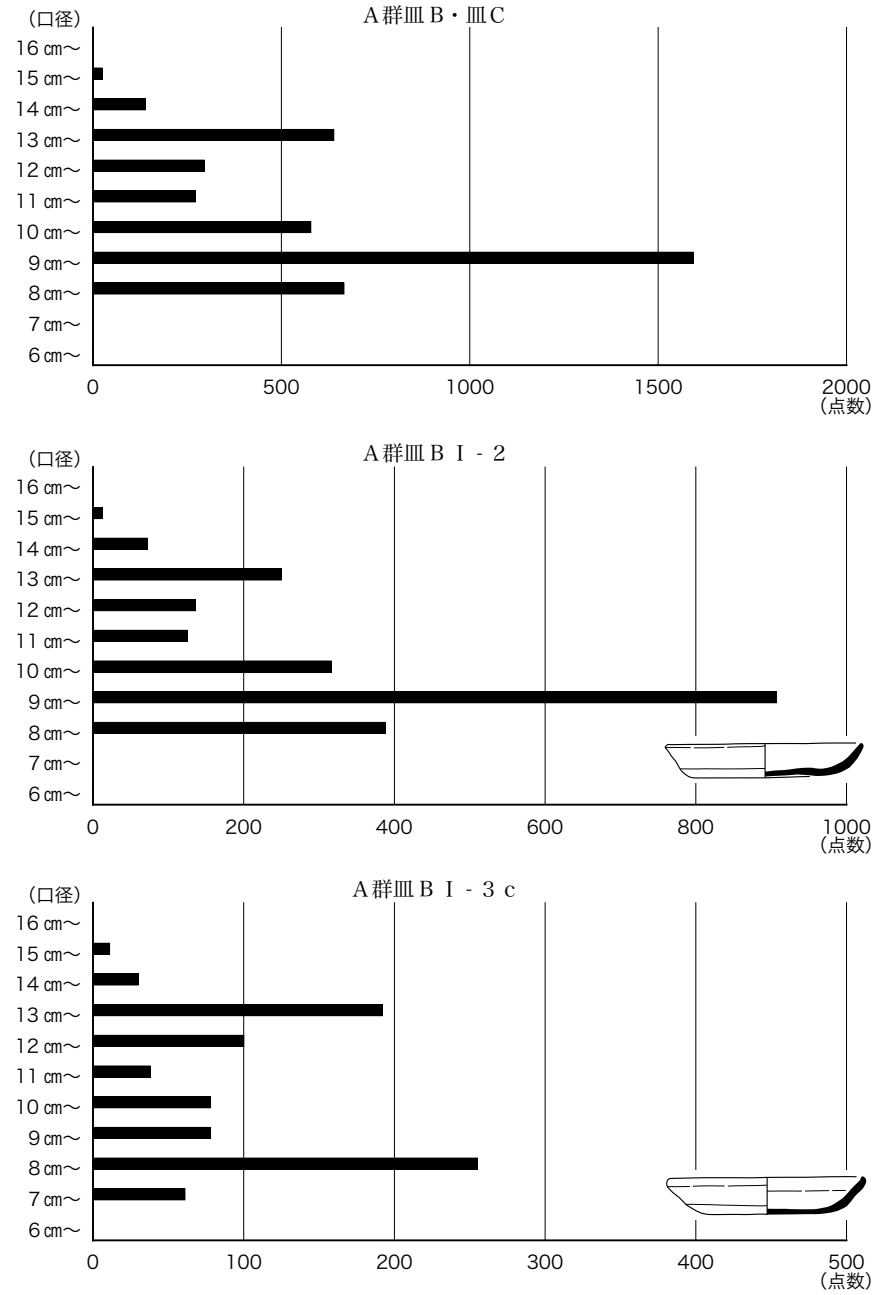


図60　ＳＫ 636　土師器型式別口径分布

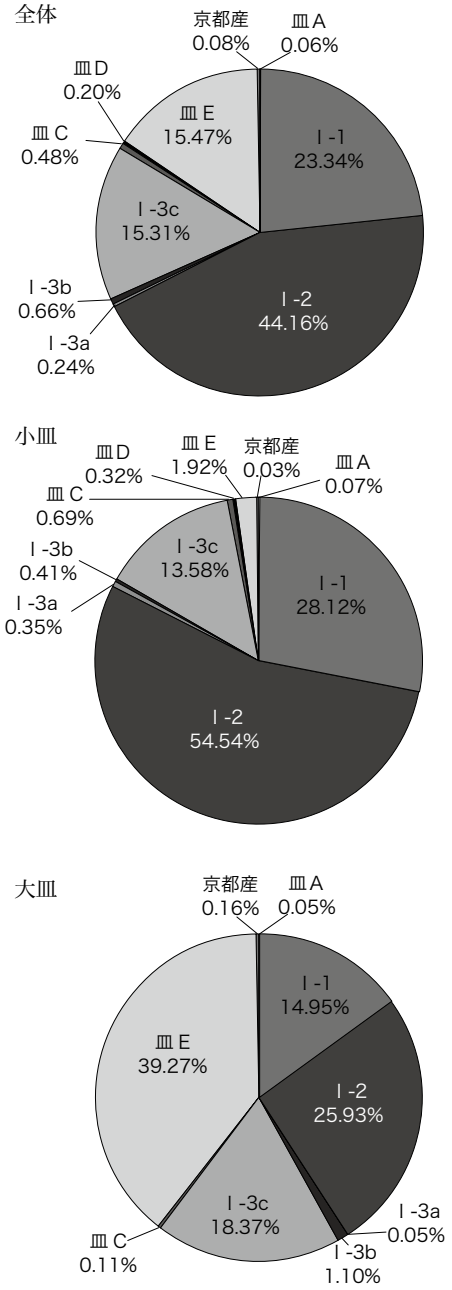


図61　ＳＫ 636　土師器型式別出土比率

表８　ＳＫ 638　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿Ａ					1	1	1						3	0	3	
皿Ｂ	Ｉ－1			8	18	6	15	2		1	1		26	25	51	
	Ｉ－2			117	126	122	234	49	30	8			243	443	686	
	Ｉ－3a												0	0	0	
	Ｉ－3b			1		1	1	1	2				1	5	6	
	Ｉ－3c			3	18	10	9	3	8	4			21	34	55	
	Ｉ－4												0	0	0	無効破片数
	小計	0	0	129	162	139	259	55	40	13	1	0	291	507	798	口縁
皿Ｃ				95	20								115	0	115	719
皿Ｄ				2									2	0	2	体部
皿Ｅ													0	0	0	752
京都産			9	2		1	14						11	15	26	合計
合　計		0	9	228	183	141	274	55	40	13	1	0	420	524	944	2415

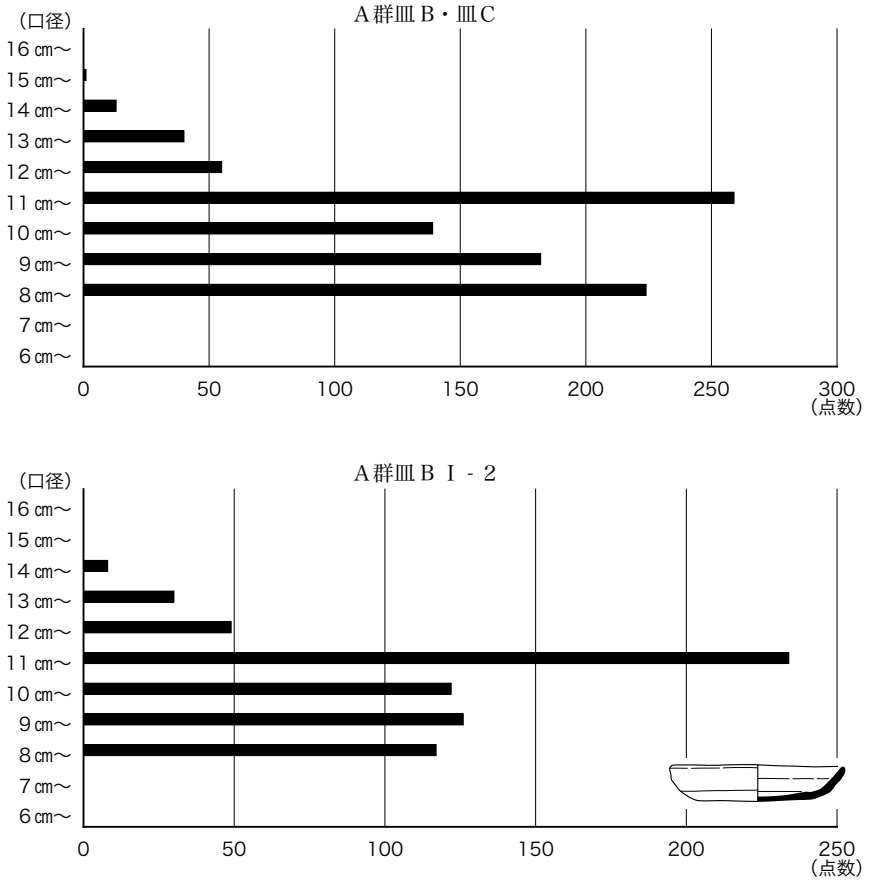


図 62　ＳＫ 638　土師器型式別口径分布

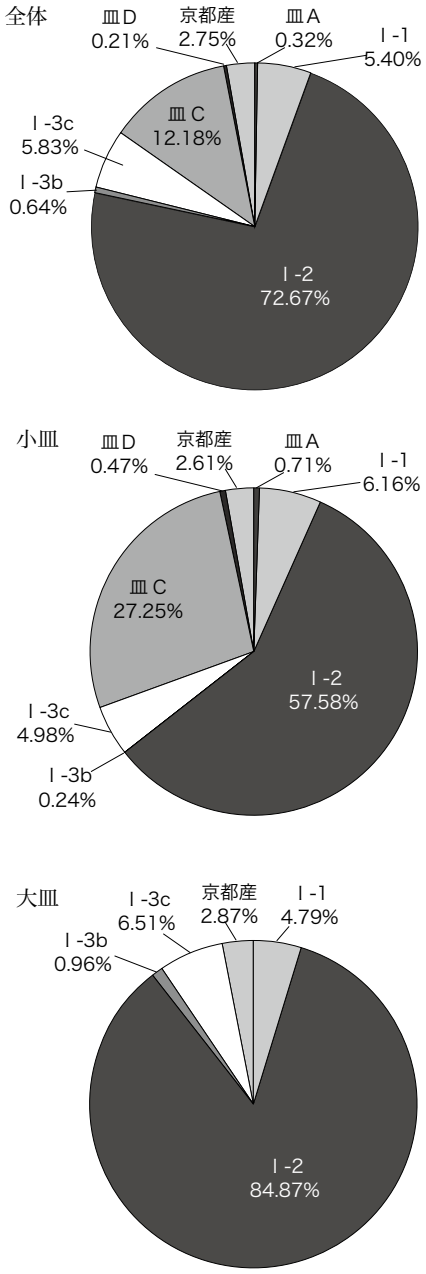


図 63　ＳＫ 638　土師器型式別出土比率

表９　ＳＫ 639　土師器型式別出土表

分　類		6㎝～	7㎝～	8㎝～	9㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	小皿	大皿	合計	
皿A													0	0	0	
皿B	Ⅰ-1				2	1	9						2	10	12	
	Ⅰ-2			3	11	7	55						14	62	76	
	Ⅰ-3a												0	0	0	
	Ⅰ-3b												0	0	0	
	Ⅰ-3c												0	0	0	
	Ⅰ-4												0	0	0	無効破片数
	小計	0	0	3	13	8	64	0	0	0	0	0	16	72	88	口縁
皿C				11	2								13	0	13	39
皿D													0	0	0	体部
皿E													0	0	0	27
京都産		15					4						15	4	19	合計
合　計		15	0	14	15	8	68	0	0	0	0	0	44	76	120	187

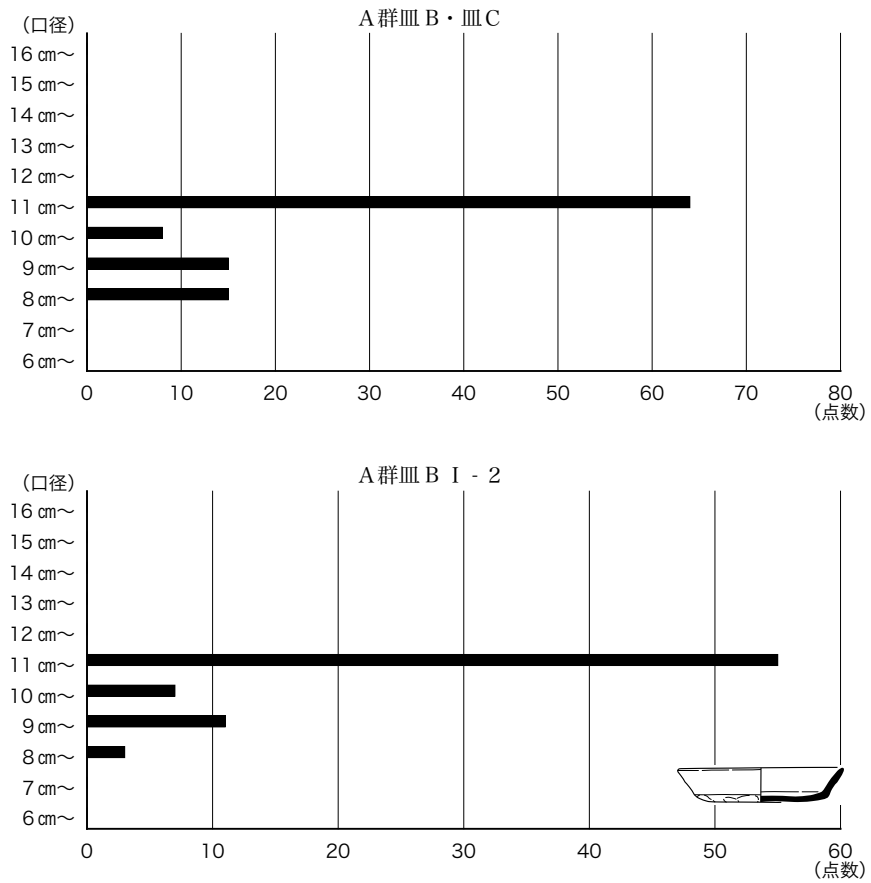


図 64　ＳＫ 639　土師器型式別口径分布

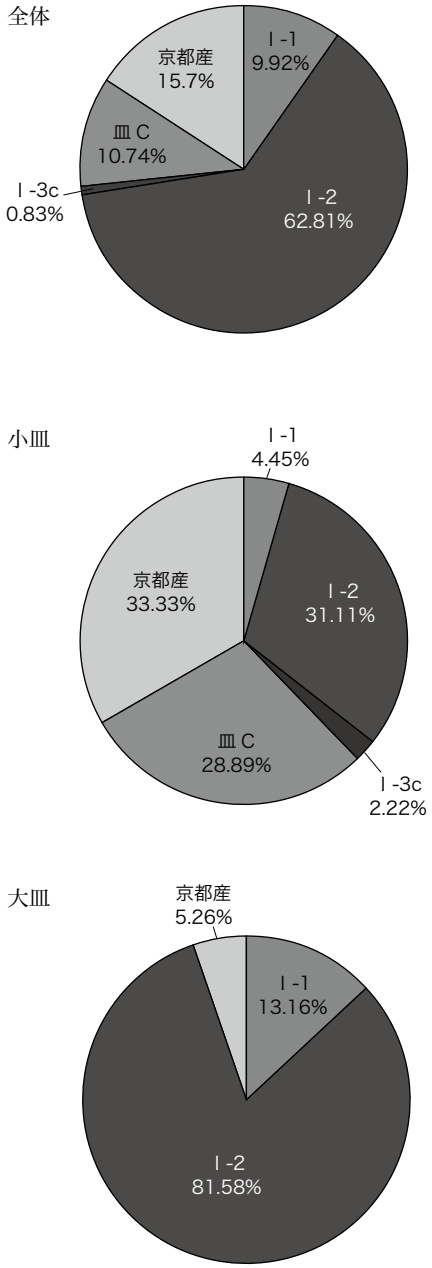


図 65　ＳＫ 639　土師器型式別出土比率

表 10　ＳＫ 642　土師器型式別出土表

分　類	6 ㎝～	7 ㎝～	8 ㎝～	9 ㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	合計	無効破片数
A　群	1	251	451	456	462	94	20	1			3	1739	口縁
B　群	11	322	129	280	428	225	198	225	30	3	13	1864	3816
京　都　産	2									1		3	体部
合　計	14	573	580	736	890	319	218	226	30	4	16	3606	2142
													合計
													9564

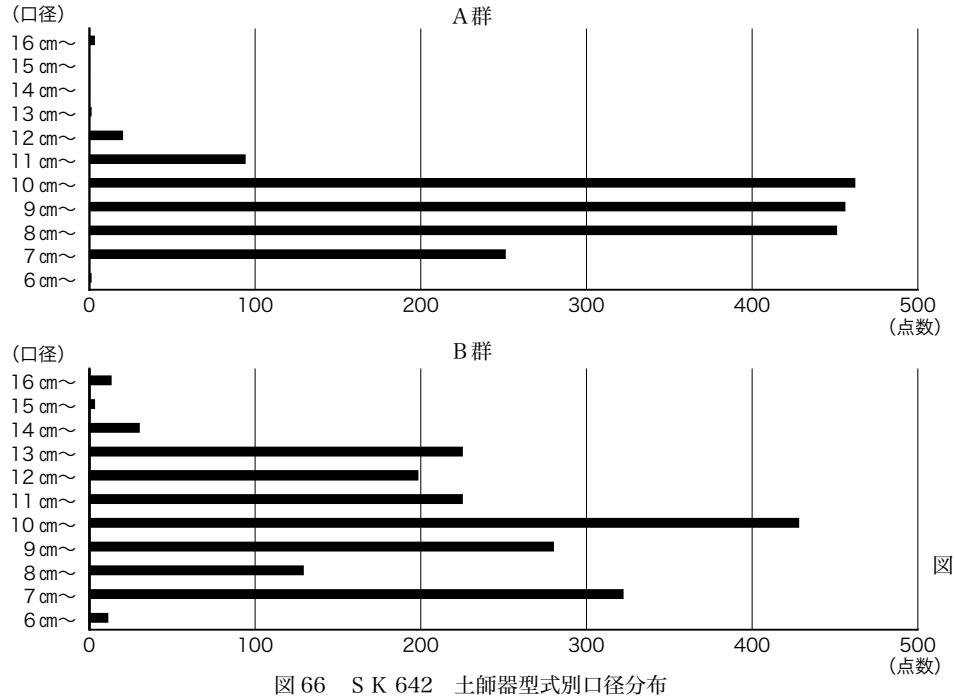


図 66　ＳＫ 642　土師器型式別口径分布

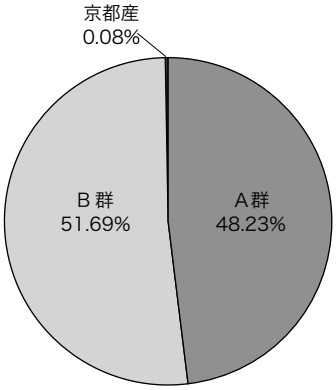


図 67　ＳＫ 642　土師器型式別出土比率

表 11　ＳＸ 808　土師器型式別出土表

分　類	6 ㎝～	7 ㎝～	8 ㎝～	9 ㎝～	10㎝～	11㎝～	12㎝～	13㎝～	14㎝～	15㎝～	16㎝～	合計	無効破片数
A　群	3	64	37	5							1	110	口縁
C　群	1	6	9	39	14	23	32	7	1			132	246
合　計	4	70	46	44	14	23	32	7	1	0	1	242	体部
													240
													合計
													728

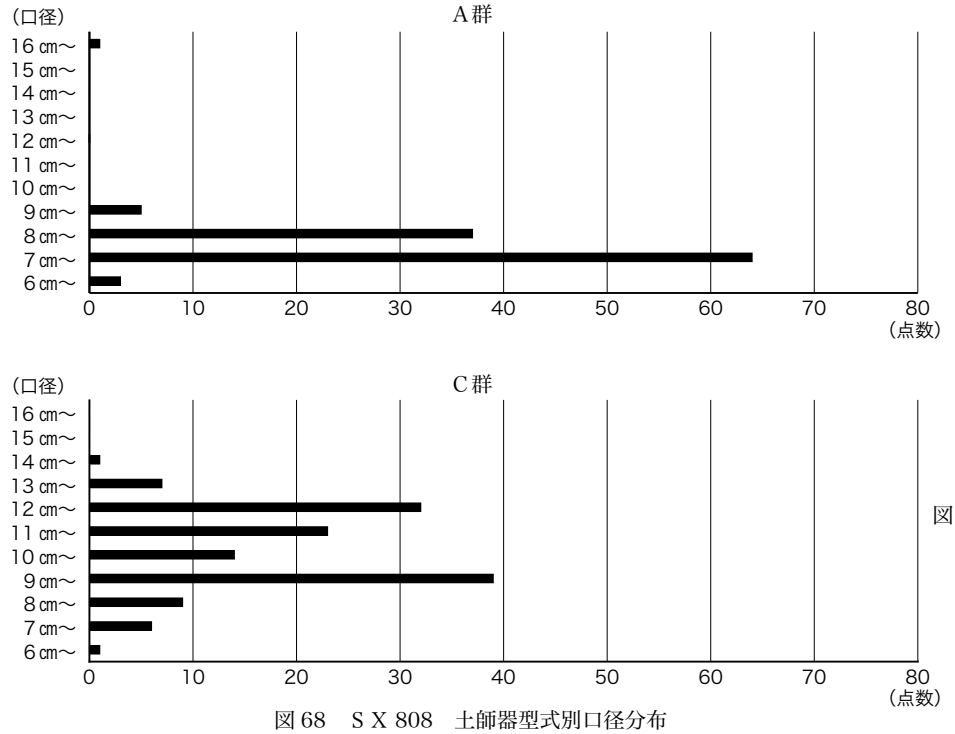


図 68　ＳＸ 808　土師器型式別口径分布

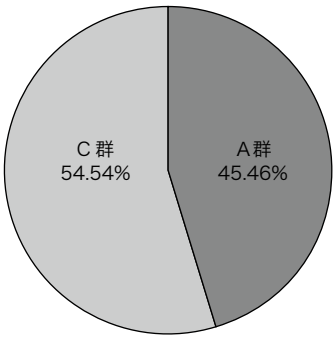


図 69　ＳＸ 808　土師器型式別出土比率

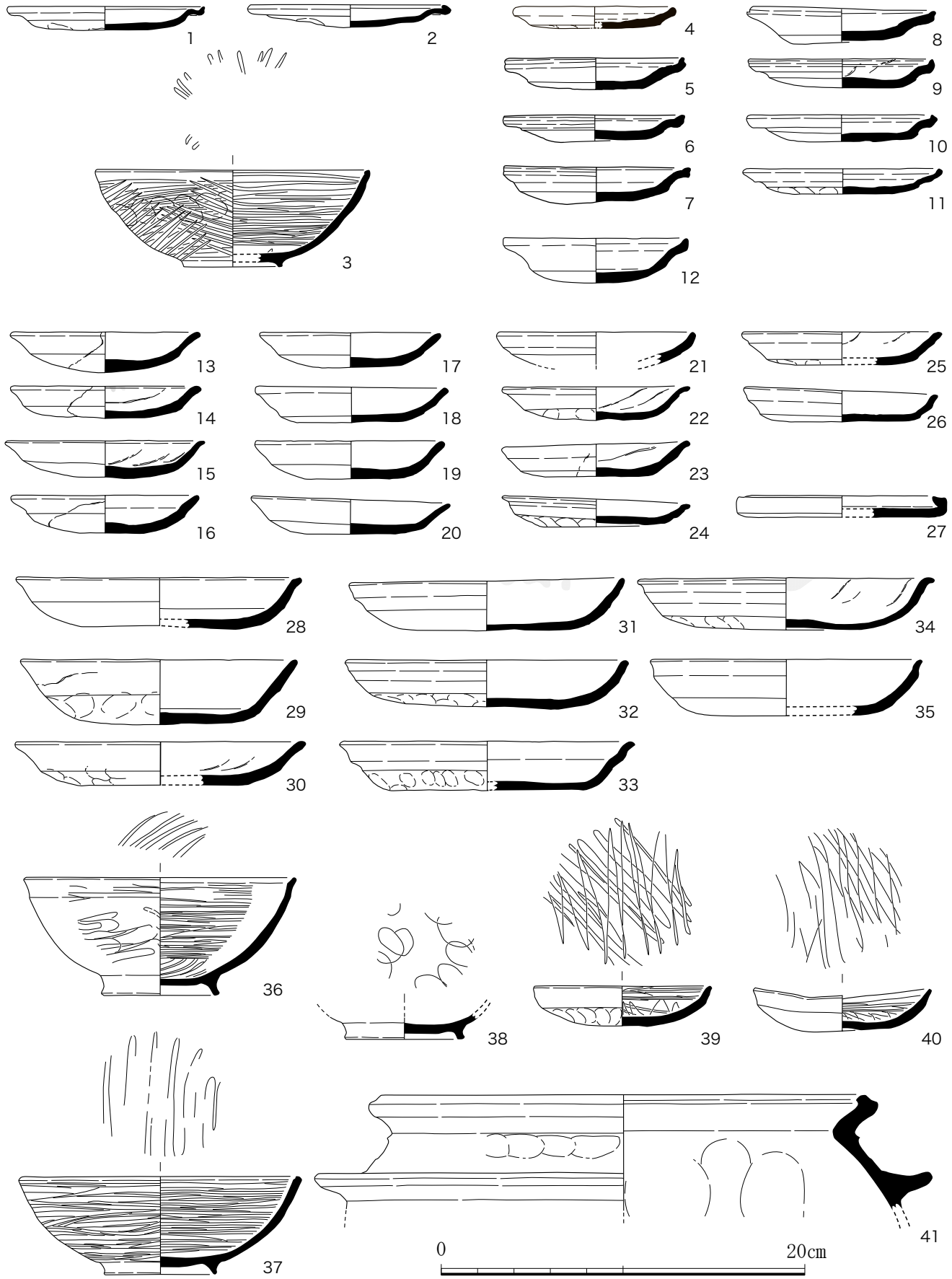


図70　ＳＥ501（1～3）・ＳＫ613（4～41）出土土器（Ｓ＝1／3）

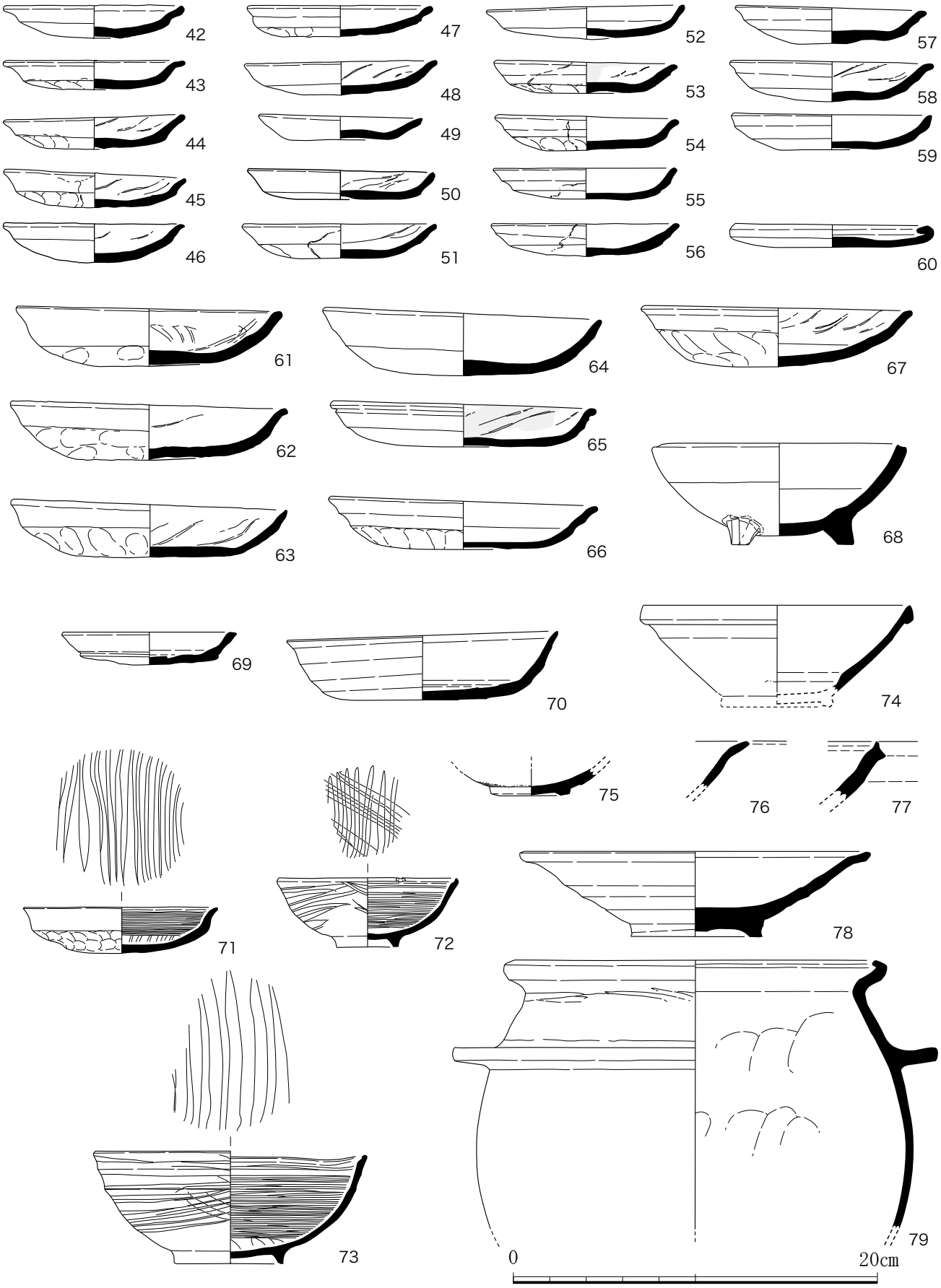


図71　ＳＫ618（42～79）出土土器（Ｓ＝１／３）

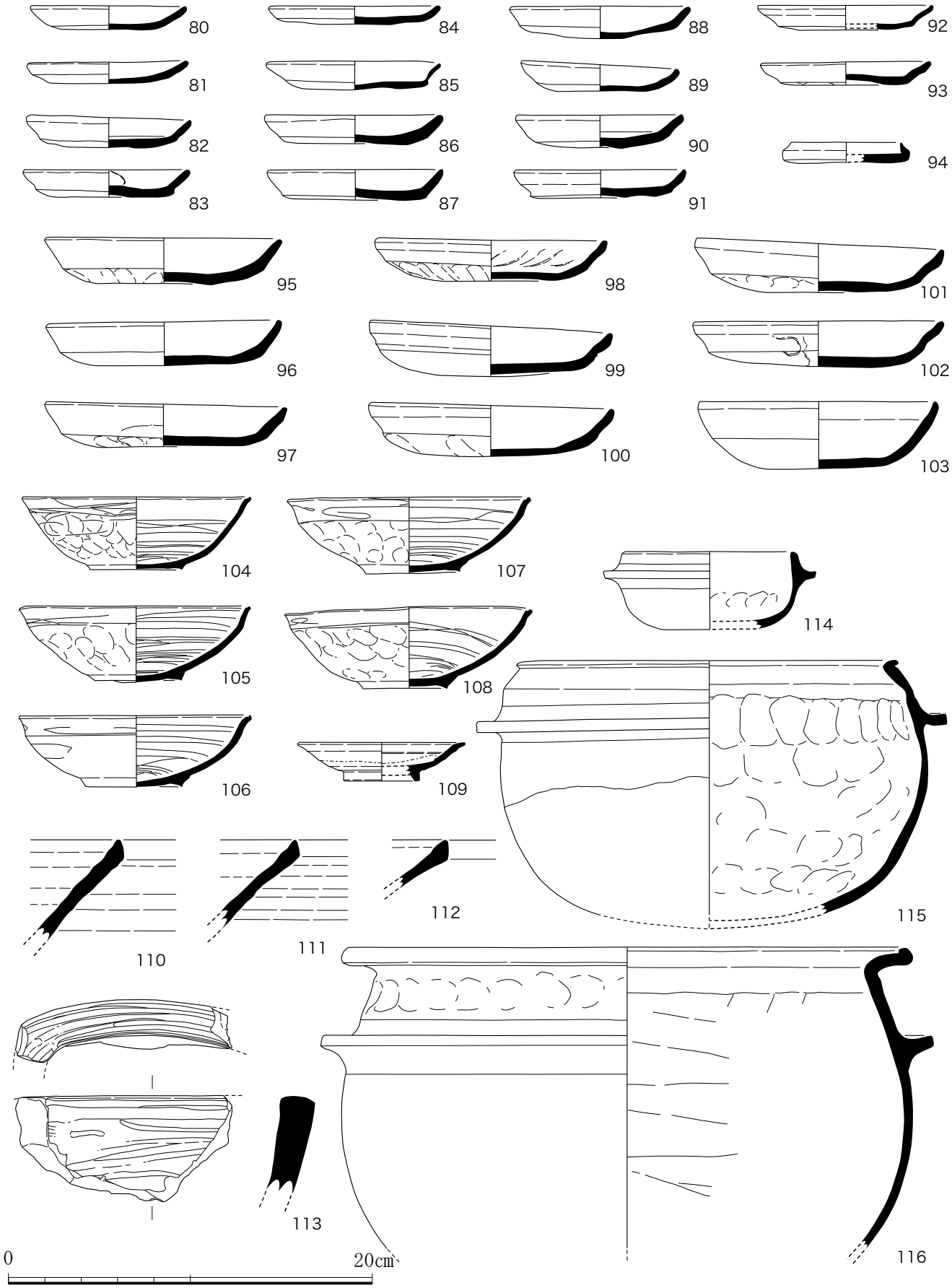


図72　ＳＫ635（80～116）出土土器（Ｓ＝１／３）

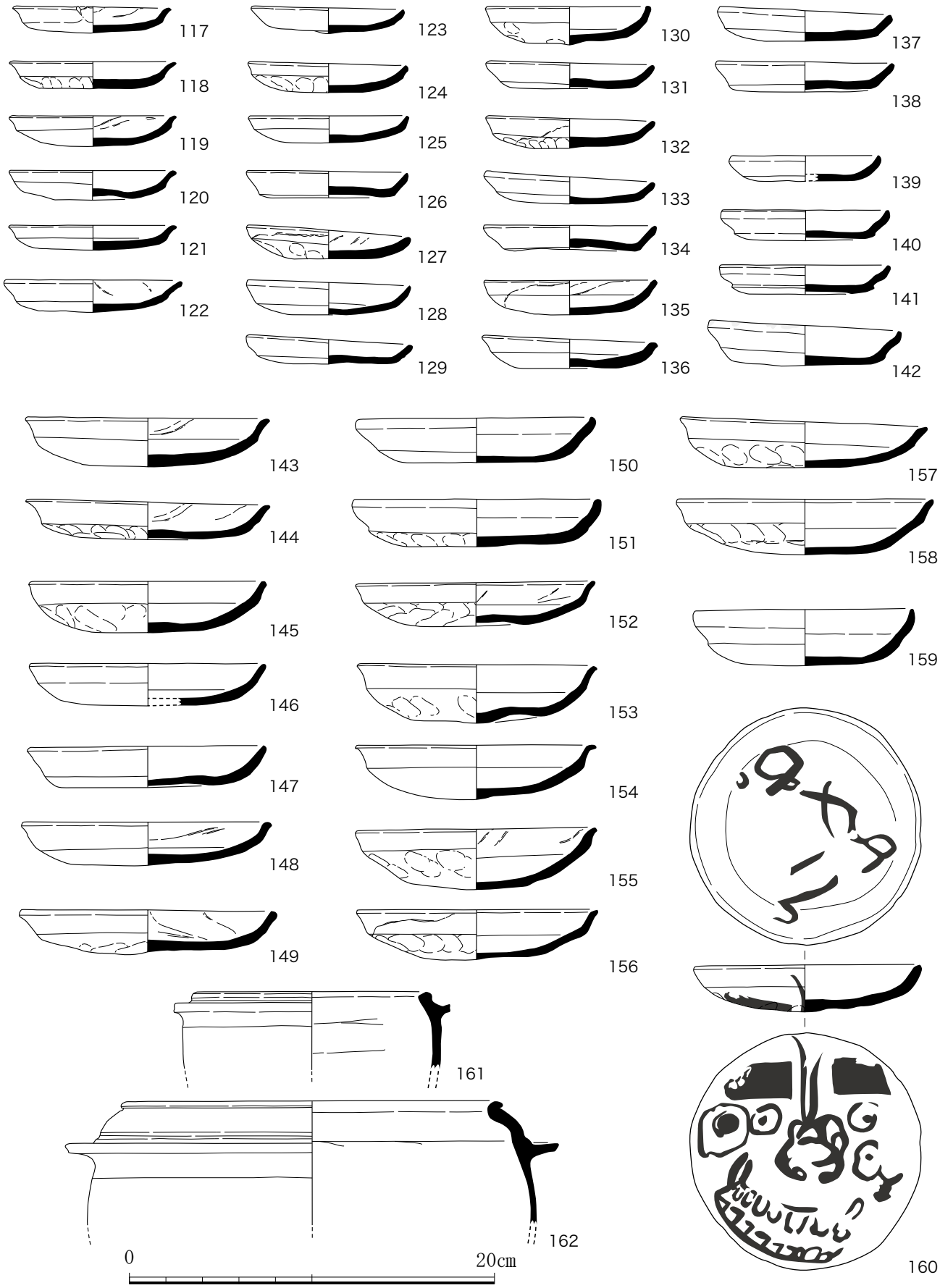


図73　ＳＫ636（117～162）出土土器（Ｓ＝１／３）

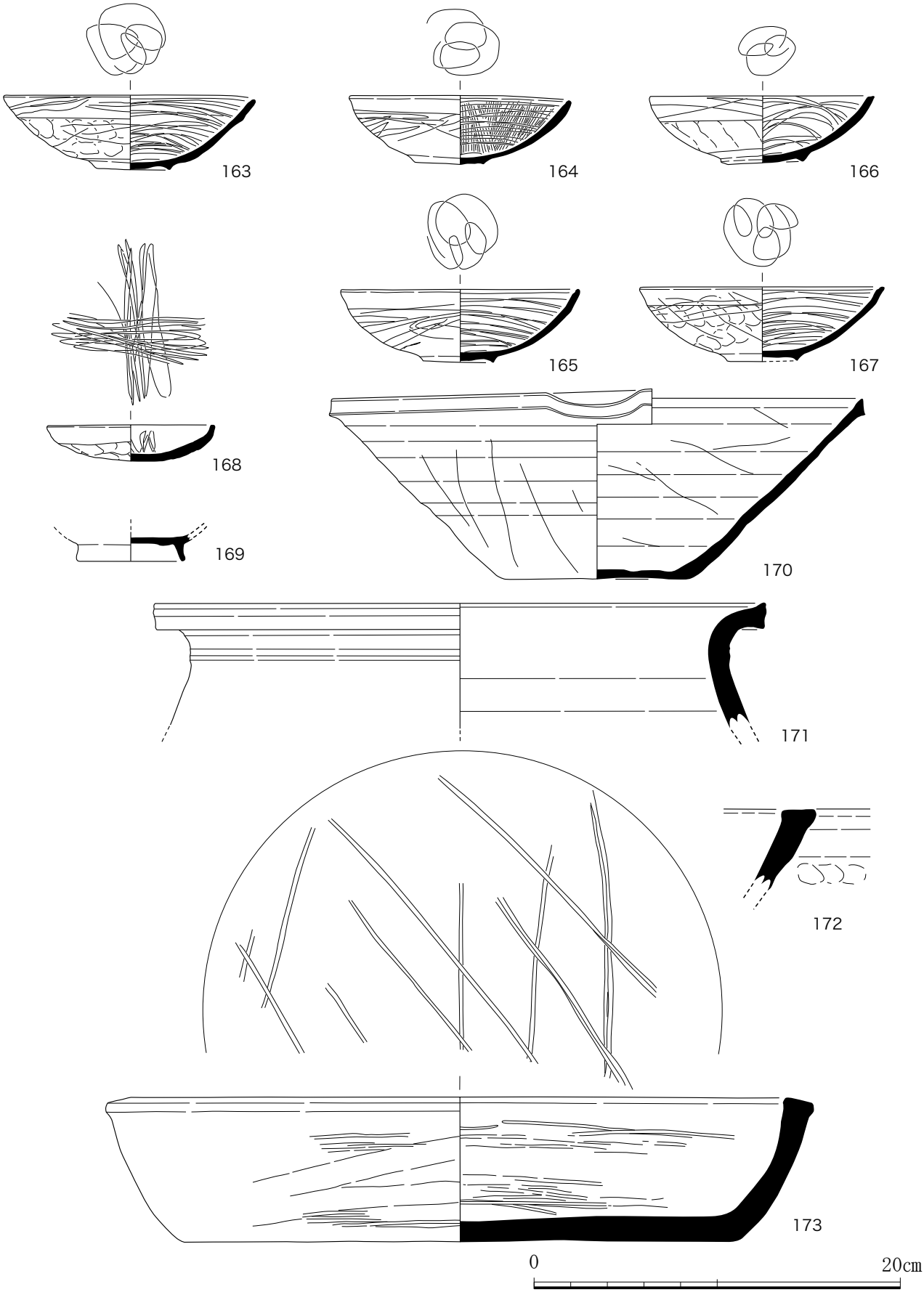


図 74　ＳＫ 636（163 ～ 173）出土土器（Ｓ＝１／３・173 のみＳ＝１／４）

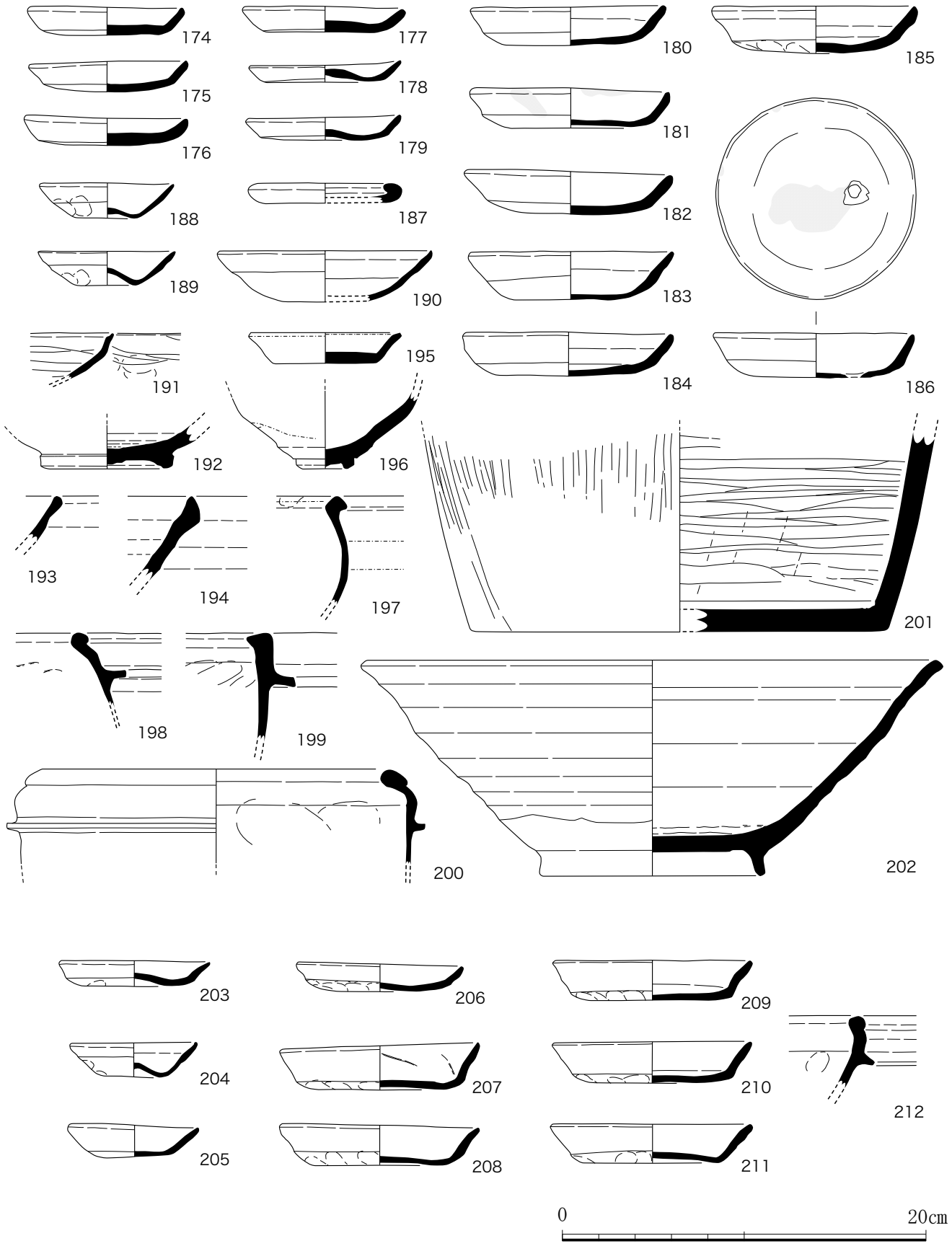


図75　ＳＫ638（174～202）・ＳＫ639（203～212）出土土器（Ｓ＝１／３）

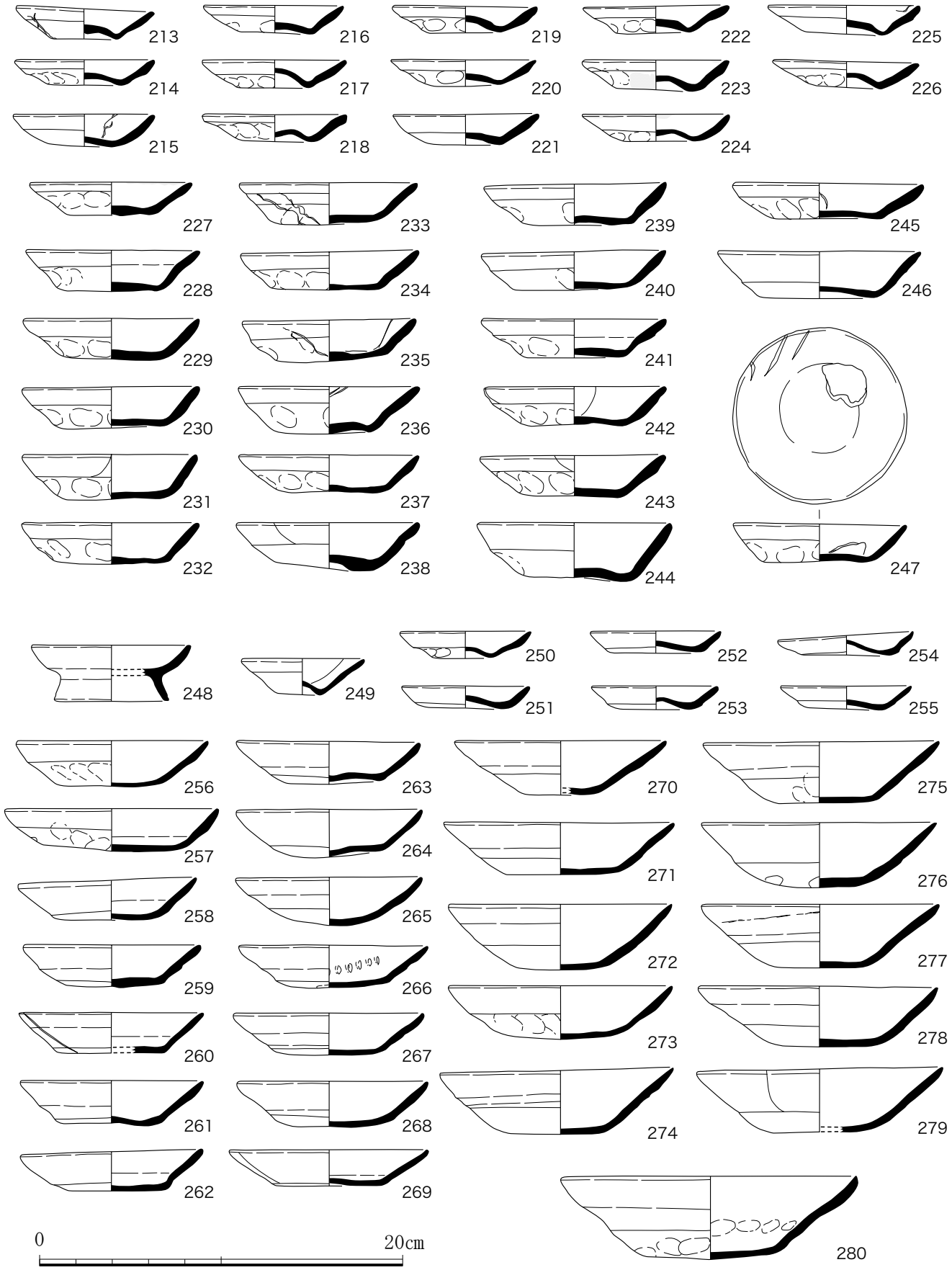


図 76　ＳＫ 642（213 ～ 280）出土土器（Ｓ＝１／３）

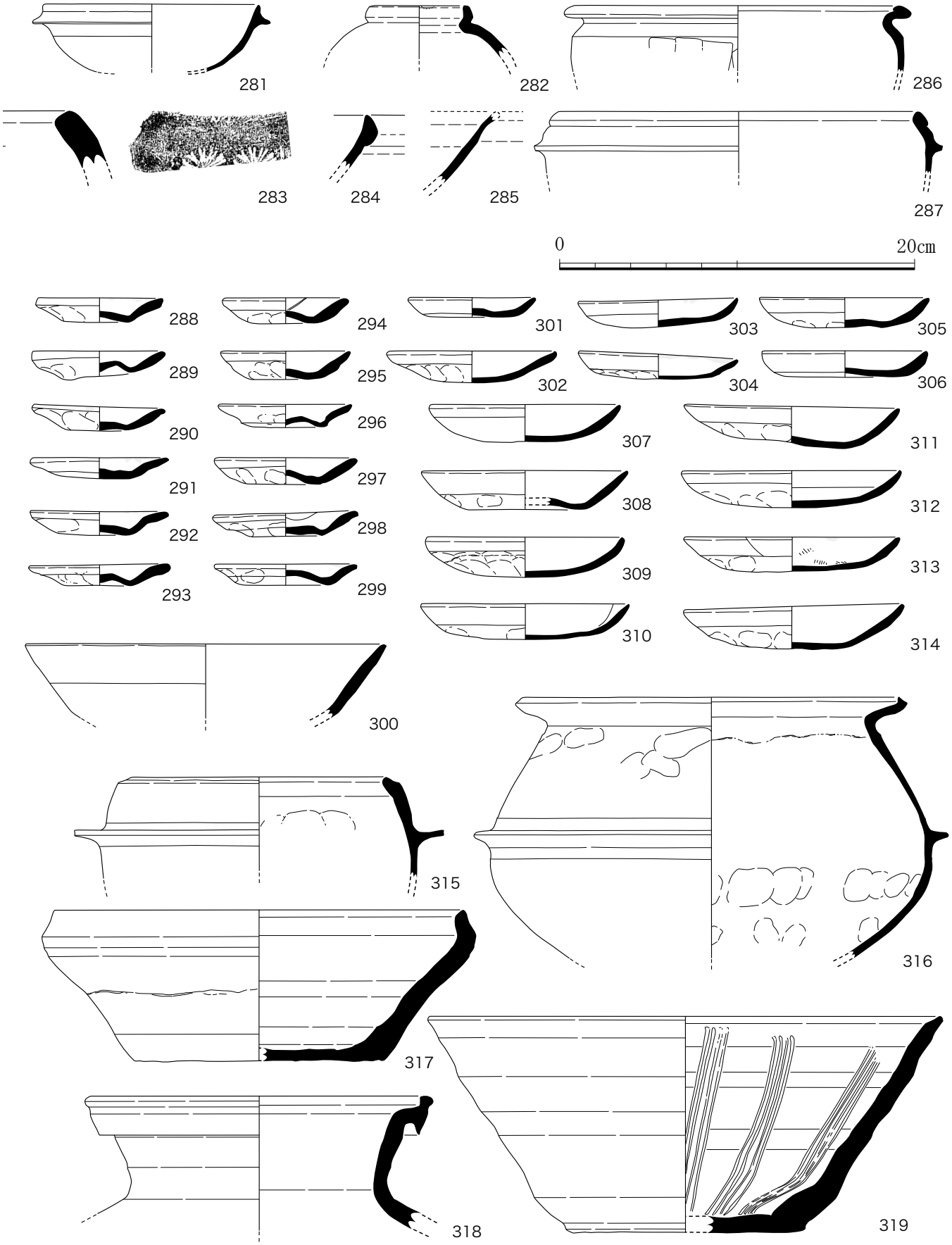


図77　ＳＫ642（281～287）・ＳＸ808（288～319）出土土器（Ｓ＝１／３）

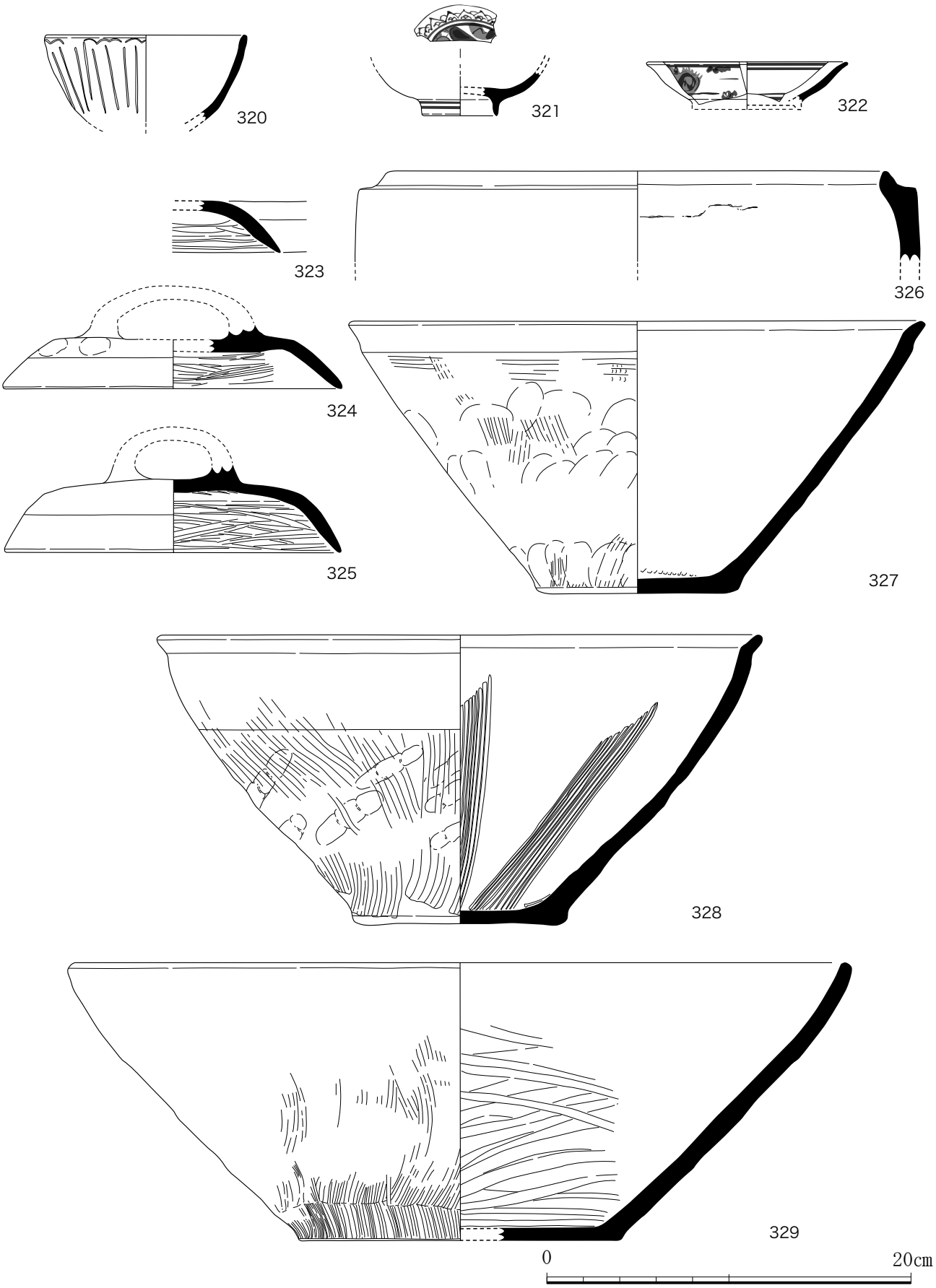


図 78　S X 808（320 ～ 329）出土土器（S ＝ 1 ／ 3）

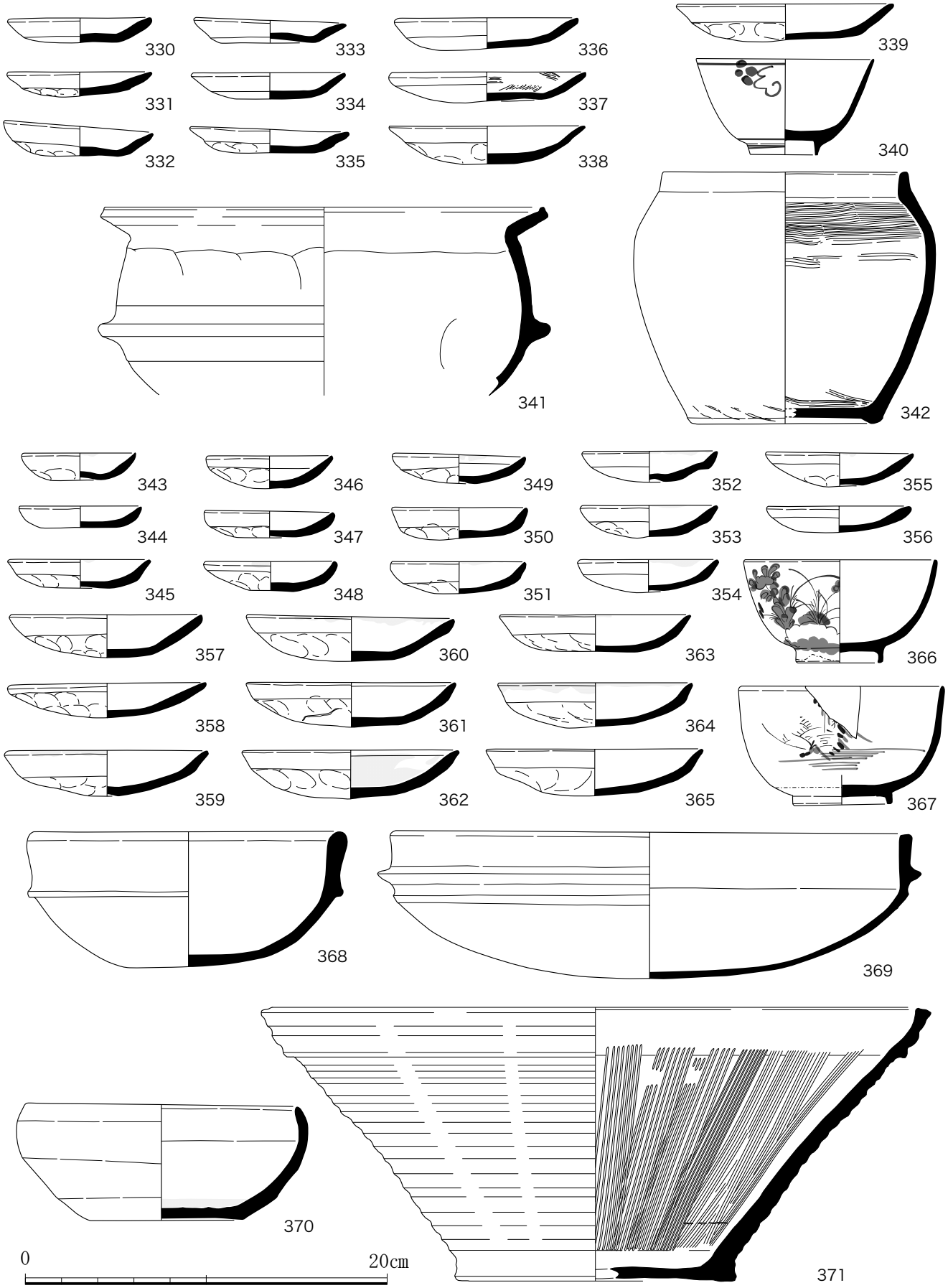


図79　ＳＫ651（330～342）・ＳＥ507（343～371）出土土器（Ｓ＝１／３）

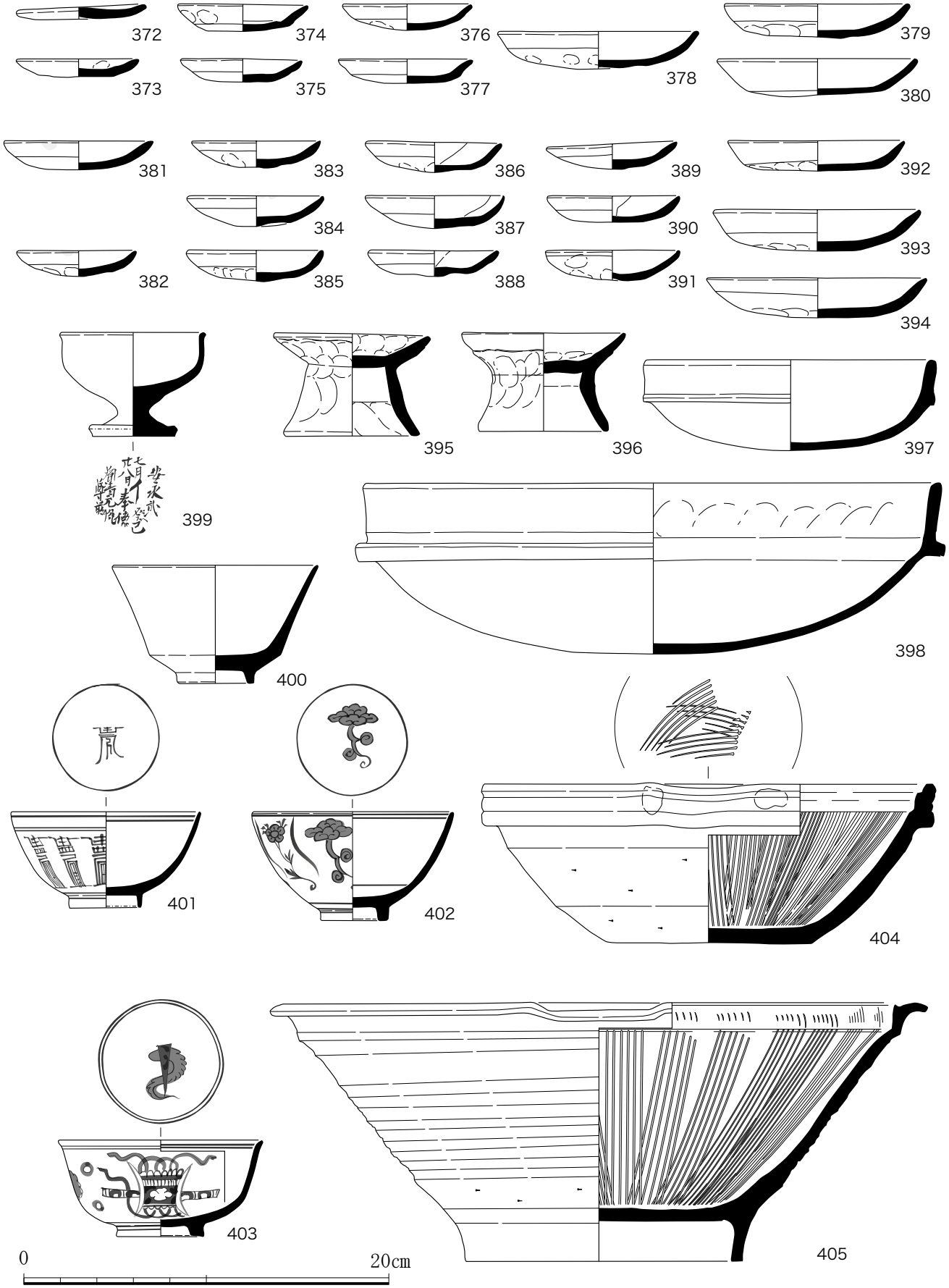


図 80　ＳＫ 656（372 ～ 405）出土土器（Ｓ＝１／３）

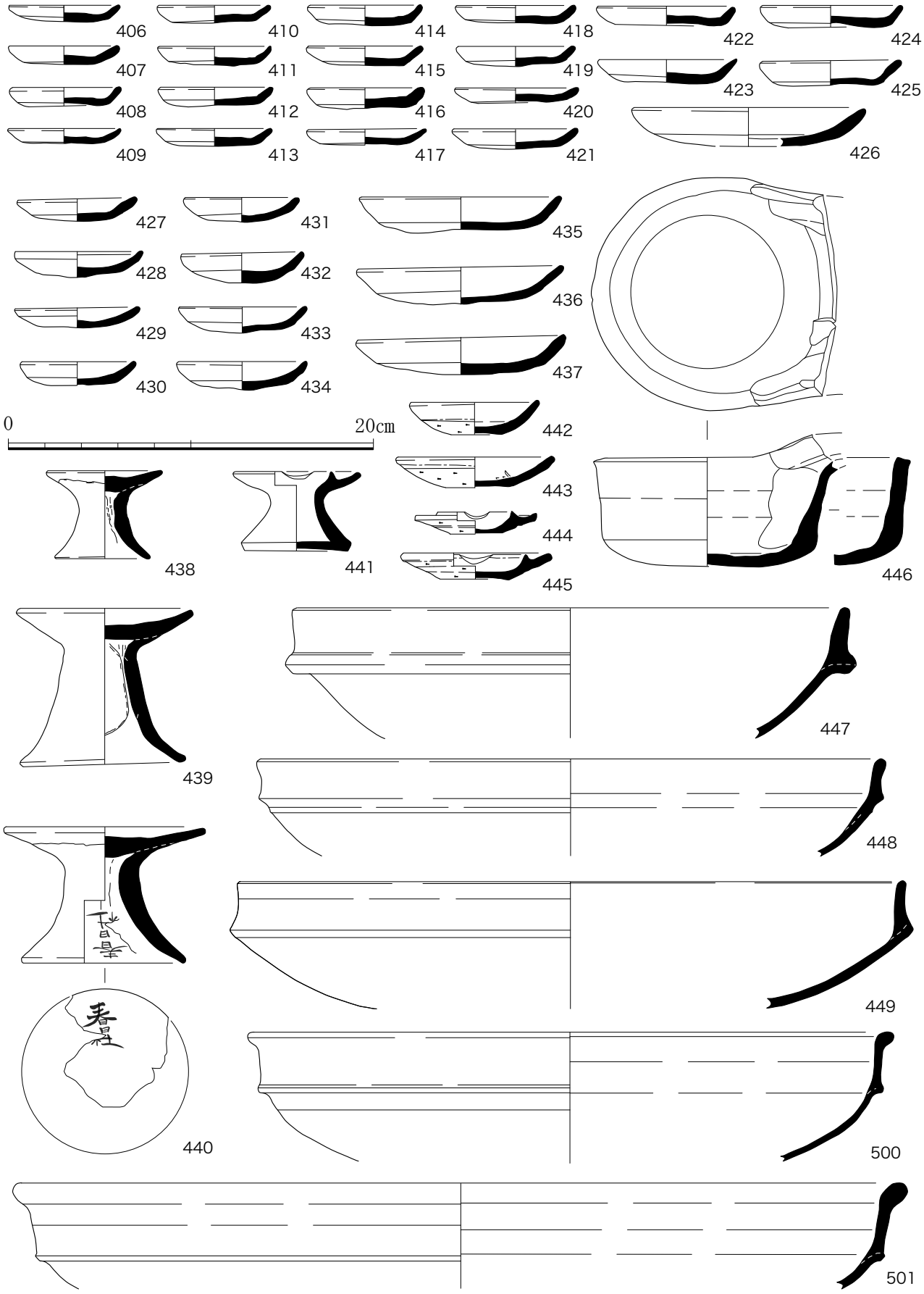


図81　ＳＫ662（406～501）出土土器（Ｓ＝１／３）

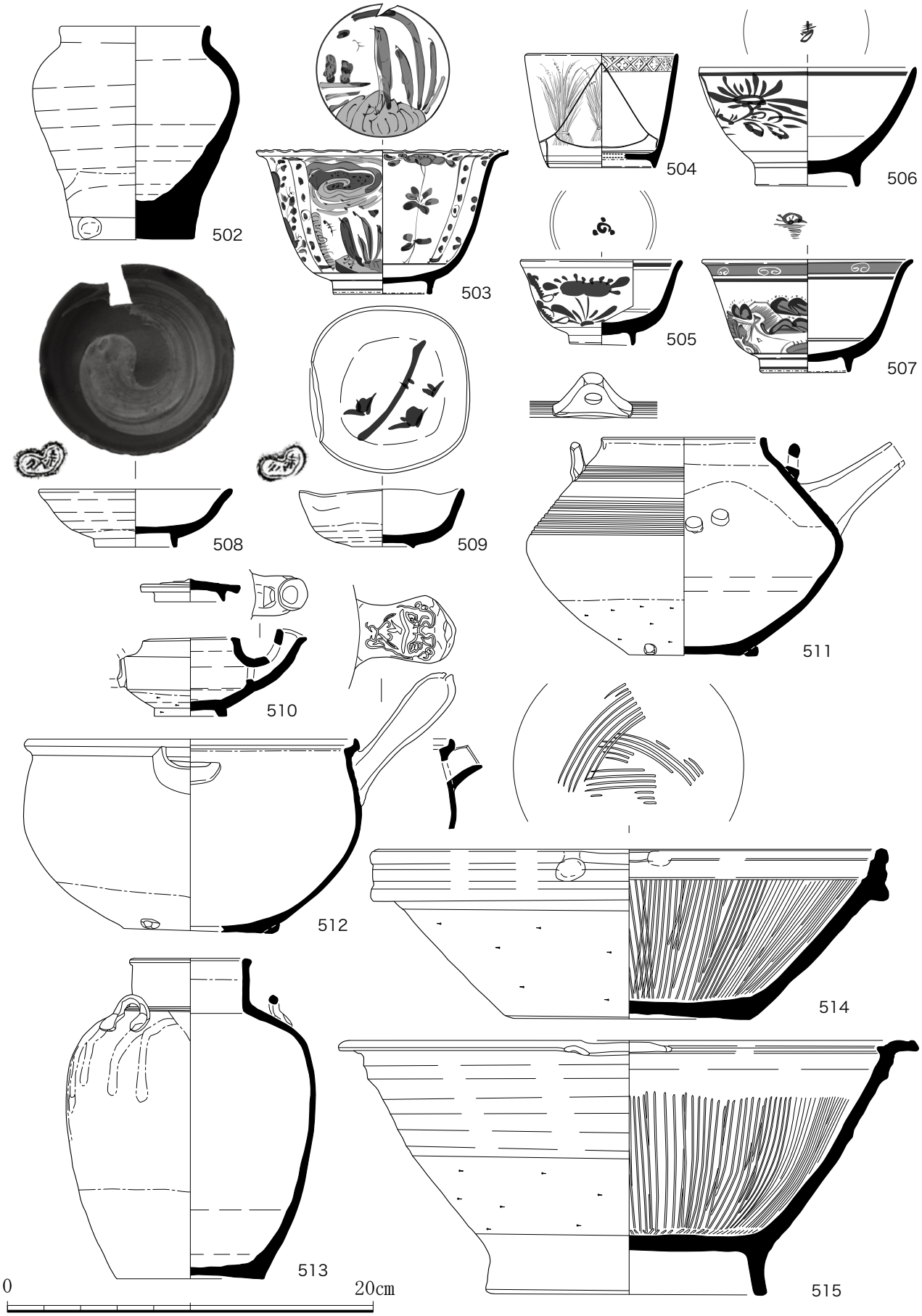


図 82　ＳＫ 662（502 ～ 515）出土土器（Ｓ＝１／３）

D　出土土器観察表

表 12　ＳＥ 501 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存 %	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
1	SE501	土師器	皿	10.9	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/1 灰白	角閃石
2	SE501	土師器	皿	11.2	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5Y7/1 灰白	
3	SE501	黒色土器	椀	(15.1)	5.4			70	内外面ミガキ (外面８分割ミガキ)	1.5/0 黒	B 類

表 13　ＳＫ 613 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存 %	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
4	SK613	土師器	皿	(9.0)	1.2			40	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＡⅠ
5	SK613	土師器	皿	10.0	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＡⅠ
6	SK613	土師器	皿	10.0	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＡⅠ 角閃石
7	SK613	土師器	皿	10.3	2.1			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5YR8/3 淡黄	A 群、皿ＡⅠ
8	SK613	土師器	皿	10.4	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＡⅠ
9	SK613	土師器	皿	10.4	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＡⅠ 内面工具痕
10	SK613	土師器	皿	10.5	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＡⅠ
11	SK613	土師器	皿	(11.0)	1.4			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＡⅠ
12	SK613	土師器	皿	10.2	2.5			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＡⅡ
13	SK613	土師器	皿	10.4	2.2			100	内面・口縁部外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 1 角閃石
14	SK613	土師器	皿	10.5	1.8			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 1、内面工具痕、口縁部煤付着
15	SK613	土師器	皿	11.0	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 1 内面工具痕
16	SK613	土師器	皿	10.4	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5YR8/1 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 2
17	SK613	土師器	皿	10.0	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
18	SK613	土師器	皿	10.6	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 2 角閃石
19	SK613	土師器	皿	10.6	2.1			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/2 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 2
20	SK613	土師器	皿	11.0	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 2
21	SK613	土師器	皿	(11.0)	1.8			20	口縁部内外面ヨコナデ、外面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 3
22	SK613	土師器	皿	10.4	1.9			90	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4 内面工具痕
23	SK613	土師器	皿	10.4	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4 内面工具痕
24	SK613	土師器	皿	10.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4
25	SK613	土師器	皿	(11.0)	1.8			25	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4 内面工具痕
26	SK613	土師器	皿	10.9	1.9			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4
27	SK613	土師器	皿	(11.6)	1.2			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/6 橙	A 群、皿D
28	SK613	土師器	皿	15.7	3.8			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 1
29	SK613	土師器	皿	15.4	3.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	A 群、皿ＢⅠ - 2
30	SK613	土師器	皿	(16.0)	2.4			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 2 内面工具痕
31	SK613	土師器	皿	15.2	2.9			75	口縁部内外面ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A 群、皿ＢⅠ - 4 口縁部煤付着

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
32	SK613	土師器	皿	15.6	2.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-4
33	SK613	土師器	皿	(16.2)	2.7			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	A群、皿BⅠ-4
34	SK613	土師器	皿	16.4	2.8			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-4、内面工具痕、口縁部煤付着
35	SK613	土師器	皿	(15.0)	3.1			20	口縁部内外面ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-4
36	SK613	瓦器	椀	(15.0)	6.5	(6.6)		20	内面ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ、見込み平行線状暗文	N5/0 灰	大和Ⅰ-D
37	SK613	瓦器	椀	(15.6)	5.4	6.2		20	内外面ヘラミガキ、見込み平行線状暗文	N4/0 灰	大和Ⅰ-C 内面被熱
38	SK613	瓦器	椀		(1.5)	(6.3)		20	見込みらせん状暗文	N5/0　灰	大和Ⅱ-A
39	SK613	瓦器	皿	10.0	2.3			100	口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ、外面オサエ	N4/0 灰	
40	SK613	瓦器	皿	10.0	2.4			100	口縁部内外面ナデ、内面ヘラミガキ	N5/0 灰	
41	SK613	土師器	羽釜	(26.6)	(6.4)		(34.0)	10	内外面無文のタタキ成形、口縁部と鍔ヨコナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	大和B型、鍔部以下煤付着

表14　ＳＫ618出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
42	SK618	土師器	皿	10.0	1.8			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、皿AⅠ
43	SK618	土師器	皿	10.0	1.6			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿AⅠ
44	SK618	土師器	皿	10.0	1.9			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
45	SK618	土師器	皿	10.0	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
46	SK618	土師器	皿	10.0	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
47	SK618	土師器	皿	10.2	1.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-1
48	SK618	土師器	皿	10.6	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
49	SK618	土師器	皿	9.0	1.4			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
50	SK618	土師器	皿	10.3	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
51	SK618	土師器	皿	10.7	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/3 灰黄	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
52	SK618	土師器	皿	10.9	1.9			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
53	SK618	土師器	皿	10.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿BⅠ-4 内面工具痕、内面煤付着
54	SK618	土師器	皿	10.1	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-4
55	SK618	土師器	皿	10.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-4
56	SK618	土師器	皿	10.3	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-4 内面被熱
57	SK618	土師器	皿	10.5	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-4
58	SK618	土師器	皿	11.2	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-4 内面工具痕
59	SK618	土師器	皿	11.0	2.3			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-3
60	SK618	土師器	皿	11.2	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿D
61	SK618	土師器	皿	14.6	3.3			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
62	SK618	土師器	皿	15.2	2.2			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
63	SK618	土師器	皿	15.1	3.2			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
64	SK618	土師器	皿	15.3	2.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿BⅠ-2
65	SK618	土師器	皿	14.6	3.0			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-4 内面工具痕、内外面煤付着

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
66	SK618	土師器	皿	14.8	2.9			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-4
67	SK618	土師器	皿	14.9	3.6			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-4 内面工具痕
68	SK618	土師器	鉢	14.0	5.6			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面板ナデ、脚部貼り付け後ケズリによる面取り	10YR7/2 にぶい黄橙	三足
69	SK618	土師器	皿	9.6	1.8			100	外面底部回転ヘラキリ後オサエ、内外面ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白	回転台成形
70	SK618	土師器	皿	14.8	3.8			80	外面底部ヘラキリ、内外面ロクロナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	回転台成形・底部板目圧痕
71	SK618	瓦器	皿	10.7	2.5			80	内面ヘラミガキ、底部外面オサエ、見込み平行線状暗文	N3/0 暗灰	
72	SK618	瓦器	椀	10.0	3.8	3.4		60	内外面ヘラミガキ、見込み格子状暗文	N3/0 暗灰	
73	SK618	瓦器	椀	15.0	6.2	6.0		60	内外面ヘラミガキ、見込み平行線状暗文	N3/0 暗灰	大和Ⅰ-D
74	SK618	白磁	碗	(15.0)	(4.8)			15	内外面施釉	7.5Y7/2　灰白	Ⅳ類
75	SK618	白磁	碗		(2.0)	4.3		60	外面飛び鉋、削出高台、内外面施釉	10Y7/1　灰白	Ⅱ類
76	SK618	山茶椀	椀		(2.6)			10	内外面ロクロナデ	2.5Y8/2　灰白	
77	SK618	須恵器（東播産）	鉢		(3.2)			10	内外面ロクロナデ	5Y5/1 灰	
78	SK618	白色土器	皿	(19.2)	4.7	6.2		40	内外面ロクロナデ、削出高台、外面底部ロクロヘラケズリ、畳付に回転糸切痕	2.5Y8/2 灰白	
79	SK618	土師器	羽釜	(21.0)	(14.8)		(26.6)	40	体部無文のタタキ成形 口縁部・鍔ヨコナデ、	10YR7/3 にぶい黄橙	大和B型、外面煤付着、角閃石

表15　ＳＫ635出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
80	SK635	土師器	皿	8.6	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR7/3 浅黄	A群、皿BⅠ-2
81	SK635	土師器	皿	8.9	1.3			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
82	SK635	土師器	皿	9.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2
83	SK635	土師器	皿	9.2	1.5			85	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2 角閃石
84	SK635	土師器	皿	9.4	1.1			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
85	SK635	土師器	皿	9.5	1.6			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2
86	SK635	土師器	皿	9.8	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2
87	SK635	土師器	皿	9.7	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2
88	SK635	土師器	皿	10.0	2.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2
89	SK635	土師器	皿	8.7	1.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-3c
90	SK635	土師器	皿	9.2	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-3c 角閃石
91	SK635	土師器	皿	9.5	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-3c 角閃石
92	SK635	土師器	皿	(9.6)	1.4			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-3c
93	SK635	土師器	皿	9.4	1.8			75	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿Ca
94	SK635	土師器	皿	(7.0)	1.2			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿D
95	SK635	土師器	皿	13.0	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2
96	SK635	土師器	皿	13.0	2.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2
97	SK635	土師器	皿	13.0	2.5			85	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2内外面被熱
98	SK635	土師器	皿	12.8	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-3c 内面工具痕
99	SK635	土師器	皿	13.4	3.1			80	口縁部内外面ヨコナデ、内外面ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-3c

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
100	SK635	土師器	皿	13.5	3.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-3c
101	SK635	土師器	皿	13.7	3.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A群、皿BⅠ-3c
102	SK635	土師器	皿	13.9	2.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/6　橙	A群、皿BⅠ-3c
103	SK635	土師器	皿	13.2	2.8			75	口縁部内外面ヨコナデ、内外面ナデ	7.5YR6/6　橙	A群、皿BⅡ
104	SK635	瓦器	椀	(12.6)	4.0	(5.0)		40	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ	N5/0 灰	Ⅲ-B
105	SK635	瓦器	椀	12.8	4.2	4.8		95	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ	N6/0 灰	Ⅲ-B
106	SK635	瓦器	椀	13.3	3.9	(5.0)		75	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N5/0 灰	Ⅲ-B
107	SK635	瓦器	椀	13.4	4.2	(5.2)		80	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	Ⅲ-B
108	SK635	瓦器	椀	13.6	4.5	4.6		80	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ	N5/0 灰	Ⅲ-B
109	SK635	白磁	皿	(9.2)	2.1	(4.2)		25	内外面施釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、削出高台	2.5GY8/1 灰白	
110	SK635	須恵器（東播産）	鉢		(5.6)			口縁部片	内外面ロクロナデ	5Y5/1 灰	
111	SK635	須恵器（東播産）	鉢		(5.0)			口縁部片	内外面ロクロナデ	N5/0 灰	
112	SK635	須恵器（東播産）	鉢		(2.6)			口縁部片	内外面ロクロナデ	N4/0 灰	
113	SK635	瓦器	鉢（方形）					口縁部片	内外面ヘラミガキ	5YR7/6 橙	
114	SK635	土師器	羽釜	(9.6)	4.3		(11.8)	30	口縁内外面ヨコナデ、内面オサエ後ナデ、外面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	鍔部以下煤付着
115	SK635	土師器	羽釜	21.0	(14.0)		(25.6)	70	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	2.5YR8/2 灰白	大和H型、鍔部以下煤付着
116	SK635	土師器	羽釜	(30.6)	(16.6)		(33.6)	10	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形後内面板状工具ナデ	10YR8/4 浅黄橙	大和B型

表16　SK636出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
117	SK636	土師器	皿	8.8	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	A群、皿BⅠ-1 外面工具痕
118	SK636	土師器	皿	9.2	1.5			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-1
119	SK636	土師器	皿	9.2	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
120	SK636	土師器	皿	9.2	1.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR8/3 淡黄	A群、皿BⅠ-1
121	SK636	土師器	皿	9.2	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-1
122	SK636	土師器	皿	9.8	1.8			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
123	SK636	土師器	皿	8.4	1.5			75	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-2
124	SK636	土師器	皿	8.8	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
125	SK636	土師器	皿	8.8	1.5			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿BⅠ-2
126	SK636	土師器	皿	8.9	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y5/1 灰黄	A群、皿BⅠ-2
127	SK636	土師器	皿	9.0	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
128	SK636	土師器	皿	9.0	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/1 灰白	A群、皿BⅠ-2
129	SK636	土師器	皿	9.1	1.6			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
130	SK636	土師器	皿	9.1	3.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
131	SK636	土師器	皿	9.3	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
132	SK636	土師器	皿	9.3	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
133	SK636	土師器	皿	9.4	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
134	SK636	土師器	皿	9.5	1.5			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
135	SK636	土師器	皿	9.5	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
136	SK636	土師器	皿	9.6	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/3 浅黄橙	A群、皿BⅠ-2
137	SK636	土師器	皿	9.6	1.9			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
138	SK636	土師器	皿	9.8	1.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
139	SK636	土師器	皿	8.4	1.4			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-3c
140	SK636	土師器	皿	9.2	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-3c
141	SK636	土師器	皿	9.4	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-3c
142	SK636	土師器	皿	10.6	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-3c 口縁部煤付着
143	SK636	土師器	皿	13.4	2.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
144	SK636	土師器	皿	13.4	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	A群、皿BⅠ-1 内面工具痕
145	SK636	土師器	皿	13.0	2.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿BⅠ-2
146	SK636	土師器	皿	13.0	1.3			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿BⅠ-2
147	SK636	土師器	皿	13.1	2.3			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2
148	SK636	土師器	皿	13.7	2.4			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR8/3 淡黄	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
149	SK636	土師器	皿	14.1	2.5			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿BⅠ-2 内面工具痕
150	SK636	土師器	皿	13.1	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-3c
151	SK636	土師器	皿	13.6	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿BⅠ-3c
152	SK636	土師器	皿	13.1	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	A群、皿E 内面工具痕、外面掌痕
153	SK636	土師器	皿	13.1	3.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿E
154	SK636	土師器	皿	13.2	3.0			75	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿E
155	SK636	土師器	皿	13.2	3.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿E 内面工具痕
156	SK636	土師器	皿	13.2	2.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿E
157	SK636	土師器	皿	13.5	2.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿E
158	SK636	土師器	皿	14.1	3.1			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	A群、皿E
159	SK636	土師器	皿	12.1	3.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/6 浅黄橙	A群、皿BⅡ
160	SK636	土師器	皿	12.5	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/6 橙	A群、皿BⅠ-2 内外面墨書
161	SK636	土師器	羽釜	(13.1)	(4.3)		(15.1)	10	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR7/4 にぶい黄橙	大和H型 角閃石
162	SK636	土師器	羽釜	(21.0)	(6.8)		(17.0)	口縁部片	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5Y8/1 灰白	大和B型 角閃石
163	SK636	瓦器	椀	13.7	4.1	4.1		90	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	
164	SK636	瓦器	椀	12.1	3.8	3.7		100	口縁部外面ヨコナデ、内面イタナデ後ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	
165	SK636	瓦器	椀	13.0	4.0	3.8		90	口縁部外面ヨコナデ、内外面ヘラミガキ	N5/0 灰	
166	SK636	瓦器	椀	12.2	3.8	4.6		100	口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、外面オサエ・ナデ	N6/0 灰	外面掌痕
167	SK636	瓦器	椀	13.5	4.1			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N5/0 灰	
168	SK636	瓦器	皿	9.2	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面オサエ	N5/0 灰	
169	SK636	土師器	椀		1.5	(6.0)		60	内面ナデ、外面オサエ、貼付高台	10YR7/4 にぶい黄橙	

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
170	SK636	須恵器（東播系）	鉢	(29.0)	10.4	(10.0)		30	内外面ロクロナデ、外面底部回転糸切り	N7/0 灰	
171	SK636	国産陶器（常滑産）	甕	(33.5)	(6.9)			10	内外面ロクロナデ	5YR4/4 にぶい赤褐	
172	SK636	瓦質土器	浅鉢		(4.5)			口縁部片	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	N5/0 灰	樟葉産
173	SK636	瓦質土器	浅鉢	(47.5)	10.6	40.3		80	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	N5/0 灰	底部板状圧痕、大和産

表17　ＳＫ638出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
174	SK638	土師器	皿	8.7	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/3 にぶい褐	Ａ群、皿ＢⅠ－２
175	SK638	土師器	皿	8.8	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
176	SK638	土師器	皿	9.0	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
177	SK638	土師器	皿	9.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
178	SK638	土師器	皿	8.4	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	Ａ群、皿ＢⅠ－２
179	SK638	土師器	皿	8.6	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
180	SK638	土師器	皿	10.8	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	Ａ群、皿ＢⅠ－２
181	SK638	土師器	皿	11.1	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR5/6 明赤褐	Ａ群、皿ＢⅠ－２ 口縁部煤付着
182	SK638	土師器	皿	11.5	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
183	SK638	土師器	皿	11.3	2.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
184	SK638	土師器	皿	11.6	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２
185	SK638	土師器	皿	11.3	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	Ａ群、皿ＢⅠ－３ｃ 角閃石
186	SK638	土師器	皿	11.1	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	Ａ群、皿ＢⅠ－２ 底部に焼成後穿孔あり
187	SK638	土師器	皿	(8.4)	1.1			10	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	Ａ群、皿Ｄ
188	SK638	土師器	皿	7.4	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/1 灰白	京都産
189	SK638	土師器	皿	(7.6)	1.9			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/1 灰白	京都産
190	SK638	土師器	皿	(11.8)	2.8			15	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5Y8/1 灰白	京都産
191	SK638	瓦器	椀		(2.5)			口縁部片	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ、貼付高台	N5/0 灰	
192	SK638	白色土器	椀		(2.4)	(7.2)		底部片	内外面ロクロナデ、削出高台	2.5Y8/2 灰白	
193	SK638	山茶椀	椀		(2.5)			口縁部片	内外面ロクロナデ	5Y6/1 灰	内面～口縁部に自然釉
194	SK638	須恵器（東播産）	鉢		(4.6)			口縁部片	内外面ロクロナデ	10Y6/1 灰	口縁外面に自然釉
195	SK638	白磁	皿	(8.4)	1.7			20	内外面施釉、口唇部釉剥ぎ、底部外面施釉後フキトリ	5GY8/1 灰白	Ⅸ類
196	SK638	鉄釉陶器（建窯）	天目椀		(4.3)	(3.2)		25	内外面施釉、削出高台、底部露胎	10YR7/2 にぶい黄橙（胎）	
197	SK638	黄釉陶器	盤		(6.0)			口縁部片	内面外面施釉、口縁部外面・体部外面釉剥ぎ	2.5Y7/2 灰黄（釉）	口縁部に重ね焼き目跡あり
198	SK638	土師器	羽釜		(4.1)			口縁部片	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5YR6/1 褐灰	大和Ｈ型 鍔部以下煤付着
199	SK638	土師器	羽釜		(6.0)			口縁部片	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	2.5Y8/2 灰白	鍔部以下煤付着
200	SK638	土師器	羽釜	(19.0)	(5.2)		(23.0)	25	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR8/4 浅黄橙	大和Ｈ型
201	SK638	瓦質土器	浅鉢？		(11.0)	(13.0)		40	内面ナデ後ヘラミガキ・ケズリ、外面ヘラミガキ、底部内面ナデ、底部外面ハナレスナ付着	N4/0 灰	
202	SK638	国産陶器（東海産）	鉢	(32.0)	11.9	(12.4)		10	内外面ロクロナデ、高台貼付後ケズリ	2.5Y7/3 浅黄	体部内面に自然釉、見込みに重ね焼目跡あり

表 18　ＳＫ 639 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存 %	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
203	SK639	土師器	皿	8.3	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿Ｃａ 角閃石
204	SK639	土師器	皿	7.0	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/1 灰白	京都産
205	SK639	土師器	皿	7.3	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/1 灰白	京都産
206	SK639	土師器	皿	9.2	1.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
207	SK639	土師器	皿	11.0	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
208	SK639	土師器	皿	11.0	2.3			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
209	SK639	土師器	皿	11.0	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
210	SK639	土師器	皿	11.0	2.3			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
211	SK639	土師器	皿	11.1	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2
212	SK639	土師器	羽釜		(4.0)			口縁部片	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5YR7/4 にぶい橙	大和Ｈ型 被熱、角閃石

表 19　ＳＫ 642 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存 %	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
213	SK642	土師器	皿	7.7	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b、口縁部煤付着、外面植物圧痕
214	SK642	土師器	皿	7.7	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/4 にぶい赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
215	SK642	土師器	皿	7.8	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR5/4 にぶい褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
216	SK642	土師器	皿	7.8	1.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b 口縁部煤付着、角閃石
217	SK642	土師器	皿	(7.9)	1.7			50	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
218	SK642	土師器	皿	8.0	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b
219	SK642	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
220	SK642	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
221	SK642	土師器	皿	8.1	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR4/6 赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
222	SK642	土師器	皿	8.1	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b 鉄製品付着
223	SK642	土師器	皿	8.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b 口縁部煤付着、角閃石
224	SK642	土師器	皿	8.2	1.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b 口縁部煤付着
225	SK642	土師器	皿	8.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
226	SK642	土師器	皿	8.1	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR4/3 褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b 外面煤付着
227	SK642	土師器	皿	9.0	1.8			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR4/4 にぶい赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b 口縁部煤付着
228	SK642	土師器	皿	9.6	2.3			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
229	SK642	土師器	皿	9.8	2.4			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b
230	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b
231	SK642	土師器	皿	9.7	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b
232	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b
233	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ - 2b 底部板状圧痕
234	SK642	土師器	皿	9.9	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ - 2b

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存 %	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
235	SK642	土師器	皿	9.6	2.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b 底部に焼成後穿孔あり
236	SK642	土師器	皿	10.0	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b 内面工具痕
237	SK642	土師器	皿	10.0	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ－２b
238	SK642	土師器	皿	10.1	2.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ－２b
239	SK642	土師器	皿	10.1	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ－２b 底部板状圧痕
240	SK642	土師器	皿	10.2	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b
241	SK642	土師器	皿	(10.2)	2.1			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b
242	SK642	土師器	皿	10.1	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b 内面工具痕
243	SK642	土師器	皿	10.3	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b
244	SK642	土師器	皿	10.7	3.3			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A 群、皿ＢⅠ－２b 角閃石
245	SK642	土師器	皿	10.5	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ－２b 内面工具痕、角閃石
246	SK642	土師器	皿	(11.2)	2.6			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A 群、皿ＢⅠ－２b
247	SK642	土師器	皿	9.6	2.2			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A 群、皿ＢⅠ－２b 底部に焼成後穿孔あり、内面工具痕
248	SK642	土師器	台付皿	(8.8)	3.1	(6.3)		100	内外面ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	脚部内面工具痕、角閃石
249	SK642	土師器	皿	6.8	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR8/3 淡橙	京都産
250	SK642	土師器	皿	7.3	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
251	SK642	土師器	皿	7.1	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
252	SK642	土師器	皿	7.2	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
253	SK642	土師器	皿	7.0	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
254	SK642	土師器	皿	7.5	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B 群
255	SK642	土師器	皿	7.2	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
256	SK642	土師器	皿	10.5	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群、A 群皿 B と製作似る
257	SK642	土師器	皿	11.8	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群、A 群皿 B と製作似る
258	SK642	土師器	皿	9.8	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	B 群
259	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
260	SK642	土師器	皿	(10.1)	2.3			45	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
261	SK642	土師器	皿	10.1	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/3 淡黄	B 群
262	SK642	土師器	皿	10.1	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	B 群
263	SK642	土師器	皿	10.2	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B 群
264	SK642	土師器	皿	10.3	2.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B 群
265	SK642	土師器	皿	10.3	2.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
266	SK642	土師器	皿	10.5	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	B 群 内面工具痕
267	SK642	土師器	皿	(10.5)	2.3			30	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
268	SK642	土師器	皿	10.5	2.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
269	SK642	土師器	皿	(11.0)	2.0			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群
270	SK642	土師器	皿	(11.7)	3.0			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B 群

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
271	SK642	土師器	皿	12.7	2.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
272	SK642	土師器	皿	(12.3)	3.6			45	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
273	SK642	土師器	皿	(12.4)	3.0			50	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
274	SK642	土師器	皿	12.9	3.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
275	SK642	土師器	皿	13.0	3.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群 内面被熱
276	SK642	土師器	皿	13.0	3.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
277	SK642	土師器	皿	13.1	3.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	B群
278	SK642	土師器	皿	13.3	3.4			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
279	SK642	土師器	皿	13.6	3.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群 内面被熱、鉄製品付着
280	SK642	土師器	皿	16.3	4.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ・オサエ、外面オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B群 鉄製品付着
281	SK642	土師器	羽釜	(12.2)	3.3		(13.4)	20	内外面ナデ	10YR8/3 浅黄橙	
282	SK642	褐釉陶器	壷	(5.0)	(3.0)			口縁部片	内外面施釉、口唇部釉剥ぎ	10YR3/3 暗褐（釉）	口縁部に重ね焼き目跡あり
283	SK642	瓦質土器	浅鉢		(3.2)			口縁部片	内外面ナデ後ミガキ	N4/0 灰	菊花文スタンプ
284	SK642	白磁	碗		(3.0)			口縁部片	内外面施釉	5Y7/2 灰白	
285	SK642	山茶椀	椀		(4.0)			体部片	内外面ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白	北部系
286	SK642	土師器	羽釜	(19.5)	3.7			口縁部片	口縁部ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR8/3 浅黄橙	大和B型 外面煤付着
287	SK642	土師器	羽釜	(24.0)	3.5		(23.0)	口縁部片	口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR7/4 にぶい黄橙	大和H型 外面煤付着

表20　SX808出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
288	SX808	土師器	皿	7.2	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、口縁部煤付着
289	SX808	土師器	皿	7.5	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群
290	SX808	土師器	皿	7.5	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	A群、口縁部煤付着
291	SX808	土師器	皿	7.8	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、口縁部煤付着
292	SX808	土師器	皿	7.8	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、口縁部煤付着
293	SX808	土師器	皿	8.0	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、口縁部煤付着
294	SX808	土師器	皿	(7.1)	1.5			30	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、内面工具痕
295	SX808	土師器	皿	(7.3)	1.6			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
296	SX808	土師器	皿	7.6	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
297	SX808	土師器	皿	8.1	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
298	SX808	土師器	皿	8.2	1.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y5/1 灰黄	A群、口縁部煤付着
299	SX808	土師器	皿	(8.1)	1.2			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、口縁部煤付着
300	SX808	土師器	皿	(20.3)	4.2			10	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、内外面煤付着
301	SX808	土師器	皿	(7.2)	1.1			40	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群
302	SX808	土師器	皿	(9.6)	1.8			30	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	C群
303	SX808	土師器	皿	9.0	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群、口縁部煤付着

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存%	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
304	SX808	土師器	皿	9.6	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	C群、 口縁部煤付着
305	SX808	土師器	皿	(9.6)	1.7			50	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	C群、 角閃石
306	SX808	土師器	皿	(9.3)	1.5			20	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	5Y7/1 灰白	C群、 口縁部煤付着
307	SX808	土師器	皿	(10.8)	2.1			50	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	1 C群、 口縁部煤付着
308	SX808	土師器	皿	(11.6)	2.2			15	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	C群
309	SX808	土師器	皿	(11.2)	2.3			40	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群
310	SX808	土師器	皿	(11.7)	2.1			50	内面・口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ・ナデ	2.5Y6/1 黄灰	C群、 内面被熱
311	SX808	土師器	皿	12.2	2.5			80	内面・口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR6/1 褐灰	C群、 内面被熱
312	SX808	土師器	皿	(12.4)	2.1			30	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	C群
313	SX808	土師器	皿	12.2	2.0			70	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ハケナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群、 口縁部煤付着、内面被熱
314	SX808	土師器	皿	12.5	2.6			80	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	5Y7/1 灰白	C群
315	SX808	土師器	羽釜	(14.5)	5.8		(20.8)	10	口縁部・鍔ヨコナデ、 体部無文のタタキ成形	2.5Y7/1 灰白	大和H型 外面鍔部以下煤付着
316	SX808	土師器	羽釜	(22.0)	14.7		(26.7)	50	口縁部・鍔ヨコナデ、 体部無文のタタキ成形	2.5Y7/2 灰黄	大和Ｉ型 外面鍔部以下煤付着
317	SX808	国産陶器 (備前産)	捏鉢	(23.0)	8.5	(14.0)		20	内外面ロクロナデ	10YR5/3 にぶい褐	
318	SX808	国産陶器 (信楽産)	壷	(19.6)	(7.5)			20	内外面ロクロナデ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	
319	SX808	国産陶器 (信楽産)	擂鉢	(29.0)	12.2	(13.4)		20	内外面ロクロナデ 内面４条１単位の擂目	5YR6/6 橙	
320	SX808	青磁	碗	(11.1)	4.7			20	内外面施釉 龍泉窯系、外面線彫蓮弁文	2.5Y7/3 浅黄（釉）	
321	SX808	青花	碗	(9.5)	2.1			10	内外面施釉	9/0 白（胎）	
322	SX808	青花	皿	(11.0)	2.3			口縁部片	内外面施釉	9/0 白（胎）	
323	SX808	土師器	採煙用土器		(2.9)			口縁部片	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ・ナデ、 内面ヨコナデ後ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	内面煤付着
324	SX808	土師器	採煙用土器	(18.6)	3.5			10	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ、内面ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	内面煤付着
325	SX808	土師器	採煙用土器	(18.5)	4.4			30	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ後ナデ、内面ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	内面煤付着
326	SX808	瓦質土器	風炉	(27.4)	5.0		(31.0)	口縁部片	内面ヨコナデ、外面ミガキ	N4/0 灰	
327	SX808	瓦質土器	擂鉢	(31.6)	15.0	(11.0)		40	口縁外面ヨコナデ、 外面ハケ後オサエ、内面摩滅	5Y8/1 灰白	
328	SX808	瓦質土器	擂鉢	(33.2)	16.0	(11.8)		60	口縁内外面ヨコナデ、外面ハケ後拳圧痕、内面 10 条１単位の擂目	N3/0 暗灰	
329	SX808	瓦質土器	捏鉢	(43.0)	15.3	(17.4)		30	外面ハケナデ、内面ミガキ、 口縁部付近内外面摩滅・剥落	N3/0 暗灰	

表 21　ＳＫ 651 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存%	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
330	SK651	土師器	皿	8.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR7/6　橙	A群
331	SK651	土師器	皿	8.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群
332	SK651	土師器	皿	8.3	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
333	SK651	土師器	皿	8.4	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR7/6　橙	A群
334	SK651	土師器	皿	8.5	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
335	SK651	土師器	皿	8.8	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
336	SK651	土師器	皿	10.2	1.8			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	D群、外面布痕
337	SK651	土師器	皿	10.9	1.7			60	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ハケナデ	10YR8/3 浅黄橙	D群

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
338	SK651	土師器	皿	(10.8)	2.1			30	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群、底部内面煤付着
339	SK651	土師器	皿	12.0	2.1			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群、破損後被熱
340	SK651	国産磁器(肥前産)	碗	9.8	5.3	3.6		80	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	9/0 白（釉）	
341	SK651	土師器	羽釜	(24.8)			(25.0)		口縁部・鍔ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5YR7/3 にぶい橙	大和Ⅰ型
342	SK651	瓦質土器	壷	(13.4)	13.9	(10.2)	(15.6)	50	口縁部内外面・外面ヨコナデ、内面ハケ、底部外面ハナレスナ付着	N5/0 灰	外面工具痕

表22　ＳＥ507出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
343	SE507	土師器	皿	6.3	2.5			100	内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、口縁部煤付着
344	SE507	土師器	皿	6.8	1.2			100	内面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	E群
345	SE507	土師器	皿	7.9	1.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	D群、口縁部煤付着、外面掌痕
346	SE507	土師器	皿	7.0	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群
347	SE507	土師器	皿	7.2	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群、口縁部煤付着
348	SE507	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群、口縁部煤付着
349	SE507	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/3 浅黄	D群、口縁部煤付着
350	SE507	土師器	皿	7.5	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群
351	SE507	土師器	皿	7.5	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/3 淡黄	D群、口縁部煤付着
352	SE507	土師器	皿	7.5	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	D群、口縁部煤付着
353	SE507	土師器	皿	7.6	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群、口縁部煤付着
354	SE507	土師器	皿	7.8	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	D群、口縁部煤付着
355	SE507	土師器	皿	8.2	1.9			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	D群、口縁部煤付着
356	SE507	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/3　浅黄	D群
357	SE507	土師器	皿	10.7	2.4			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群
358	SE507	土師器	皿	11.0	2.0			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群
359	SE507	土師器	皿	11.3	2.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群、外面掌痕
360	SE507	土師器	皿	11.5	2.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	D群、口縁部煤付着
361	SE507	土師器	皿	11.6	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群
362	SE507	土師器	皿	12.0	2.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群、口縁部煤付着
363	SE507	土師器	皿	10.6	2.0			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	E群、口縁部煤付着、外面掌痕
364	SE507	土師器	皿	10.8	2.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	E群、口縁部煤付着、外面掌痕
365	SE507	土師器	皿	12.0	2.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	E群、掌痕
366	SE507	国産磁器(肥前産)	碗	10.7	5.7	4.8		80	内外面施釉、畳付ハナレスナ付着	9/0 白（釉）	
367	SE507	国産陶器(肥前産)	椀	11.0	6.6	5.3		80	内面・口縁部～体部外面施釉、削り出し高台	5Y7/3 浅黄（釉）	高台内銘あり
368	SE507	土師器	炮烙	17.0	7.5		17.0	100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外型成形	5YR6/6 橙	底部内面煤付着 底部外面被熱
369	SE507	土師器	炮烙	28.8	8.2		30.0	75	内面・口縁部外面ヨコナデ、外型成形	10YR7/4 にぶい黄橙	底部内外面煤付着
370	SE507	土師器	鉢	16.1	6.5	8.5	16.1	70	内外面ヨコナデ、底面は摩耗する	10YR8/3 浅黄橙	底部内面煤付着 底部外面被熱
371	SE507	国産陶器(信楽産)	擂鉢	(27.0)	15.2	(15.6)			内外面ロクロナデ、内面８条１単位の擂目、見込みは格子状に擂目	10YR4/2 灰赤	

表 23　ＳＫ 656 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存 %	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
372	SK656	土師器	皿	7.1	0.7			90	内外面オサエ	7.5YR5/3 にぶい褐	A群
373	SK656	土師器	皿	6.7	1.0			100	内外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群
374	SK656	土師器	皿	7.2	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群
375	SK656	土師器	皿	6.7	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群
376	SK656	土師器	皿	7.1	1.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群
377	SK656	土師器	皿	7.3	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	E群
378	SK656	土師器	皿	11.0	2.1			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	E群
379	SK656	土師器	皿	10.2	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5Y7/6 橙	E群
380	SK656	土師器	皿	11.0	2.1			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	E群
381	SK656	土師器	皿	8.2	1.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外型成形	7.5YR7/4 にぶい橙	外型作り 口縁部煤付着
382	SK656	土師器	皿	6.6	1.4			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群、口縁部煤付着
383	SK656	土師器	皿	7.1	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	D群
384	SK656	土師器	皿	7.5	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	D群、口縁部煤付着
385	SK656	土師器	皿	7.5	1.2			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
386	SK656	土師器	皿	7.5	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	D群
387	SK656	土師器	皿	7.7	1.3			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
388	SK656	土師器	皿	7.2	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
389	SK656	土師器	皿	7.2	1.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
390	SK656	土師器	皿	7.3	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
391	SK656	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群
392	SK656	土師器	皿	9.7	1.7			90	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群
393	SK656	土師器	皿	11.4	2.3			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群
394	SK656	土師器	皿	12.1	2.2			90	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群
395	SK656	土師器	高台付皿	8.8	5.7	7.4		90	内面・外面オサエ、脚部内面オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
396	SK656	土師器	高台付皿	(9.0)	5.4	(7.0)		40	内外面オサエ	2.5Y7/2　灰黄	
397	SK656	土師器	炮烙	15.8	5.0			90	内面・口縁部ヨコナデ、外型成形	7.5YR6/4 にぶい橙	鍔部以下煤付着、角閃石
398	SK656	土師器	炮烙	31.4	9.4		32.3	95	内面・口縁部ヨコナデ、外型成形	7.5YR7/4 にぶい橙	鍔部以下煤付着
399	SK656	国産陶器（信楽産）	仏飯器	8.0	5.7	4.5		80	内外面施釉、底部糸切	5YR4/4 にぶい赤褐（釉）	底部墨書、欠損部に漆継痕あり
400	SK656	国産磁器（肥前産）	碗	(11.2)	6.5	(4.2)		40	内外面施釉、畳付ハナレスナ付着	9/0 白（釉）	
401	SK656	国産磁器（肥前産）	碗	10.4	5.3	3.9		70	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	2.5GY8/1 灰白（釉）	
402	SK656	国産磁器（肥前産）	碗	11.0	6.0	3.8		90	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	9/0 白（釉）	
403	SK656	国産磁器（肥前産）	碗	11.2	5.3	4.8		100	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	5GY8/1 灰白（釉）	
404	SK656	国産陶器（堺産）	擂鉢	24.6	8.8			100	口縁内外面・体部外面ケズリ、底部内面ナデ、底部外面静止ケズリ	10R5/6 赤	８条１単位の擂目
405	SK656	国産陶器（信楽産）	擂鉢	36.0	14.2	15.2		70	内外面ロクロナデ、外面ケズリ、内面摩滅、高台内ハナレスナ付着	7.5R2/2 極暗赤褐	６条１単位の擂目 見込みは放射状に擂目

表 24　ＳＫ 662 出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器 種	法 量（復原）cm				残存 %	技 法 の 特 徴	色　　調	備　　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
406	SK662	土師器	皿	6.1	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/2 灰褐	口縁部煤付着１箇所、F 群
407	SK662	土師器	皿	6.1	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	F 群
408	SK662	土師器	皿	6.1	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F 群
409	SK662	土師器	皿	6.2	0.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着２箇所、F 群
410	SK662	土師器	皿	6.2	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	F 群
411	SK662	土師器	皿	6.2	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着１箇所、F 群
412	SK662	土師器	皿	6.3	1.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F 群
413	SK662	土師器	皿	6.3	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着１箇所、F 群
414	SK662	土師器	皿	6.3	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F 群
415	SK662	土師器	皿	6.4	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着１箇所、F 群
416	SK662	土師器	皿	6.4	1.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着１箇所、F 群
417	SK662	土師器	皿	6.5	0.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F 群
418	SK662	土師器	皿	6.6	1.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部煤付着３箇所、F 群
419	SK662	土師器	皿	6.6	0.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F 群
420	SK662	土師器	皿	6.8	0.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F 群
421	SK662	土師器	皿	6.9	1.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F 群
422	SK662	土師器	皿	7.6	1.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部煤付着１箇所、F 群
423	SK662	土師器	皿	7.6	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	F 群
424	SK662	土師器	皿	7.8	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	F 群
425	SK662	土師器	皿	7.8	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F 群
426	SK662	土師器	皿	(12.8)				12.5	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	口縁部煤付着２箇所、F 群
427	SK662	土師器	皿	6.3	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	D群
428	SK662	土師器	皿	6.3	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2 灰白	口縁部煤付着、D群
429	SK662	土師器	皿	6.6	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	D群
430	SK662	土師器	皿	6.7	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/1 灰白より白い灰	D群
431	SK662	土師器	皿	6.9	1.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	D群
432	SK662	土師器	皿	7.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2 灰白	D群
433	SK662	土師器	皿	7.0	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	D群
434	SK662	土師器	皿	7.1	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	口縁部煤付着、D群
435	SK662	土師器	皿	11.0	1.8			75	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2 灰白	E 群
436	SK662	土師器	皿	11.3	2.0			66	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/3 淡黄	E 群
437	SK662	土師器	皿	11.5	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR8/2 灰白	E 群
438	SK662	土師器	高台付皿	6.4	4.8	6.3		100	内外面未調整、脚部内面に粘土板接合痕	10YR7/4 にぶい黄橙	胎土 A 群に似る
439	SK662	土師器	高台付皿	9.7	8.5	9.0		50	内外面未調整、脚部内面に粘土板接合痕	2.5YR8/3 淡黄	胎土D群に似る
440	SK662	土師器	高台付皿	11.0	7.3	9.0		66	内外面未調整	7.5YR8/2 灰白	脚部内面に墨書「春日社」、胎土 A 群に似る

出土土器観察表

番号	出土遺構	種　類	器種	法量（復原）cm				残存%	技法の特徴	色　調	備　考
				口径	器高	底径	胴部最大径				
441	SK662	国産陶器（信楽産）	灯明受け	7.0	4.35	6.0		100	内外面施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白	
442	SK662	国産陶器（信楽産）	灯明皿	7.1	1.8	3.7		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ、見込みトチン痕３つ	5Y8/3 淡黄	
443	SK662	国産陶器（信楽産）	灯明皿	8.7	1.7	3.4		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ、見込み櫛目１条・トチン痕３つ	7.5Y7/2 灰白よりやや黄味強い	
444	SK662	国産陶器（信楽産）	灯明受け	6.6	1.2	2.8		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ	7.5Y7/2 灰白	
445	SK662	国産陶器（信楽産）	灯明受け	8.3	1.4	3.7		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白	
446	SK662	土師器	舌出し	12.5	6.0			100	口縁・内面ヨコナデ調整、外底面未調整	2.5Y8/2 灰白	舌部欠損
447	SK662	土師器	炮烙	(30.6)			(31.2)	25	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/4 にぶい橙	
448	SK662	土師器	炮烙	(49.2)			(46.6)	12.5	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/3 にぶい橙	
449	SK662	土師器	炮烙	(35.4)			(34.6)	16	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	2.5YR8/2 灰白	
500	SK662	土師器	炮烙	(34.6)			(34.3)	12.5	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/3 にぶい橙	
501	SK662	土師器	炮烙	(36.8)			(37.5)	8	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR8/3 浅黄橙	
502	SK662	国産陶器（上野産）	水飴壷	(8.3)	11.3	6.6	11.65	50	内外面施釉、外面下半～底部露胎	やや黄味をおびた暗オリーブ色	三官飴壷
503	SK662	青花	鉢	13.8	7.9	5.4		90	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	7.5GY8/1 明緑灰（釉）	
504	SK662	国産磁器（肥前産）	猪口	(8.2)	6.3	(5.8)		50	内外面施釉、底部蛇の目釉剥ぎ	9/0 白（釉）	焼継痕あり
505	SK662	国産磁器（瀬戸産）	碗	8.9	4.6	3.5		100	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	明緑灰	
506	SK662	国産磁器（肥前産）	碗	11.9	6.5	5.7		100	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	白色	
507	SK662	国産磁器（瀬戸産）	碗	11.6	6.2	5.0		100	内外面施釉、畳付釉剥ぎ	7.5GY8/1 明緑灰（釉）	
508	SK662	国産陶器（赤膚産）	皿	10.6	3.2	4.5		100	内外面施釉、外面下半～底部露胎	淡緑	内面白泥で渦巻文描く
509	SK662	国産陶器（赤膚産）	皿	9.0	3.2	3.4		100	内外面施釉、外面下半～底部露胎	暗緑	見込みに鉄絵で草花文描く
510	SK662	国産陶器（信楽産）	カンテラ	5.3	7.1	4.0			内外面施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白	取手欠損
510	SK662	国産陶器（信楽産）	カンテラ蓋	5.5	3.8	1.2			外面施釉、	7.5Y7/2 灰白	
511	SK662	国産陶器（信楽産）	土瓶	9.0	11.9	6.2	17.3	100	外面施釉、褐釉	淡茶褐色	
512	SK662	国産陶器（信楽産）	行平鍋	18.3	10.6	7.6		100	内外面施釉、底部露胎	7.5Y5/3 灰オリーブ	
513	SK662	国産陶器（信楽産）	三耳壷	6.8	17.7	8.1	13.6	100	外面施釉、上半褐釉、下半白色釉	2.5Y6/8 明黄褐	腰白茶壷
514	SK662	国産陶器（堺産）	擂鉢	28.4	9.4	13.6		100	内面ロクロナデ、外面ロクロヘラケズリ、底部はなれ砂	10R4/2 灰赤	内面９条１単位の擂目、見込み８本１単位の擂目
515	SK662	国産陶器（信楽産）	擂鉢	31.7	14.0	15.4		66	内外面ロクロナデ、外面下半ロクロヘラケズリ、底部未調整	10R3/2 暗赤褐	内面７条１単位の擂目、見込み９本１単位の擂目

第３章　奈良町遺跡出土の土師器皿の編年

中近世土器の編年研究における土師器皿の重要性は、過去の研究からも高いことは明らかである。奈良においては、稲垣晋也氏[1)]、森下惠介氏[2)]、立石堅志氏[3)]らの編年研究が知られる。これらの研究からすでに20年ほど経過し、その間新資料や良好な資料が蓄積されてきた。今回報告したＨＪ第559次調査出土の資料に加えて、改めて奈良町遺跡出土の資料を概観し、土師器皿の編年を考えてみたい。

Ａ　奈良町遺跡出土の土師器皿の大分類と変遷

遺跡出土の土師器皿が、形態・製作技術・胎土等から大きく６群に分かれることを、第２章で明らかにした。改めて記すと

・Ａ群　古代から系譜の追える一群で、形態は比較的平坦な底部から屈曲して口縁部となる。
・Ｂ群　胎土の色調が白色を意識した一群で、いわゆる白土器とされるもの。
・Ｃ群　灰白色の精良な胎土の一群で、形態は比較的平坦な底部に直線的な口縁部がつく。
・Ｄ群　底部の丸みが強く、底部と口縁部の境は不明瞭な形態の一群。口縁部のヨコナデ調整が口縁端部にしか及ばない。
・Ｅ群　Ｄ群土師器皿に比べ歪みが少なく、器形・調整とも丁寧な一群である。形態はやや平坦な底部と緩やかに湾曲する短い口縁部からなる。
・Ｆ群　褐色系の胎土で浅い皿の一群。平坦な底部と内湾する短い口縁部からなる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、この調整によって内面の底部と口縁部の境は浅く窪む。

これらの土師器群の組合せは、次の５つの組合せが確認できる。

１　Ａ群のみの資料
２　Ａ群とＢ群からなる資料
３　Ａ群とＣ群からなる資料
４　Ａ群とＤ群とＥ群からなる資料
５　Ｄ群とＥ群とＦ群からなる資料

さらに、Ａ群土師器皿の形態変化と供伴する土器から、組合せは１から５へと時期的に変化することがわかり、以下１段階から５段階と称する。　（中島・佐藤）

Ｂ　奈良町遺跡出土資料の編年

各段階の一括資料をさらに型式的に細分し、序列立てたものが表25である。各資料の位置付けについては、中島と佐藤が協議して行い、最終的に中島がまとめた。また１段階のＡ群土師器皿の変遷図については、佐藤による変遷図をもとに中島が再構成した。以下各段階ごとに概観する。

１段階

Ａ群土師器皿のみで構成される資料で、その開始を遡れば奈良時代の土師器に連なる。ここでは資料の制約上、瓦器椀出現以降の資料から取り扱うこととする。

Ａ群土師器皿は、主体をなす皿Ｂの口径が縮小化してゆき、大皿は16㎝代から11㎝代に、小皿は10㎝代から８㎝代へと推移する。

１　ＨＪ第490次調査ＳＫ07[4)]

素掘りの井戸出土で、未報告資料である。

土師器皿は、口径16㎝代の大皿と口径10㎝代の小皿からなる。小皿は皿Ａと皿Ｂ、大皿は皿Ｂからなる。大皿の口縁部形態は数種類あり、外反するものの率が高い。

供伴する瓦器椀はⅠ－Ａ・Ｂ型式である。

２　ＨＪ第559次調査ＳＫ613

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿は、口径16㎝代の大皿と口径10㎝代の小皿からなる。小皿は皿Ａと皿Ｂ、大皿は皿Ｂからなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を２段ナデ調整するものも多い。

供伴する瓦器椀はⅠ－Ｃ型式である。

３　ＨＪ第559次調査ＳＫ618

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿は、口径15㎝代の大皿と口径10㎝代の小皿からなる。小皿は皿Ａと皿Ｂ、大皿は皿Ｂからなるが、皿Ａの出土比率は減少する。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を２段ナデ調整するものも多い。２の資料に比べ大皿の口径の縮小化がうかがえる。

供伴する瓦器椀はⅠ－ＤとⅡ－Ａ型式である。

４　ＨＪ第228次調査ＳＫ03[5)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

土師器皿は皿Ａがなくなり、以後皿Ｂが主となる。口径15㎝代の大皿と口径10㎝代の小皿からなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を２段ナデ調整するものは減少する。

供伴する瓦器椀はⅠ－Ｄ型式である。

５　ＨＪ第232次調査ＳＥ02[6)]

素掘りの井戸出土の資料である。

土師器皿Ｂは、口径15㎝代の大皿と口径10㎝代の小皿からなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を２

表 25　奈良町遺跡　遺構編年表

	大和型（川越）	大和型（近江）	和泉型（尾上）	森下・立石	肥前産磁器		HJ559	標識資料	参考資料
						1段階	SE501		
	Ⅰ-A/B	Ⅰ-1		奈良 Ⅱ-A				HJ490 SK01（未）	
1100	Ⅰ-C	Ⅰ-2		奈良 Ⅱ-B			SK613		HJ97 SE11（延久３年）
	Ⅰ-D Ⅱ-A	Ⅰ-3					SK618	HJ89 SK03	
	Ⅰ-D新 Ⅱ-B	Ⅰ-4						HJ228 SK03 HJ232 SE02	
	Ⅱ-B			奈良 Ⅱ-C					
1200	Ⅲ-A古	Ⅰ-5						HJ258 SE03	
	Ⅲ-A新		(Ⅲ-1)						
	Ⅲ-B	Ⅰ-6	Ⅲ-3	奈良 Ⅱ-D			SK635 SK636	HJ11 SE05 HI269 SE03	
	Ⅲ-C	Ⅰ-7	(Ⅳ-1)					GG07 SE13	
1300	(Ⅲ-D?)	Ⅱ-1	(Ⅳ-2)	奈良 Ⅲ-A				HJ531 SK16 HJ287 SK10	
	(Ⅲ-E)	Ⅱ-2	(Ⅳ-3)				SK638 SK639	GG64 SK06	
	Ⅲ-E		(Ⅳ-3)					HJ232 SK03	
						2段階		GG31 SK03	
	(Ⅳ-A)		Ⅳ-4	奈良 Ⅲ-B				GG38 SK03	
	Ⅳ-B		(Ⅳ-5)					SD26 SD05	
1400							SK642		
	Ⅳ-C	Ⅱ-3		奈良 Ⅲ-C					L.5.2.6 SK07
	Ⅳ-D							GG63 SE01	L.5.2.6 SK08 奈良公園 SK11
									県東大寺 89 次 SX01
				奈良 Ⅳ-A		3段階		GG48 SK15	
1500									(HJ232 SK50)（未）
				奈良 Ⅳ-B					
								HJ482 SX14	
								SY02 SK07	
1600							SX808	HJ605 SD05/ SX06/09	
				奈良 Ⅳ-C				GG48 SE16	HJ424 SE16
					Ⅱ-1 Ⅱ-2	4段階		GG04 SX06	
				奈良 Ⅴ	Ⅲ		SK651	GG48 SE26 HJ651 SK24	GG9 近世土坑 HJ449 SK04（未）
1700								HJ332 SE06	HJ658 SK06（未）
					Ⅳ		SE507	HJ424 SE17	
								HJ332 SK16	
								HJ531 SK178（未）	
1800					Ⅴ		SK656		
						5段階		HJ228 近世土坑（未）	
							SK662		

表 26　奈良町遺跡　土師器皿型式別消長表

	遺構名	A群																	B群	C群	D群	E群	F群
		皿A		皿B											皿C		皿D	皿E					
		I	II	I										II									
				1		2				3			4										
				a	b	a	b	c	d	a	b	c			a	b							
1段階	**HJ559 次 SE501**	■																					
	HJ559 次 SK613	■	▒	■		■							■				▒						
	県 L.2.7.9・10SK01	■		■									■										
	HJ559 次 SK618	▒	▒	■		■							■				▒						
	HJ228 次 SK03			▒	▒	■				▒			▒				▒						
	HJ232 次 SE02			▒	▒	■				▒			▒										
	元興寺極楽坊８次 SK105				▒	■				■	▒		▒										
	興福寺菩提院大御堂地鎮具					■				▒	■	▒											
	元興寺極楽坊８次 SK108.114				▒	■				▒	■	▒					▒						
	元興寺極楽坊８次 SK112				▒	■				▒	■	▒											
	HJ258 次 SE03					■					▒	▒		▒									
	HJ11 次 SE05					■					▒	■											
	HJ559 次 SK635				▒	■				▒	▒	■		▒	▒		▒						
	HJ559 次 SK636				■	■						■		▒	▒		▒	■					
	HJ269 次 SE03					■						▒		▒			▒						
	GG07 次 SE13					■								▒									
	HJ531 次 SK16					■								▒	▒	▒							
	HJ287 次 SK10					■						▒			▒	▒							
	HJ559 次 SK638				▒	■					▒	▒			■	▒	▒						
	HJ559 次 SK639				▒	■									■	▒							
	HJ232 次 SK03					■									■	■							
	GG64 次 SK06					■									▒	■							
2段階	GG31 次 SK03					▒	■									■			■				
	GG14 次 SK05						■									■			■				
	HJ258 次 SK12						■									■			■				
	GG38 次 SK03						■									■			■				
	SD26 次 SD05						■									■			■				
	HJ559 次 SK624						■									■			■				
	県 L.2.7.9・10SE02						■									■			■				
	県 R.5.2.6SK07						▒									▒			■				
	県 R.5.2.6SK08																		■				
	名勝奈良公園 SK11						▒												■				
	GG63 次 SE01						■									■			■				
3段階	県東大寺 89 次 SX01							▒								▒				■			
	GG48 次 SK15							■								■				■			
	県東大寺 82 次土坑５																			■			
	HJ482 次 SX14							■												■			
	SY2 次 02							■												■			
	HJ559 次 SX808							■												■			
	HJ605 次 SD05 他							■												■			
	GG48 次 SE16							■												■			
	HJ258 次 SE16							■												■			
4段階	GG4 次 SX06							■													■		
	HJ559 次 SK651								■												■		
	GG48 次 SE26								■												■		
	HJ332 次 SE06								▒												■		
	HJ559 次 SE507								▒												■	▒	
	HJ332 次 SK16																				■	■	
	HJ559 次 SK656								▒												■	▒	
5段階	**HJ559 次 SK662**																				■	■	■

図中の黒のトーンは主体として出土、淡いトーンは少量の出土を示す。

段ナデ調整するものものもある。

供伴する瓦器椀はⅠ - DとⅡ - B型式である。

６　ＨＪ第 258 次調査ＳＥ 03[7)]

素掘りの井戸出土の資料である。

土師器皿Ｂは、口径 14㎝代の大皿と口径９㎝代の小皿からなる。深い器形のⅡ型式の大皿が、わずかだが初めて現れる。

供伴する瓦器椀はⅢ - A型式である。

７　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 635

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Ｂは、口径 13㎝代の大皿と口径９㎝代の小皿からなる。深い器形のⅡ型式の大皿が、わずかだが出土している。

供伴する瓦器椀はⅢ - B型式である。

８　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 636

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Ｂは、口径 13㎝代の大皿と口径９㎝代の小皿からなる。同時期の資料のＨＪ第 269 次調査ＳＥ 03 からは、深い器形のⅡ型式の大皿と小皿が少量出土している。

供伴する瓦器椀はⅢ - B型式である。

９　ＧＧ第 07 次調査ＳＥ 13[8)]

円形石組井戸の埋土上部からの出土資料である。

土師器皿Ｂは、口径 12㎝代の大皿と口径９㎝代の小皿からなる。また深い器形のⅡ型式の大皿と小皿が少量出土している。Ⅱ型式の口径は１型式のものに比べやや小さい。

供伴する瓦器椀はⅢ - C型式である。

10　ＨＪ第 531 次調査ＳＫ 16[9)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

土師器皿Ｂは、口径 12㎝前後の大皿と口径 9㎝前後の小皿が主体である。深い器形のⅡ型式が一定量出土する点が特徴である。小皿には新たに皿Ｃｂが現れる。

Ⅱ型式の皿は、口径が６～ 11㎝代まで９㎝代を除き１㎝ごとに分布する。これまでⅠ型式と同じく大小２種類の口径であったが、新たに別の法量分布を見せることは、Ⅰ型式とは別の機能が要求されたからであろうか。また作りは丁寧で、器壁が薄く歪みも少ない。Ⅰ・Ⅱ型式いずれも胎土の色調は、すべて橙色系である。

また京都産の白色系の土師器皿が、少量出土する。瓦器椀はほとんど含まず、Ⅲ - C頃の破片が少量ある。奈良町遺跡ではこの時期以降、瓦器椀の出土量が激減する。

11　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 638・639

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Ｂは、口径 11㎝前後の大皿と口径９㎝前後の小皿からなる。小皿には皿Ｂと同じ口径の皿Ｃがある。胎土の色調は、すべて橙色系である。

また京都産の白色系の土師器皿が、少量出土する。

12　ＨＪ第 232 次調査ＳＫ 03[10)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

土師器皿Ｂは、口径 11㎝前後の大皿と口径 8㎝の後半代の小皿からなる。小皿には皿Ｂと同じ口径の皿Ｃがある。器形・胎土の画一化がすすみ、色調はすべて橙色系で、２段階以降のＡ群（赤土器）のものと同じである。

２段階

Ａ群土師器皿に新たにＢ群土師器皿が加わる段階である。いわゆる「赤土器」「白土器」の時期である。Ａ群とＢ群の出土比率は各遺構ごとまちまちであるが、概してＡ群の率が高く、Ｂ群が半分以上を占める遺構は奈良町遺跡内では珍しい。

Ａ群土師器皿Ｂは、前段階から引き続き大皿と小皿の２種類からなり、口径・形態・胎土等の画一化が完了する。口径の縮小はさらにすすみ、大皿は当初の口径が 10㎝代だったのが最後には９㎝代に、小皿は９㎝代だったのが８㎝代となる。また小皿は「へそ皿」の形態の皿Ｃのみへと変化する。

Ｂ群土師器皿は、当初から数種の口径の皿が存在しており、口径毎に出土量の差はあるものの、口径の種類は２段階を通じて維持されている。口径の変化は追えないが、器高は縮小の傾向にあるようである。

一方、胎土が白色系のＡ群土師器皿が確認される資料があるが、その逆の赤色系の胎土のＢ群土師器皿は確認していない。

13　ＧＧ第 31 次調査ＳＫ 03[11)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

Ａ群土師器皿Ｂは、口径 10㎝代の大皿と口径８㎝代の小皿からなる。大皿は底部がやや狭く口縁部が長く直線的になり、断面形が低い逆台形の器形へと形態変化をおこす。大皿は以後この形態がしばらくつづく。小皿には皿Ｂと同じ口径の皿Ｃがある。

Ｂ群土師器皿は、口径７㎝代から 16㎝代まで各種あり、７㎝代と 11㎝代が多い。

Ａ群とＢ群の出土比率は、破片点数で約７対３である。供伴する瓦器椀はⅢ - E型式である。

14　ＧＧ第 38 次調査ＳＫ 03[12)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

Ａ群土師器皿Ｂは、口径 10㎝代の大皿のみとなり、小皿は口径８㎝代の皿Ｃのみとなる。大皿は逆台形の器

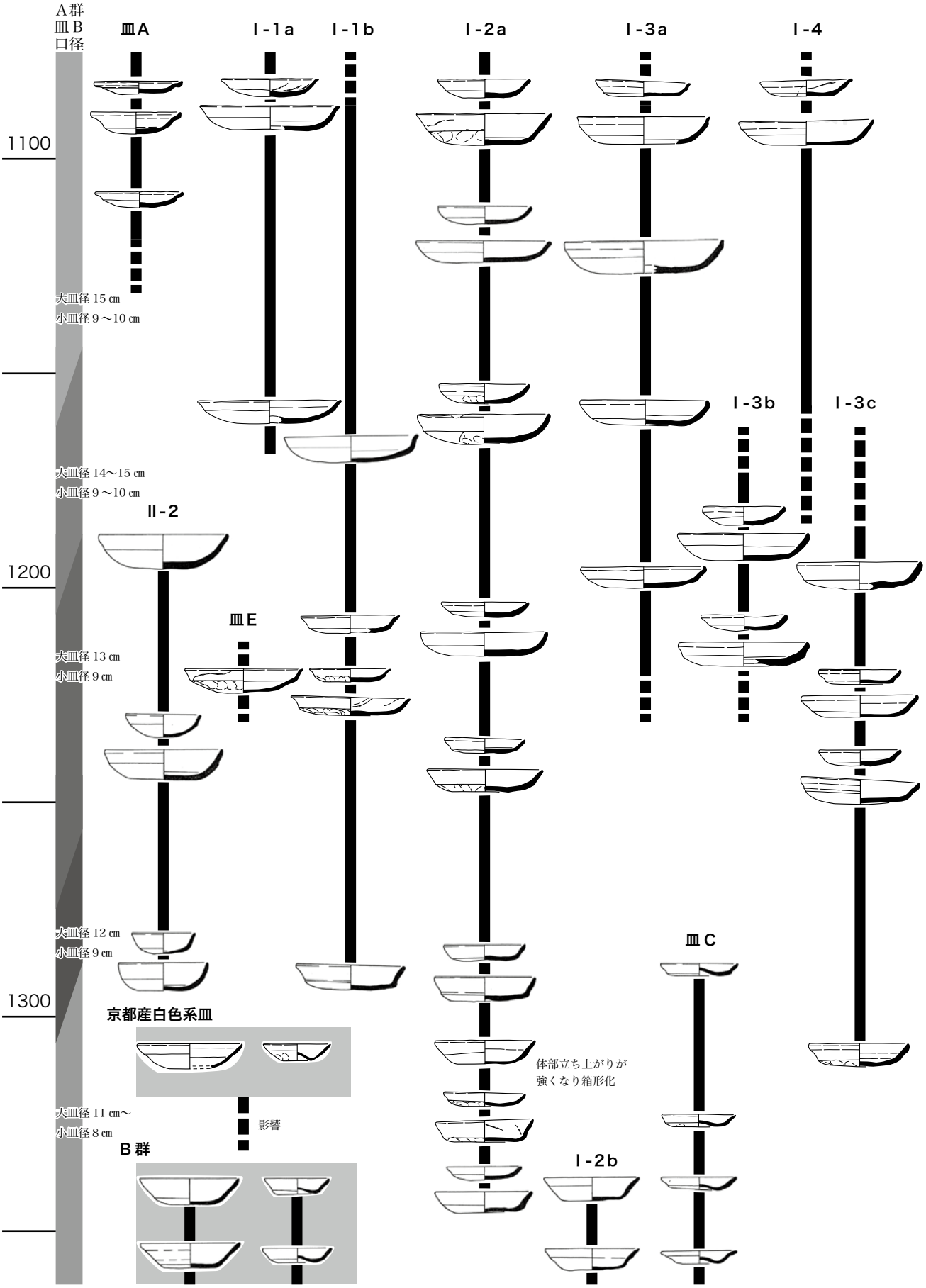


図 83　奈良町遺跡　A群土師器皿変遷図（原図佐藤）

形が定着する。口縁部外面のヨコナデ調整は幅を狭め、端部から１㎝ほどとなる。

Ｂ群土師器皿は、口径５㎝代から 12㎝代まで各種あるが、出土量が少量のため傾向はうかがえない。

Ａ群とＢ群の出土比率は、破片点数で約 8.5 対 1.5 である。供伴する瓦器椀はⅢ - Ｅ型式の小片と和泉型のⅣ - ４型式である。和泉形瓦器椀は一定量出土しており、供伴関係を知る上で良好な資料である。

15　ＳＤ第 26 次調査ＳＤ 05[13)]

溝出土の資料である。奈良町遺跡外の資料であるが、大和型瓦器椀との供伴例のため紹介する。

Ａ群土師器皿は、口径 10㎝代の皿Ｂの大皿と口径８㎝前後の皿Ｃの小皿からなる。

Ｂ群土師器皿は、口径６㎝代から 12㎝代まで各種あり、７㎝代・10㎝代・12㎝代の出土が多い。

Ａ群とＢ群の出土比率は、破片点数で約４対６でＢ群の方が多い。奈良町遺跡外ではＢ群が多い例が見られ、その利用の差は興味深い。

供伴する瓦器椀はわずか１点であるが、Ⅳ - Ｂ型式である。同調査区の小土坑ＳＫ 03 からは、Ⅳ - Ｂ型式の瓦器椀が瓦質土器擂鉢と供伴して出土している。

16　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 642

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

Ａ群土師器皿は、皿Ｂの大皿が口径 10㎝前後でさらに９㎝代のものが、皿Ｃの小皿は口径８㎝前後でさらに７㎝代のものが加わりだし縮小化がうかがえる。

Ｂ群土師器皿は、口径６㎝代から 16㎝代まで各種ある。７㎝代・10㎝代の出土が多いが、９～ 13㎝代のものも一定量出土している。

Ａ群とＢ群の出土比率は、破片点数で約 4.8 対 5.2 でややＢ群が多い。

17　ＧＧ第 63 次調査ＳＥ 01[14)]

素掘りの井戸出土の資料である。

Ａ群土師器皿は、口径９㎝代の皿Ｂの大皿と口径７㎝代の皿Ｃの小皿からなり、口径の縮小化は明らかである。皿Ｂは、口縁部のヨコナデ調整が強く施されるものがあり、口縁部が外反気味になる。２段階の中では、口径が最小の資料である。

Ｂ群土師器皿は、口径７㎝代から 15㎝代まで各種ある。７㎝代・10㎝代の出土が多い。

Ａ群とＢ群の出土比率は、破片点数で約５対５である。

３段階

Ｂ群土師器皿がなくなり、新たにＣ群土師器皿が現れる。Ａ群土師器皿は引き続き存在するが、胎土の色調は灰色に変化し、口径は縮小化に向かう。２段階では大皿小皿の区別があったが、この時期の終わりにはほとんど区別がなくなり、口径８㎝前後に収束する。大皿は小型化と扁平化がすすむとともに、口縁部のヨコナデ調整に変化が現れる。強いヨコナデ調整によって内面の口縁部のと底部境が凹線状に窪み、上げ底状になる。

Ｃ群土師器皿は数種の口径のものを作り分けており、Ｂ群土師器皿の用途を引き継いでいるようである。Ｃ群については、型式細分・変化の方向性等不明な点が多く今後の課題である。

以後４段階以降も、法量が１種類のみのＡ群土師器皿と、法量が多種類のその他の群の土師器皿の関係がつづく。このようにＡ群とその他の群には、明瞭な使い分けが想定できる。また時期が下るとＡ群の出土比率が低下してゆき、その比重も下がっていったと想定できる。

18　ＧＧ第 48 次調査ＳＫ 15[15)]

土器廃棄土坑出土の資料である。多量の土師器皿が完形で出土した。

Ａ群土師器皿は、大皿が口径８㎝代で、小皿は口径７㎝前後である。口縁部の強いヨコナデ調整により、大皿の底部が上げ底状になり、小皿も底部の押し出しが低くなり、形態の差が不明瞭となる。胎土の色調は灰色系となり、２段階の赤褐色系から大きく変化する。この間に漸移的な色調のものがほとんど見られないことから、変化は意図的なものと考えられ、２段階以前の赤褐色系の色調には必要性があったことがわかる。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 14㎝代まで各種あり、８・９㎝代の出土が多い。

Ａ群とＣ群の出土比率は、破片点数で約 7.5 対 2.5 である。

Ａ群土師器皿の形態・法量から、ＧＧ第 63 次調査ＳＥ 01 との間にはもう１型式ほど設定できそうである。

19　ＨＪ第 482 次調査ＳＸ 14[16)]

埋甕遺構出土の資料である。

Ａ群土師器皿は、口径７㎝代で大皿と小皿の区別はつかない。扁平化がすすみ、口縁部の強いヨコナデ調整により、内面の口縁部と底部境が凹線状に窪む。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 19㎝代まで各種あり、８㎝代の出土が多い。口径が大きなものがある点や耳皿もあり、やや特異な構成と考えられる。

内面に圏線がある京都産の土師器皿が供伴している。

Ａ群土師器皿の形態・法量から見て、ＧＧ第 48 次調査ＳＫ 15 との間には数型式設定できそうである。

20　ＳＹ第 02 次調査ＳＫ 07[17)]

土器廃棄土坑出土の資料である。

Ａ群土師器皿は、口径７㎝代と 10㎝代のものがあり、一見大皿と小皿を作り分けているようである。しかし、先のＨＪ第 482 次調査ＳＸ14 資料の段階で大皿と小皿が統合されていることから見て、10㎝代の大型の皿が新たに製作されたと考えられよう。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 12㎝代まであるが、破片の統計データがなく量の多寡は不明。Ａ群とＣ群の出土比率も、同じくデータがなく不明。

21　ＨＪ第 559 次調査ＳＸ 808

本報告資料で、石組遺構出土である。

Ａ群土師器皿は、口径７㎝代で大皿と小皿の区別はつかない。口縁部外面のヨコナデ調整の範囲が狭いものと幅広のものがある。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 14㎝代まで各種あり、９㎝代と 12㎝代の出土が多い。

Ａ群とＣ群の出土比率は、破片点数で約４.5 対 5.5 である。

22　ＨＪ第 605 次調査ＳＤ 05、ＳＸ 06・09[18]

中世の道路側溝出土の資料である。

Ａ群土師器皿は、口径７㎝代で大皿と小皿の区別はつかない。口縁部外面のヨコナデ調整の範囲は５㎜前後と幅が狭い。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 16㎝代まで各種あり、８㎝代と 11㎝代の出土が多い。

Ａ群とＣ群の出土比率は、破片点数で約４対６である。肥前産陶器が出現していない。大和Ｉ型羽釜の型式は、ＨＪ第 559 次調査ＳＸ 808 と同じか。

23　ＧＧ第 48 次調査ＳＥ 16[19]

素掘りの井戸出土の資料である。

Ａ群土師器皿は、口径８㎝代で大皿と小皿の区別はつかない。扁平化は極限まで進み、ほとんど板状に近いものもある。また口縁部外面のヨコナデ調整の範囲が狭いものと幅広のものがある。口径７㎝代で、底が丸くやや深い器形のものもある。

Ｃ群土師器皿は、口径６㎝代から 13㎝代まで各種あり、９㎝代の出土が多い。

Ａ群とＣ群の出土比率は、破片点数で約３対７である。

内面に圏線がある京都産の土師器皿が供伴している。

肥前産陶器が出土しており、奈良町遺跡では出土例の最も古いものに属す。

４段階

Ｃ群土師器皿がなくなり、新たにＤ群土師器皿が現れる。Ｄ群もＣ群と同様に、数種の口径を作り分けており、機能としての継続性がうかがえる。この段階の主流となるのはＤ群であるが、歪みがあり器壁が厚いなど、製作にやや雑な点が指摘できる。

これに対してＥ群土師器皿は、器壁も薄く端正な作りであるが主流とはならない。口径ごと出土比率もＤ群と似ており、Ｅ群はＤ群の補完的な存在のようである。一方、Ａ群土師器皿は出土量が減少し、口径をさらに縮小させ陳腐化してゆく。しかしながら生産が続くことから、一定の需要があるようである。

24　ＧＧ第 04 次調査ＳＫ 05[20]

素掘りの井戸出土の資料である。森下・立石論文ではＳＸ 06 として報告されているが、調査報告書ではＳＸ 05 出土となっており、ここで訂正しておく。また改めて再整理をしたため、調査報告以外の新たな資料も今回掲載した。

Ａ群土師器皿は、口径８㎝代の１種類のみである。ＧＧ第 48 次調査ＳＥ 16 資料に比べ、器形にやや深みがもどるようである。

Ｄ群土師器皿は、口径６㎝代から 12㎝代まで各種ある。Ｄ群の形の特徴の１つである丸い底部の他、平底のものもある。また口縁端部のヨコナデ調整の幅もやや広めである。

Ｅ群土師器皿は出土していない。

肥前産磁器が、僅かながら初めて出土する。

25　ＧＧ第 48 次調査ＳＥ 26[21]

素掘りの井戸出土の資料で、未報告であり本報告が初出である。

Ａ群土師器皿は、口径８㎝前後の１種類のみである。さらに器形が深くなり、皿らしくなるが、歪みが多く雑な作りである。

Ｄ群土師器皿は、口径６㎝代から 12㎝代まで各種ある。丸い底部からそのまま口縁部につながる器形が中心となるが、口縁部の作りなどにかなりのばらつきがある。

Ｅ群土師器皿は出土していない。

大和Ｉ型羽釜の最終の型式が供伴する。

26　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 651

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

Ａ群土師器皿は、口径８㎝前後の１種類のみである。25 の資料同様、器形が深く皿らしくなる。胎土は橙色系の色調である。

Ｄ群土師器皿は、口径７㎝代から 13㎝代まで各種ある。胎土は黄橙色系の色調である。

Ａ群とＣ群の出土比率は不明だが、Ａ群の出土が多い。

27　ＨＪ第 332 次調査ＳＥ 06[22]

石組井戸の井戸枠抜き取り痕からの出土資料である。

Ａ群土師器皿は、口径 7.7㎝の１点が報告される。深みをとりもどした皿形で、胎土は橙色系の色調である。

Ｄ群土師器皿は、口径６㎝代から 13㎝代まで各種ある。細部の作りなどには、かなりのばらつきがある。

土師器皿はＡ群の出土量が激減し、Ｄ群が主体となる。Ｅ群土師器皿は出土していない。

28　ＨＪ第 559 次調査ＳＥ 507

本報告資料で、石組井戸の井戸枠抜き取り部分からの出土である。

Ａ群土師器皿は、口径７㎝代で、前代からあまり変化がない。出土量は激減しており、土師器皿の２％にすぎない。

Ｄ群土師器皿は、口径６㎝代から 13㎝代まで各種あり、７㎝代が最も多く、８･10･11㎝代も一定量出土する。口縁部内面を「の」字にナデ調整するＤ－２群もある。

Ｅ群土師器皿が出土している。底部と口縁部の境はやや屈曲し、器壁も凹凸が少なくＤ群に比べ歪みが少ない。

29　ＨＪ第 332 次調査ＳＫ 16[23]

平面方形の土器廃棄土坑出土の資料である。

Ａ群土師器皿は出土を確認しておらず、消費者の意図がはたらいた結果であろうか。

Ｄ群とＥ群が出土しており、口径６㎝代から 10㎝代まで各種ある。Ｄ群はＤ－２群が多くなる。またＥ群には器壁が薄いものもある。

30　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 656

本報告資料で、平面方形の土器廃棄土坑出土である。

Ａ群土師器皿は、口径９㎝前後の１種類のみである。口縁部のヨコナデ調整がやや強くなり、内面の底部との境に浅い沈線風の跡が残るものもある。出土量は少ない。

Ｄ群とＥ群土師器皿は、口径６㎝代から 14㎝代まで各種あり、７㎝代が最も多い。Ｄ群はＤ－２群が多い。

５段階

Ａ群土師器皿がなくなり、Ｆ群土師器皿が出現する。Ｆ群は胎土の様子・色調がＡ群と似ているが、器形は４段階のＡ群とは全く異なり連続性は認められない。一方Ｆ群は口径６㎝代の小皿が主体で、口径の法量の単純さの点ではＡ群と同じ特徴である。Ｄ群・Ｅ群も出土するが、各々の比率を示す資料はない。出土状態をみると、Ｆ群が半分前後を占めるようである。

この時期の資料は出土例が少ない訳ではなく、整理報告例が少ないため、さらに検討が必要である。国産磁器の型式からみて、２型式以上は存在するものと考えられる。

31　ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 662

本報告資料で、平面方形の土器廃棄土坑出土である。

Ｆ群土師器皿は、口径６㎝代と７㎝代の２種類がある。

Ｄ群とＥ群土師器皿は、口径６㎝代から 15㎝代まで各種あり、７㎝代が最も多く 11㎝代がこれに次ぐ。Ｄ群はＤ－２群が多い。　（中島・佐藤）

Ｃ　各段階の年代

１段階の年代

ＨＪ第 97 次調査ＳＥ 11[24] は、井戸枠の曲物に「延久３年」（1072 年）の墨書があり、井戸から出土している瓦器椀はＩ－Ｃ型式である。この型式の瓦器椀を出土するＨＪ第 559 次調査ＳＫ 868 が、1072 年頃であるのは間違いなかろう。

終末については、京都産の白色系の土師器皿との供伴関係から追ってみる。ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 636 とＨＪ第 531 次調査ＳＫ 16、ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 638・639 から、京都産の白色系の土師器皿が出土しており、ＳＫ 638・639 からはへそ皿が出土している。京都でへそ皿は、小森・上村編年[25]のⅦ期中以降に出現しており、14 世紀の前半頃の年代である。京都の年代を当てはめると、ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 636 が 13 世紀中頃で、ＳＫ 638・639 が 14 世紀前半以降となる。

一方、大和型瓦器椀の年代では、当麻寺曼荼羅堂基壇下土坑出土の瓦器椀が、寛元元年（1243 年）の須弥壇改造に伴うものとされている。この瓦器椀の型式を川越氏はⅢ－Ｂ型式、近江氏は１－７期（Ⅲ－Ｃ型式並行）の古い様相としている。ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 636 出土の瓦器椀は実測図を比較するかぎり、型式的にこの当麻寺資料より古いものと考えられよう。

ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 636 資料は、瓦器椀・土師器皿ともやや特異な型式様相のため判断に苦しむが、大和型瓦器椀と京都産土師器の年代観の差が認められるようだ。また川越・近江両氏の年代観もここからずれが生じているが、おおよそⅢ－Ｅ型式を 14 世紀前半頃としている。しかしながら、奈良町遺跡内ではⅢ－Ｄ型式以降の瓦器椀の出土が非常に少なく、検討できる資料が見いだせない。ここでは京都の土師器皿の年代をもとに、１段階の終末を概ね 14 世紀前半頃と考える。

２段階の年代

直接年代を知る資料がなく、年代については未確定なところが多い。１段階終末の年代から見て、その開始は 14 世紀の前半でも新しい頃か。

２段階終末の資料の、ＧＧ第 63 次調査ＳＥ 01 からは、古市城山遺跡出土の 15 世紀中頃～後半の紀年銘資料[26]の土師器羽釜の型式（Ｈ３型）が出土しておらず、15 世

紀前半頃が終末に近い時期であろうか。

この場合 14 世紀前半～ 15 世紀前半の 100 年間に７個の資料が存在することになる。資料の統合や年代について、さらなる検討が必要である。

３段階の年代

ＨＪ第 482 次調査ＳＸ14 は焼土層で埋まる遺構である。「奈良坊目拙解」によると、天文年間の一向一揆により椿井町が焼失した記録がある。焼土層の由来をこれに求めた場合、16 世紀の第２四半期頃のものとなる。

また肥前産陶器の出現年代から、ＧＧ第 48 次調査ＳＥ 16 が 17 世紀の第１四半期頃となる。

両資料の間のＳＹ第 02 次調査ＳＫ 07 とＨＪ第 559 次調査ＳＸ 808 は、16 世紀後半の頃となる。

４・５段階の年代

肥前産陶磁器の編年を参考にすると、

ＧＧ第 04 次調査ＳＫ 05 が肥前磁器の出現時期で、17 世紀の第２四半期頃。

ＧＧ第 48 次調査ＳＥ 26 は、「大明成化年製」銘や網目文磁器碗などが出土し、17 世紀の第３四半期頃。

ＨＪ第 332 次調査ＳＥ 06 は、「大明年製」銘や網目文碗などの他、京焼風陶器、内野山系の銅緑釉陶器椀が出土する。17 世紀の第４四半期頃と考えられる。

ＨＪ第 559 次調査ＳＥ 507 は、型紙摺の磁器碗、京焼風陶器が出土しており、18 世紀の第１四半期頃。

ＨＪ第 332 次調査ＳＫ 16 は、コンニャク印判のくらわんか碗が出土し、18 世紀の第２四半期頃。

ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 656 は、蓋付の磁器碗、壽文や梵字文の磁器碗、瀬戸産磁器が存在しないことから、18 世紀の第４四半期頃であろう。

ＨＪ第 559 次調査ＳＫ 662 は、肥前産の広東碗、瀬戸産の端反り碗等の国産磁器から 19 世紀の第２四半期頃である。（中島）

Ｄ　まとめ

以上、奈良町遺跡出土の土師器皿の編年を概観してきた。型式的に空白の期間があるものの、平安時代から江戸時代まで、途切れることなく土師器生産をつづけていた奈良の姿が明らかになった。特に江戸時代後半まで生産をつづけたＡ群土師器皿は、奈良の土器生産の象徴とも言えよう。かくも生産が長らえた理由は、土師器皿の需要が奈良に常にあったためと考えられる。この需要は、中世以来の社寺に由来するものと考えられ、町内にもその影響が及んでいる点は、奈良の町と社寺との関連の深さがうかがえよう。近代をむかえた後の奈良の土師器生産については不明な点があるものの、その生産は奈良時代から現在に至るまでの、約 1,300 年の歴史を有する一大伝統産業といえよう。（中島）

１）　稲垣晋也　1963 「赤土器・白土器－中世「かわらけ」の編年－」『大和文化研究』第７巻７号
２）　森下惠介・立石堅志　1987 「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』
　　森下惠介　1992 「南都土器編年の再検討」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
３）　立石堅志　1989 「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会
４）　奈良市教育委員会　2007 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 15 年度』
５）　奈良市教育委員会　1991 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』
６）　５）と同じ
７）　奈良市教育委員会　1992 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度』
８）　奈良市教育委員会　1987 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和 61 年度』
９）　奈良市教育委員会　2008 『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 17（2005）年度』
10）　５）と同じ
11）　５）と同じ
12）　奈良市教育委員会　1993 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成５年度』
13）　奈良市教育委員会　2012 『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 21（2009）年度』
14）　奈良市教育委員会　2010 『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 19（2007）年度』
15）　奈良市教育委員会　1999 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 11 年度』
16）　奈良市教育委員会　2006 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 14 年度』
17）　奈良市教育委員会　1989 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和 63 年度』
18）　奈良市教育委員会　2008 『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 20（2008）年度』
19）　15）と同じ
20）　奈良市教育委員会　1983 『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和 57 年度』
21）　15）と同じ
22）　奈良市教育委員会　1995 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』
23）　22）と同じ
24）　奈良市教育委員会　1987 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和 60 年度』
25）　小森俊寛・上村憲章　1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要３』（財）京都市埋蔵文化財研究所

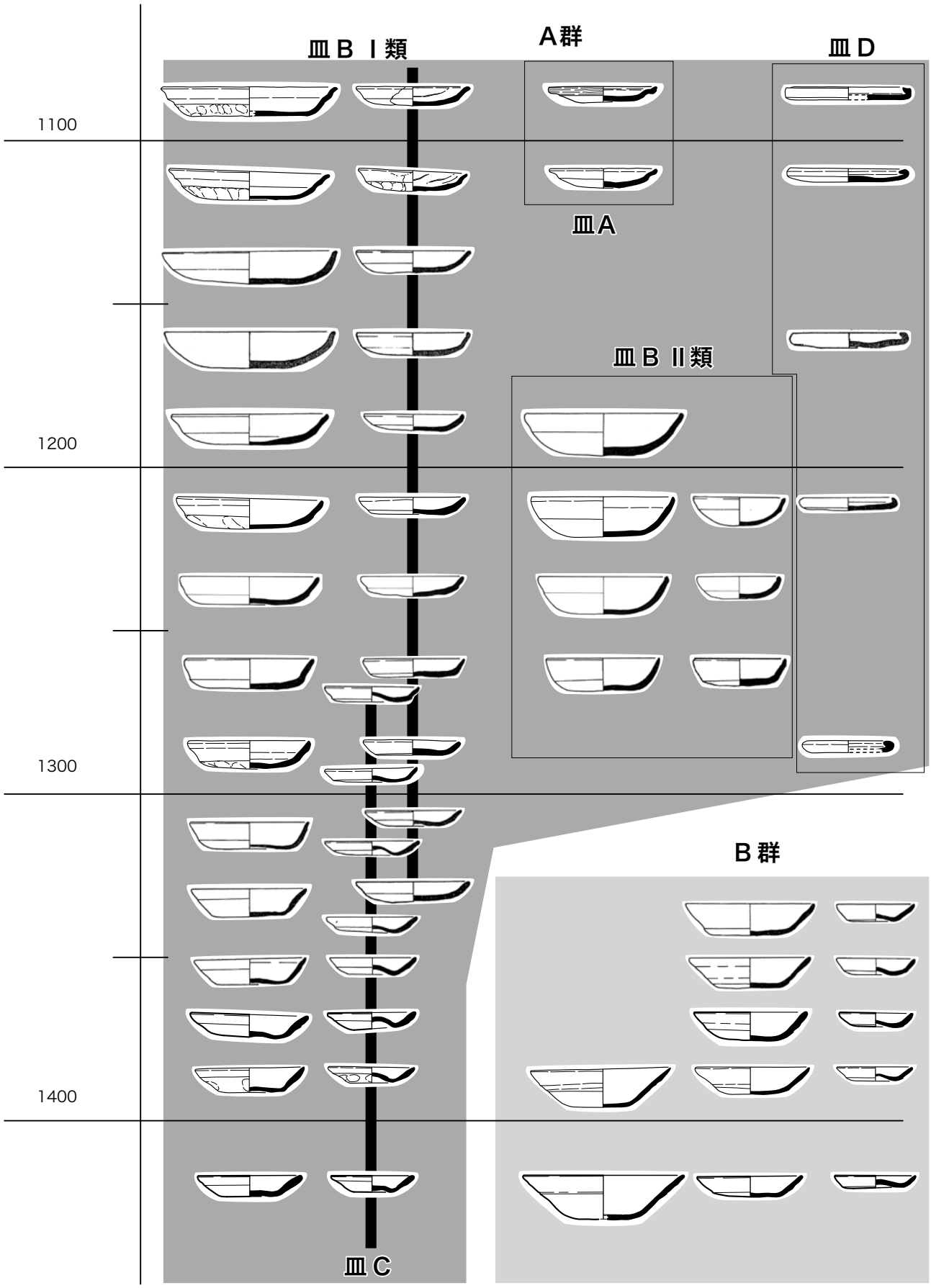


図 84　奈良町遺跡　土師器皿変遷図１（原図中島）

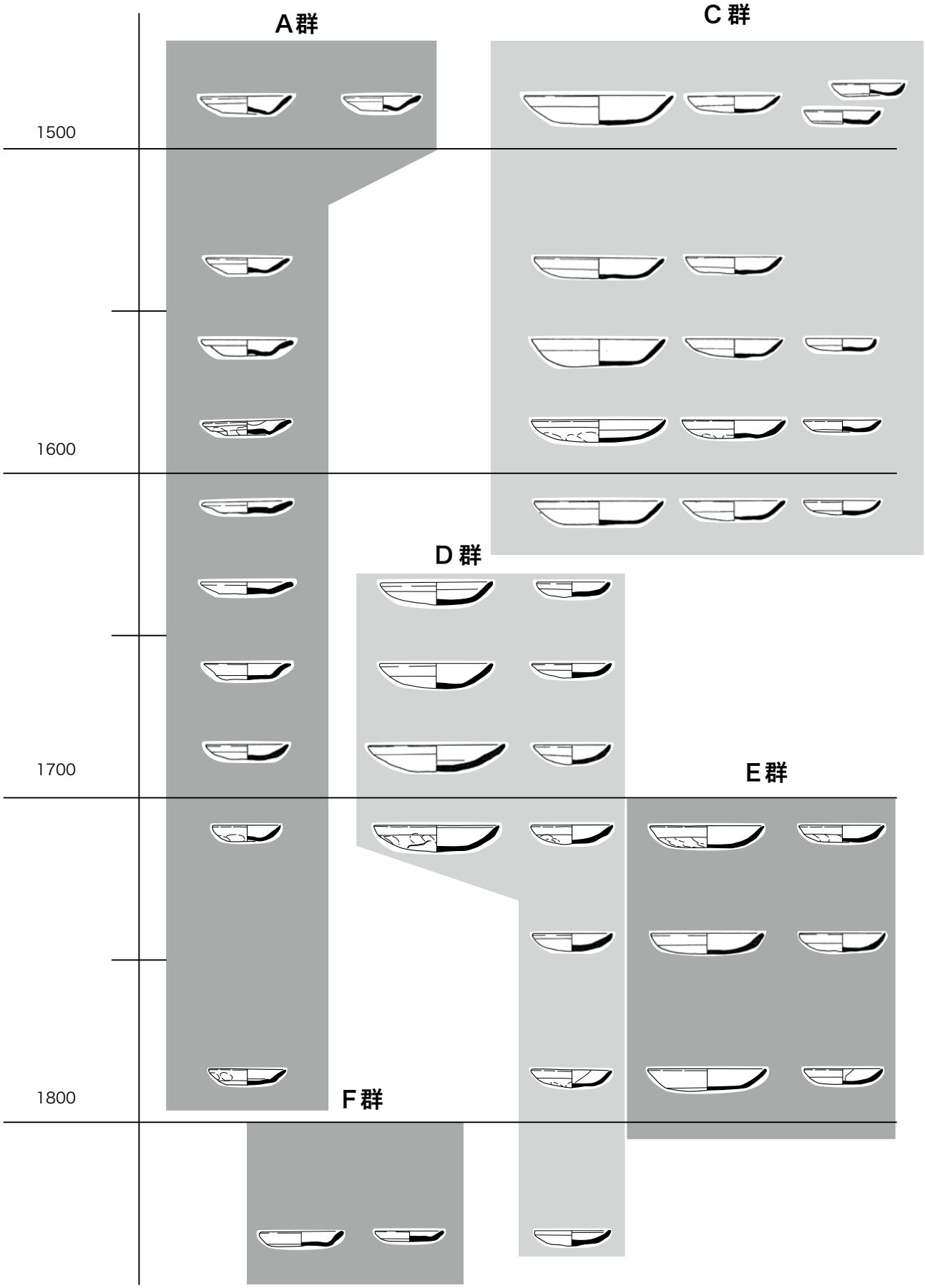


図 85　奈良町遺跡　土師器皿変遷表図２（原図中島）

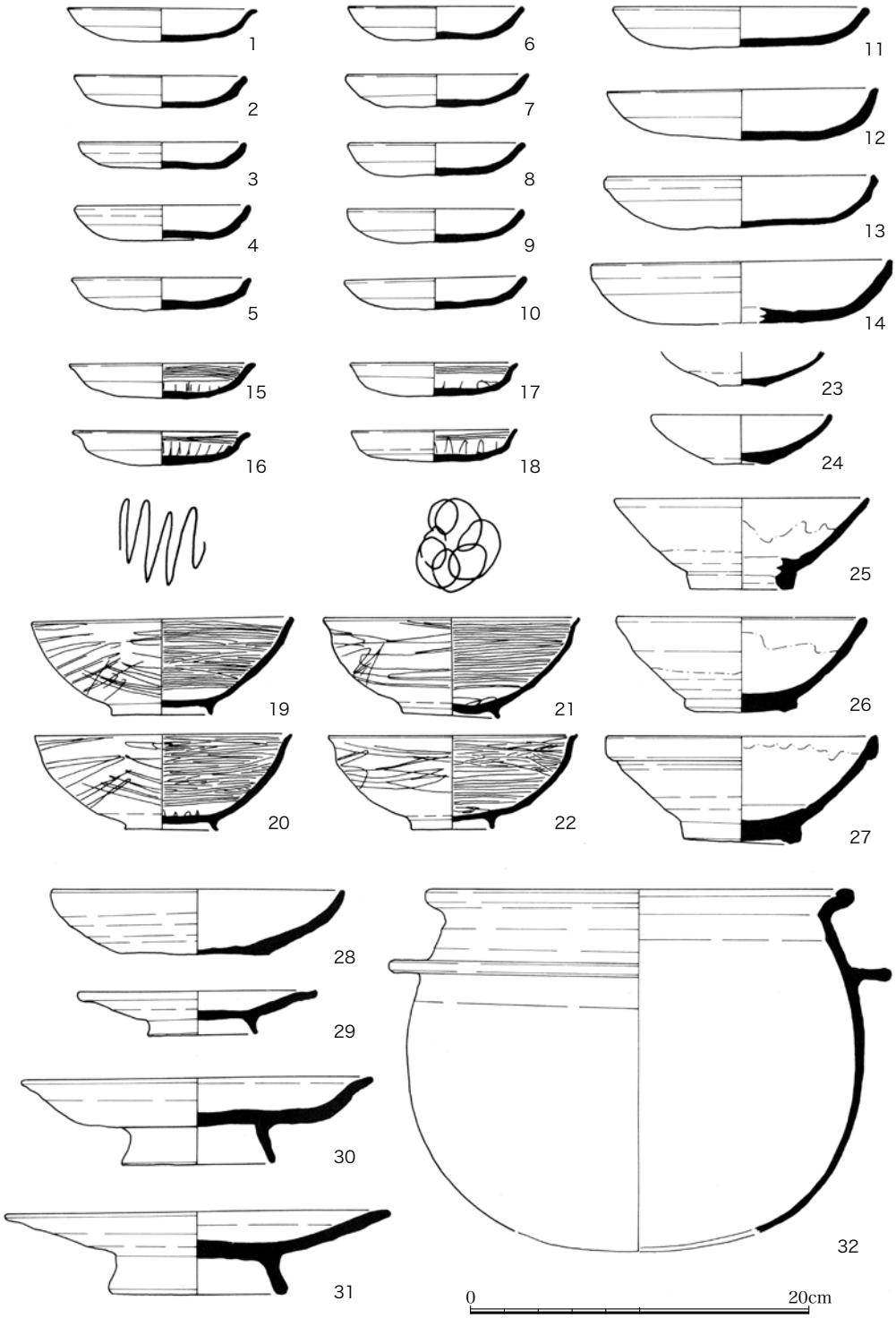


図 86　ＨＪ第 232 次調査　ＳＥ 02　出土土器（1/ 4）

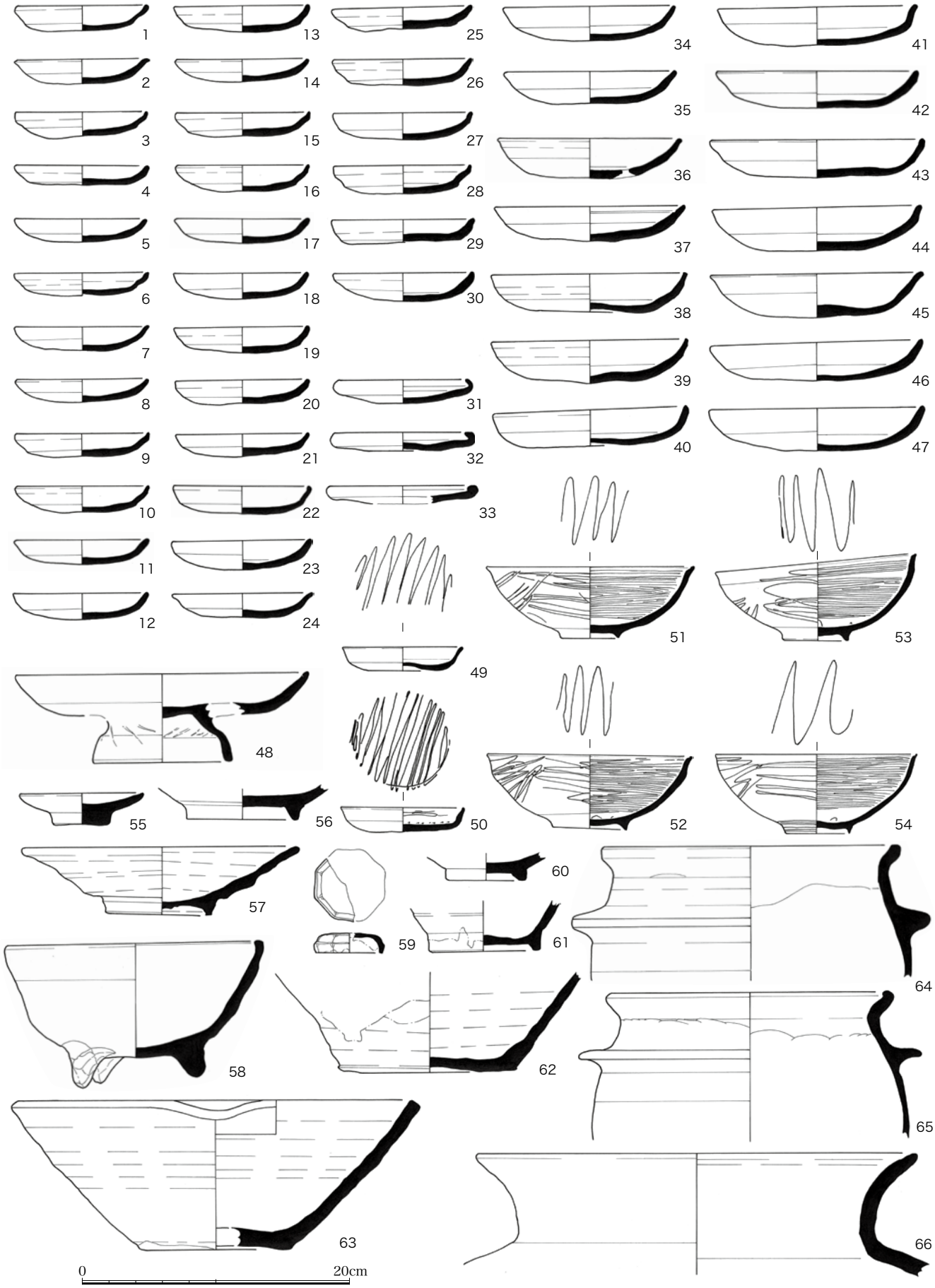


図 87 ＨＪ第 228 次調査　ＳＫ 03　出土土器（1/ 4）

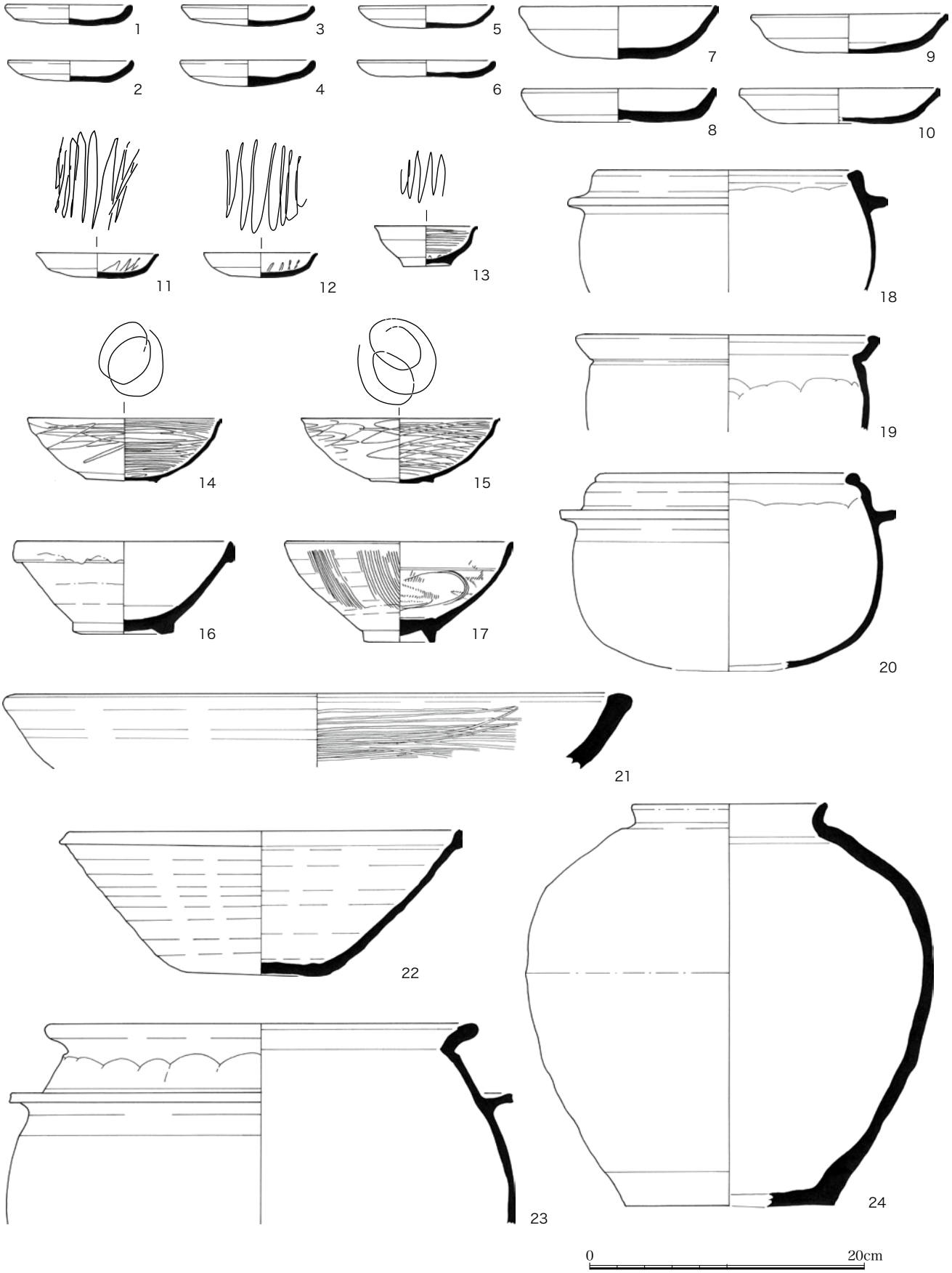


図 88　ＨＪ第 258 次調査　ＳＥ 03　出土土器（1/ 4）

図 89　ＨＪ第 269 次調査　ＳＥ 03（1～37）・ＧＧ第 07 次調査ＳＥ 13（38～50）　出土土器（1/ 4）

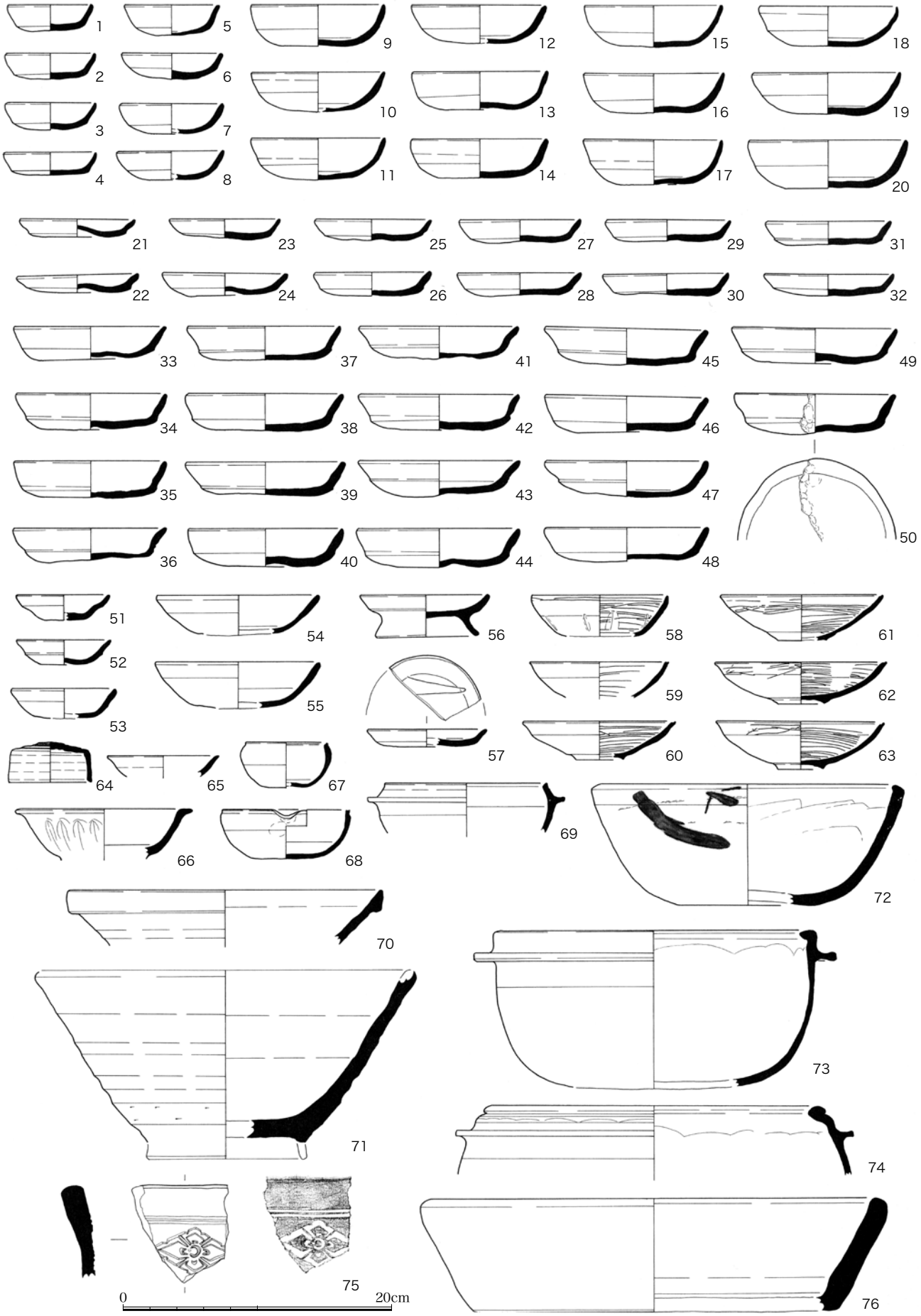


図 90　ＨＪ第 531 次調査　ＳＫ 16　出土土器（1/ 4）

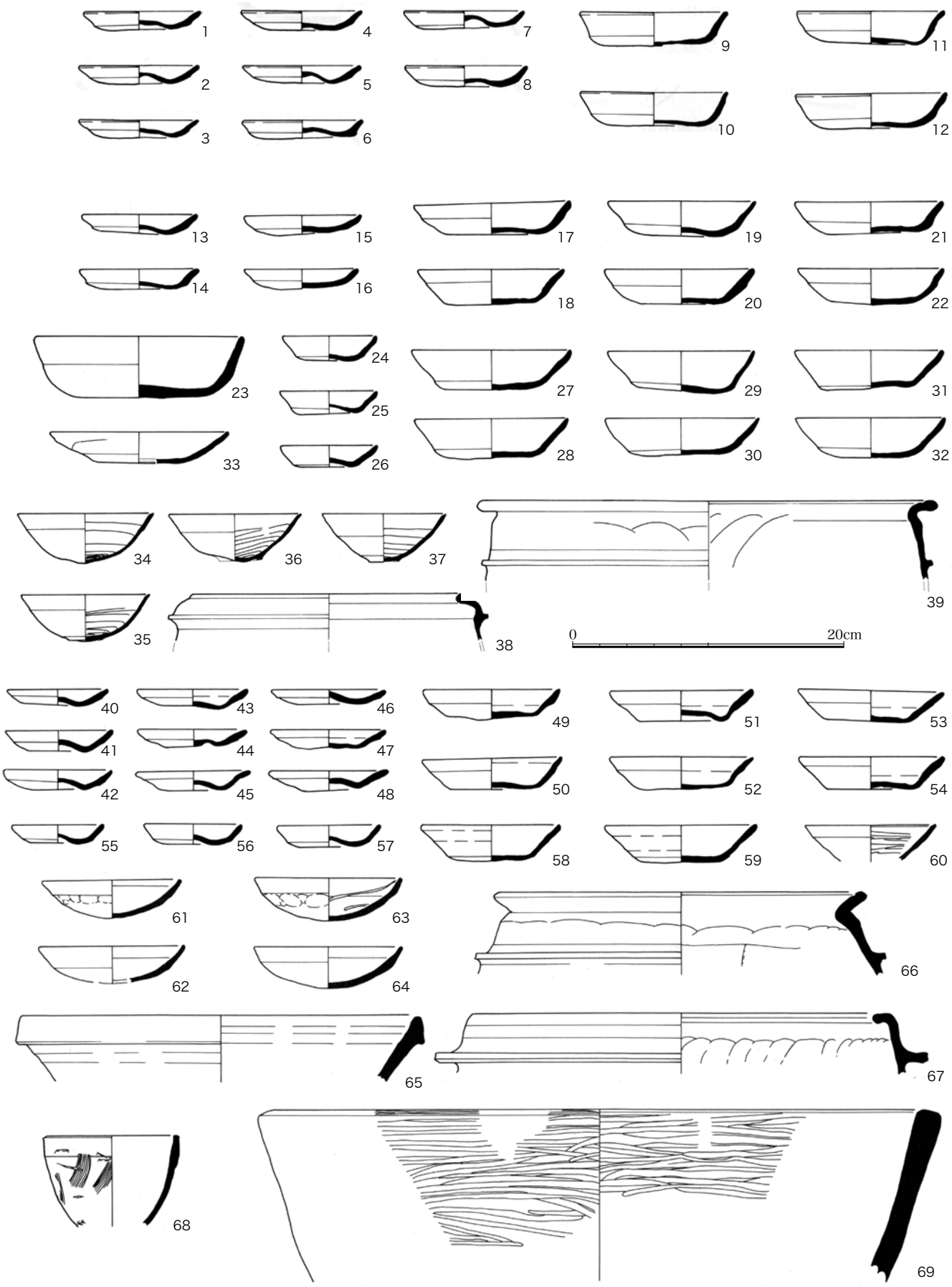


図91　ＨＪ第232次調査　ＳＫ03（1～12)・ＧＧ第31次調査　ＳＫ03（13～39)・ＧＧ第38次調査　ＳＫ03（40～69）　出土土器（1/４）

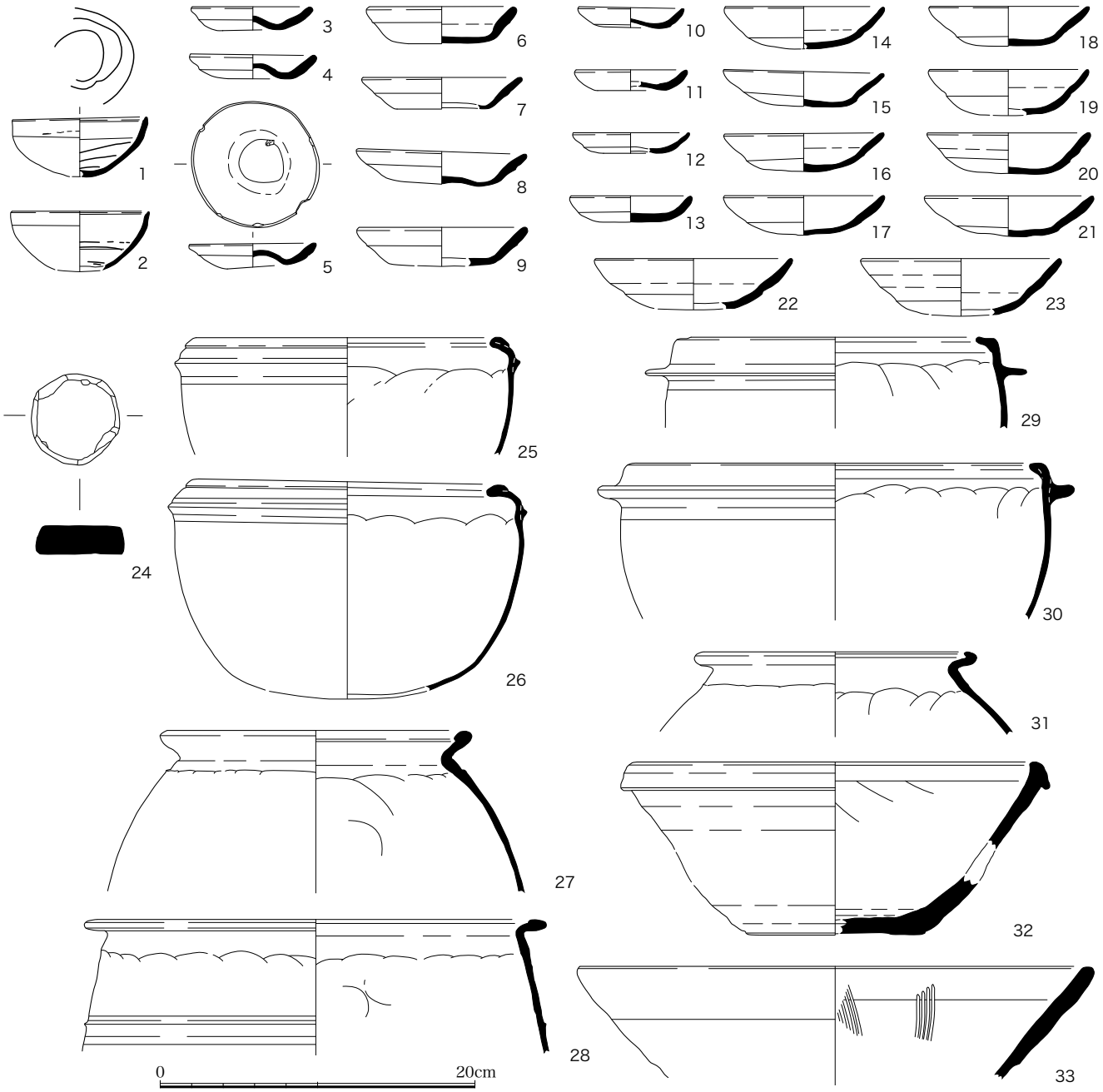


図 92　ＳＤ第 26 次調査　ＳＤ 05（2～32)・ＳＫ 03（1・33）　出土土器（1/ 4）

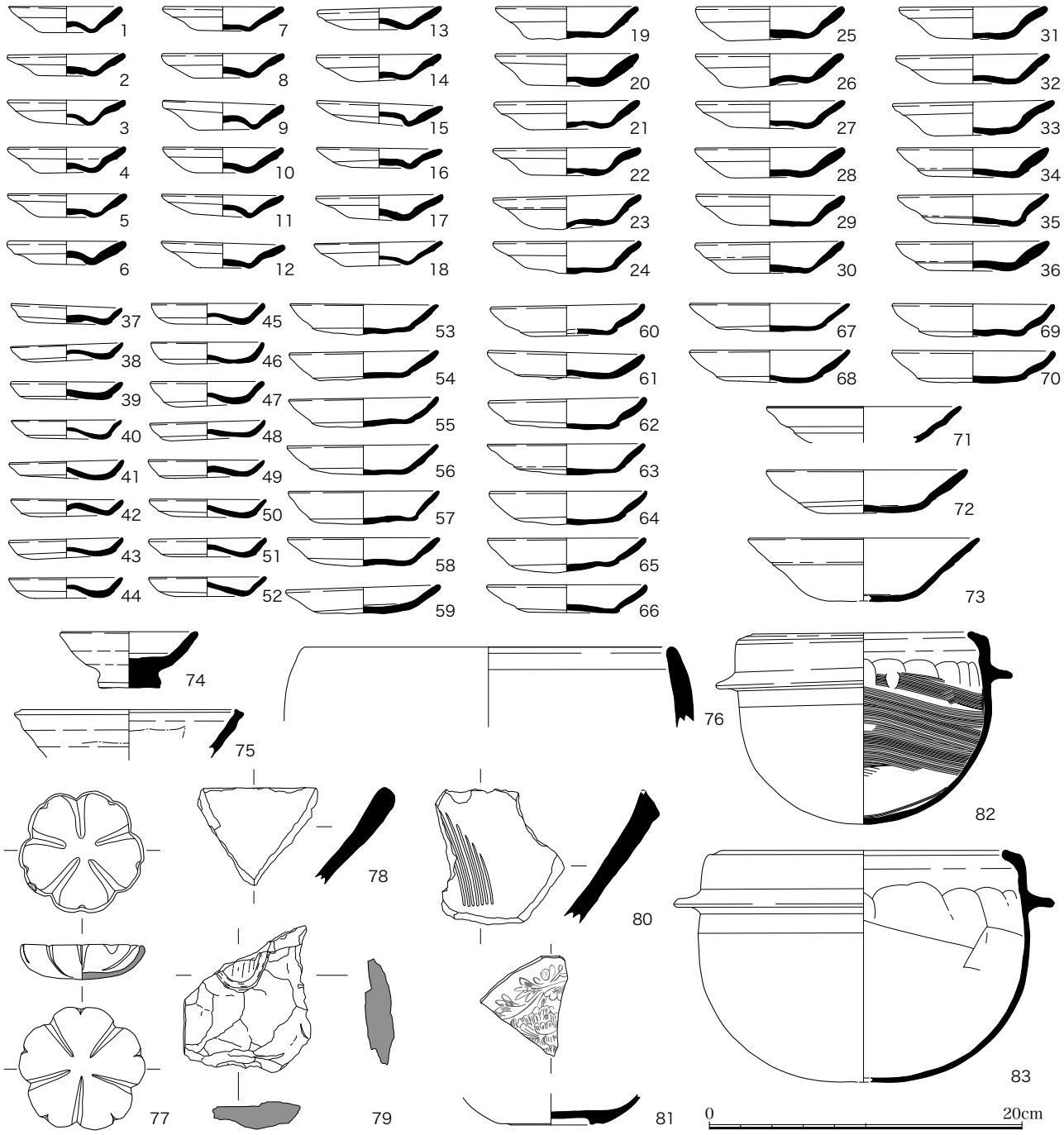


図 93　ＧＧ第 63 次調査　ＳＥ 01　出土土器（1/ 4）

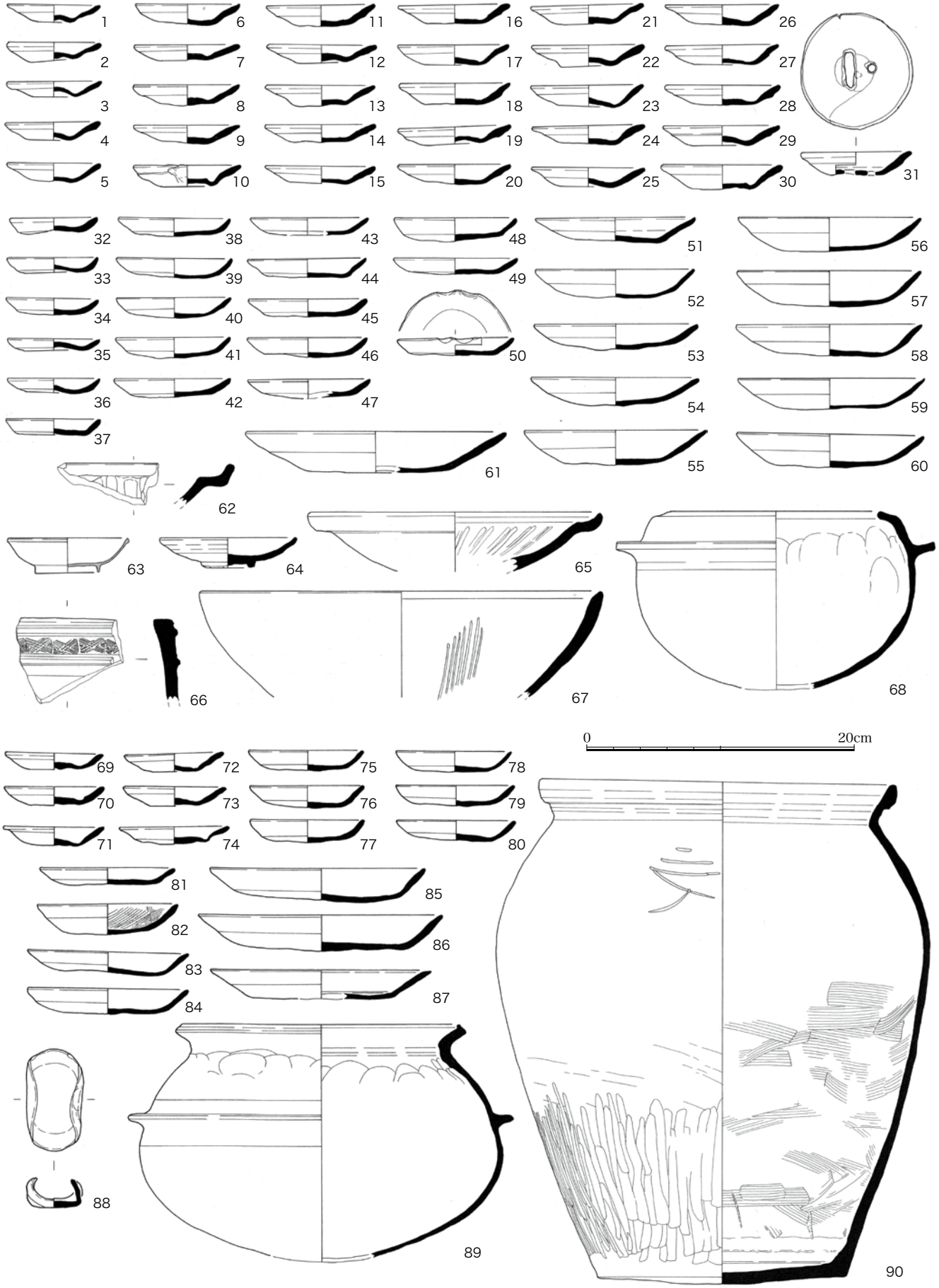


図 94　ＧＧ第 48 次調査　ＳＫ 15（1～68）・ＨＪ第 482 次調査　ＳＸ 14（69～90）　出土土器（1/ 4、90 のみ 1/10）

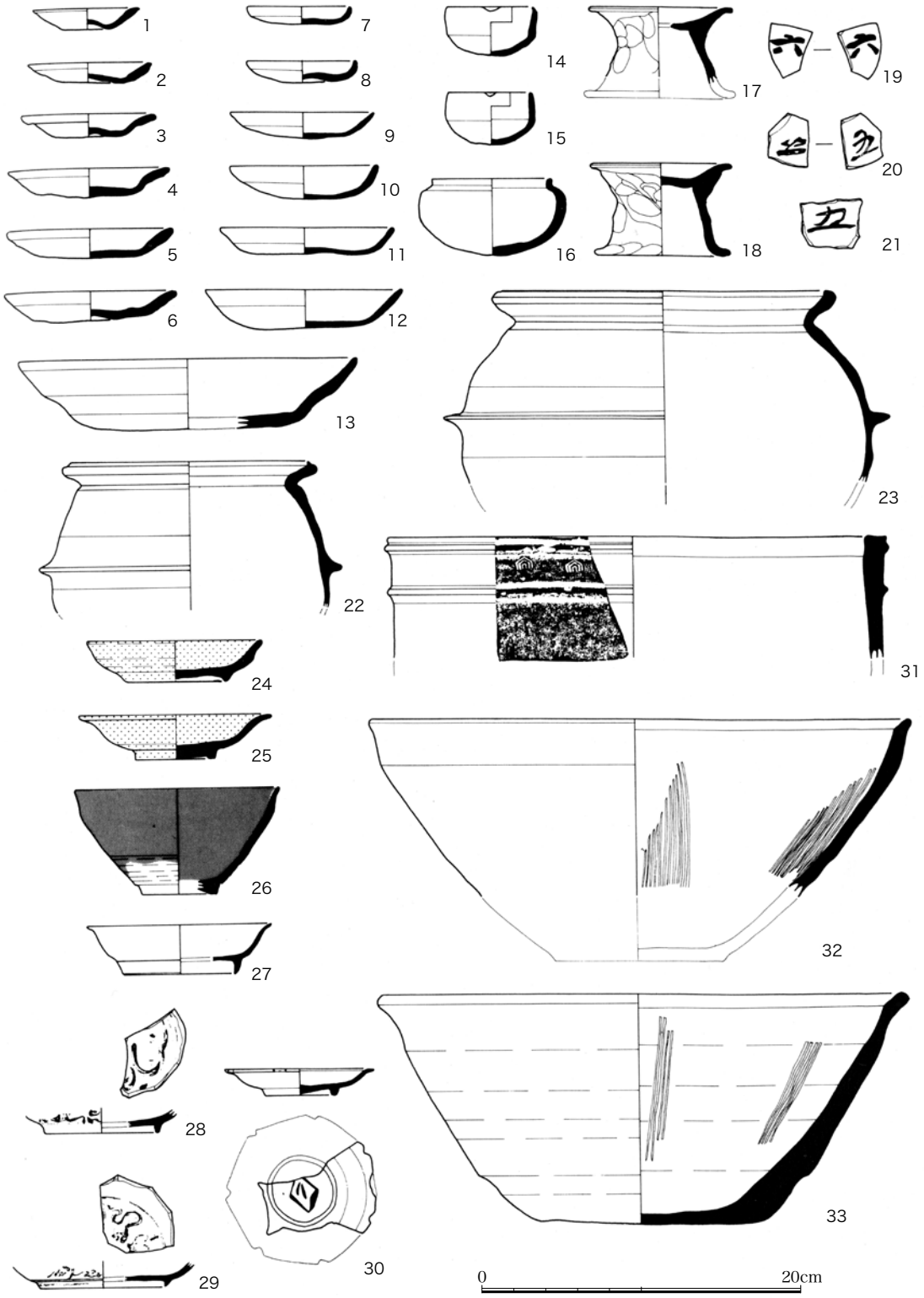


図95　ＳＹ第02次調査　ＳＫ07　出土土器（1/４）

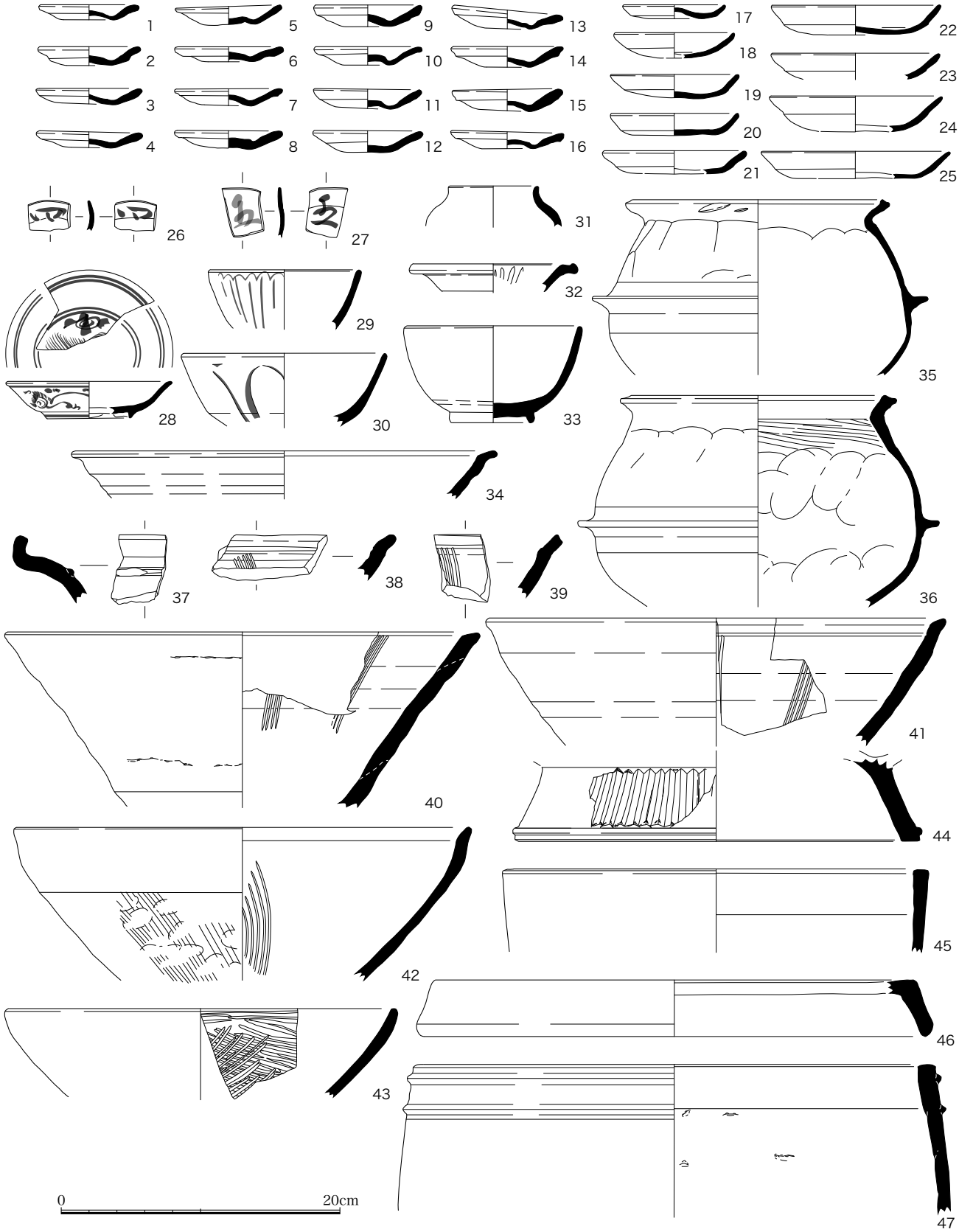


図 96　ＨＪ第 605 次調査　ＳＤ 05　出土土器（1/ 4）

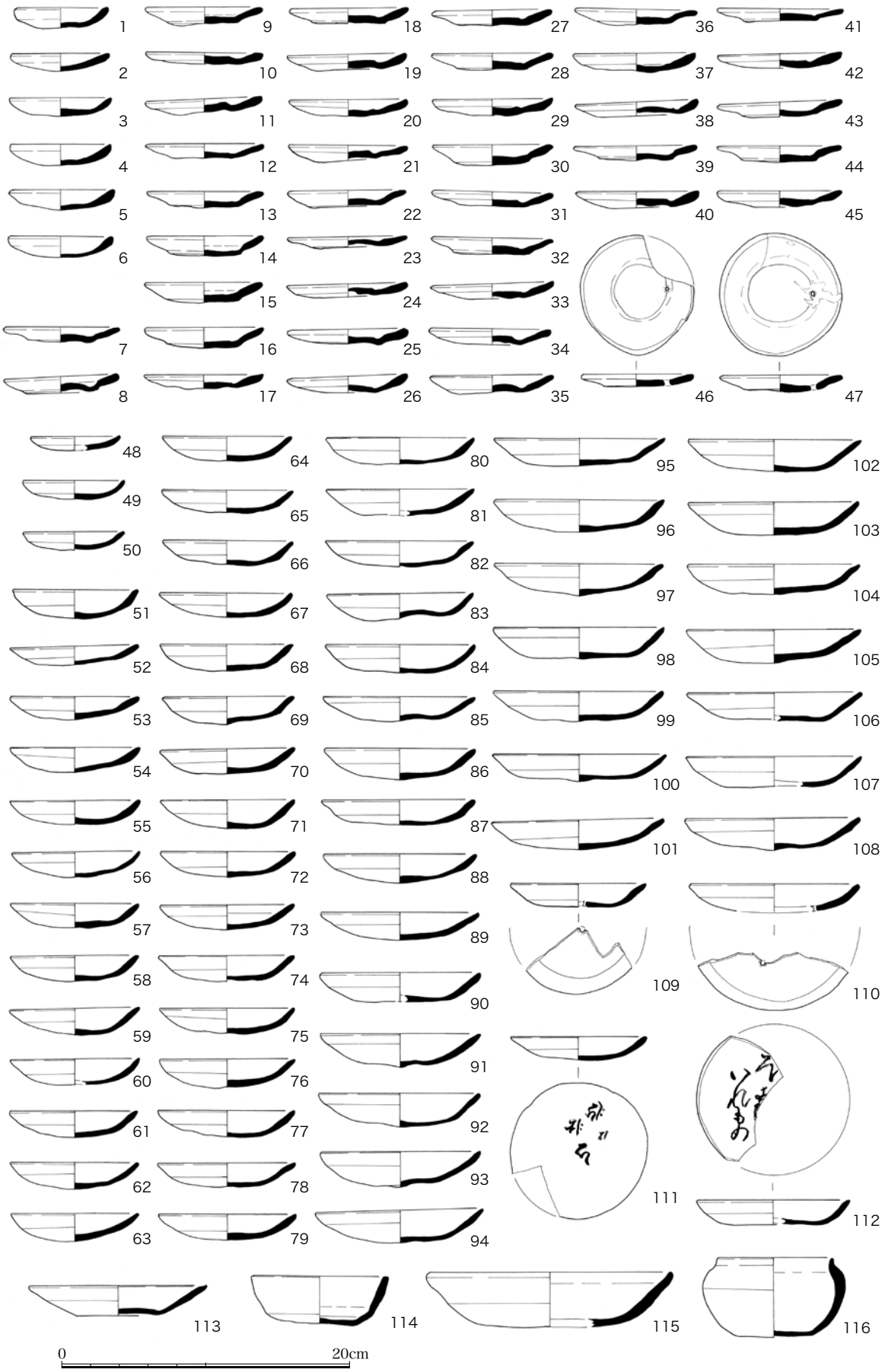


図 97　GG 第 48 次調査　ＳＥ 16　出土土器１（1/ 4）

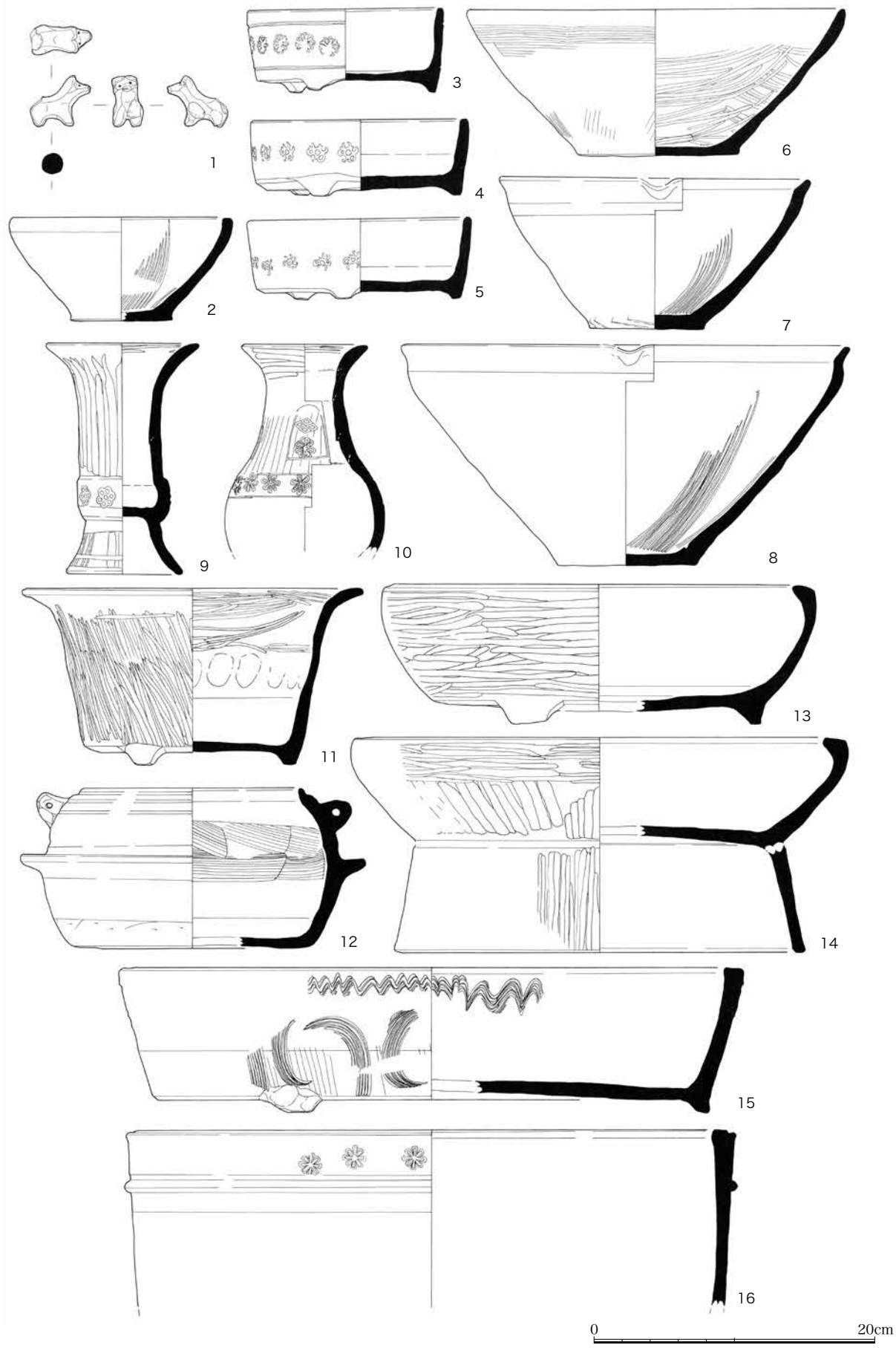


図 98　GG 第 48 次調査　ＳＥ 16　出土土器２（1/ 4）

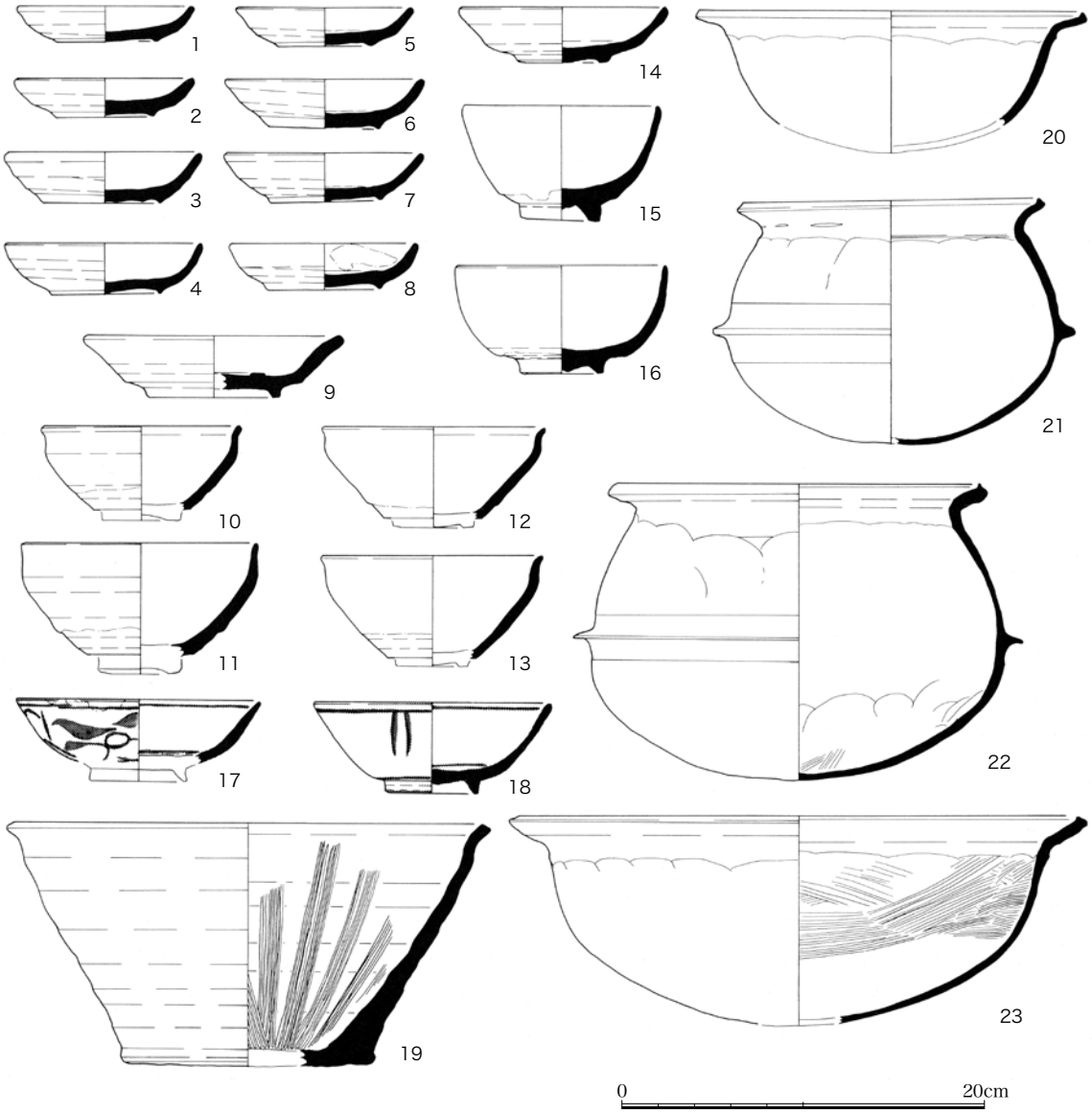


図 99　GG 第 48 次調査　ＳＥ 16　出土土器３（1/ 4）

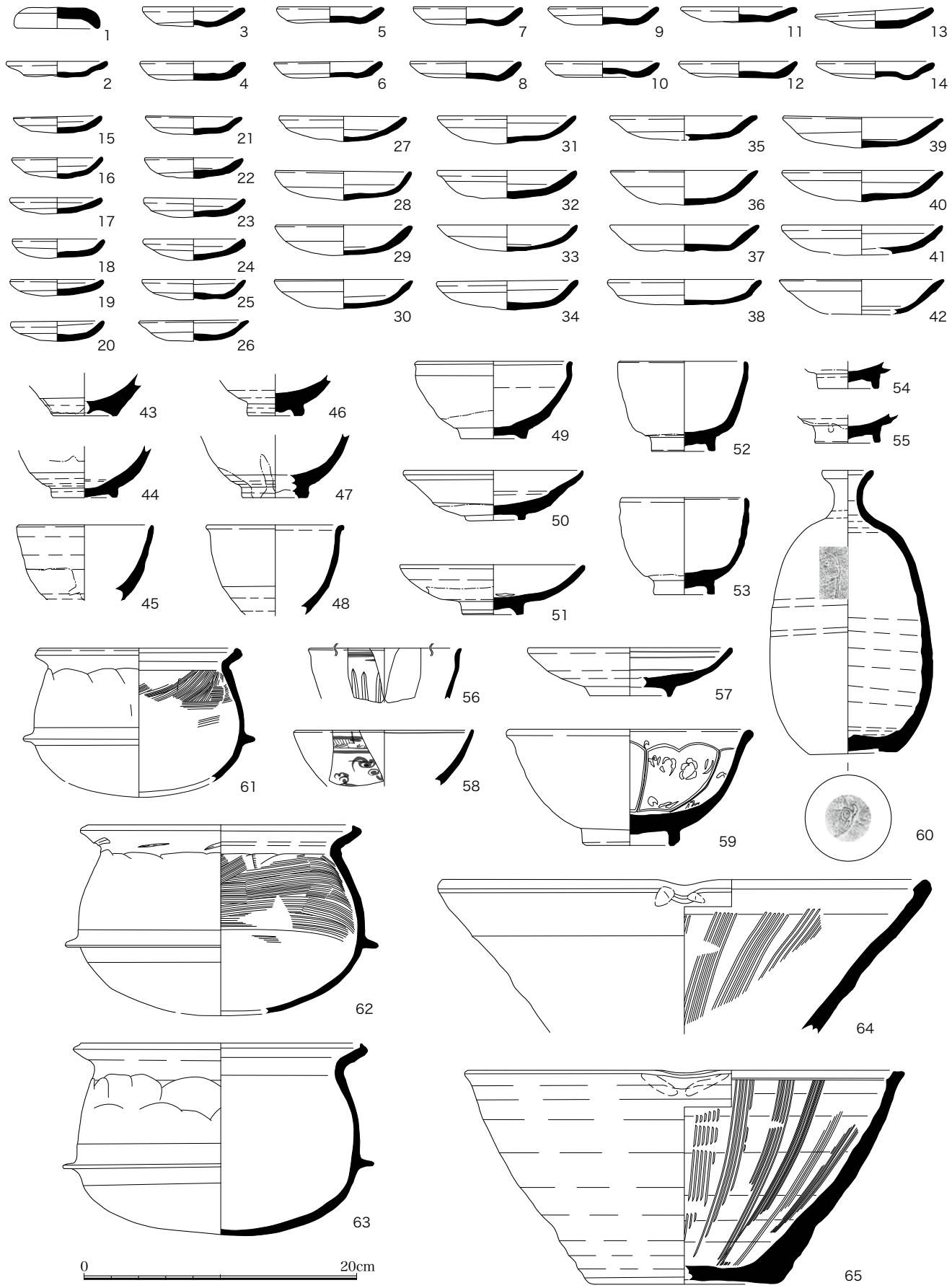


図 100　ＧＧ第 04 次調査　ＳＸ 06　出土土器（1/ 4）

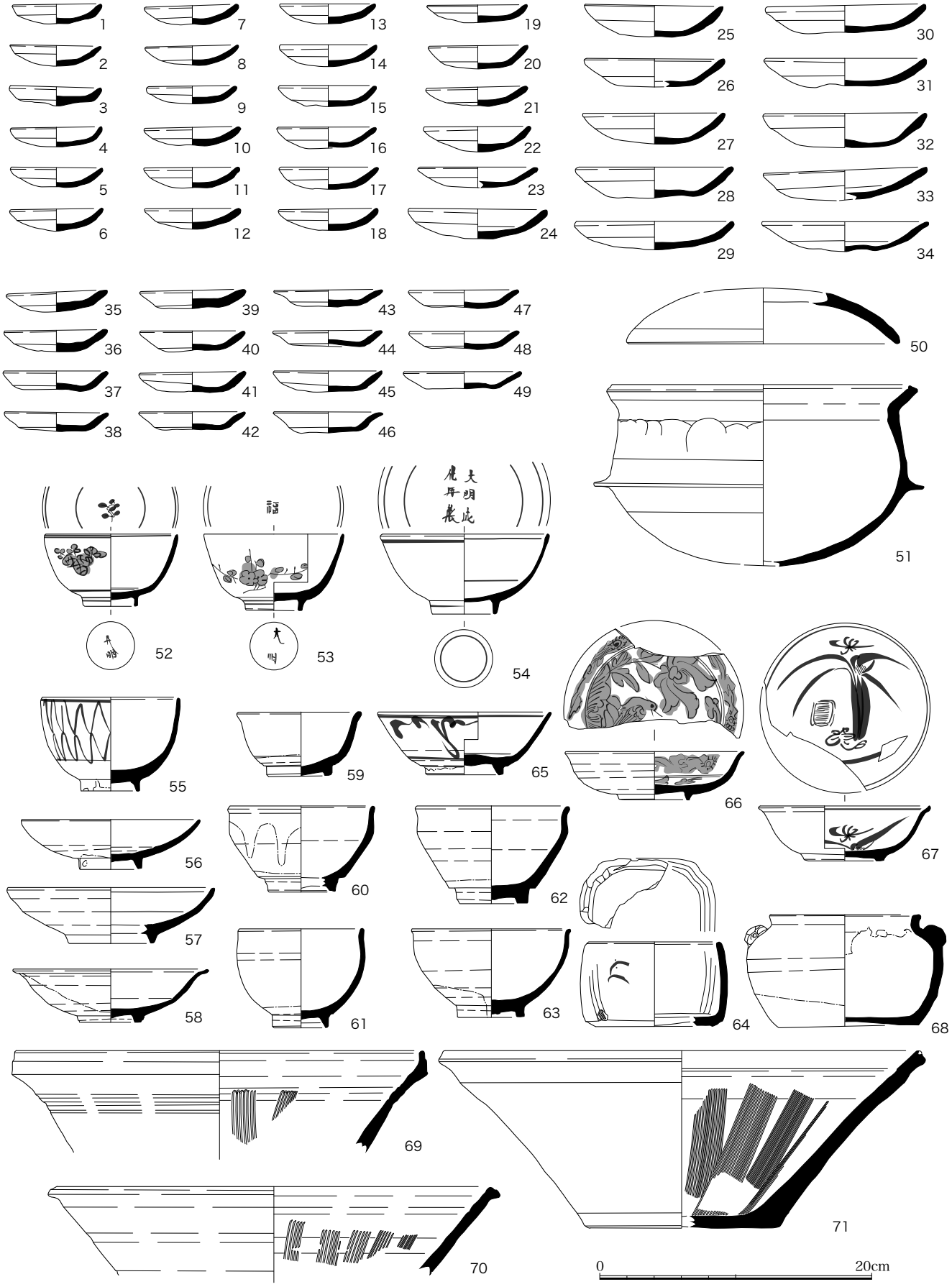


図 101　ＧＧ第 48 次調査　ＳＥ 26　出土土器（1/ 4）

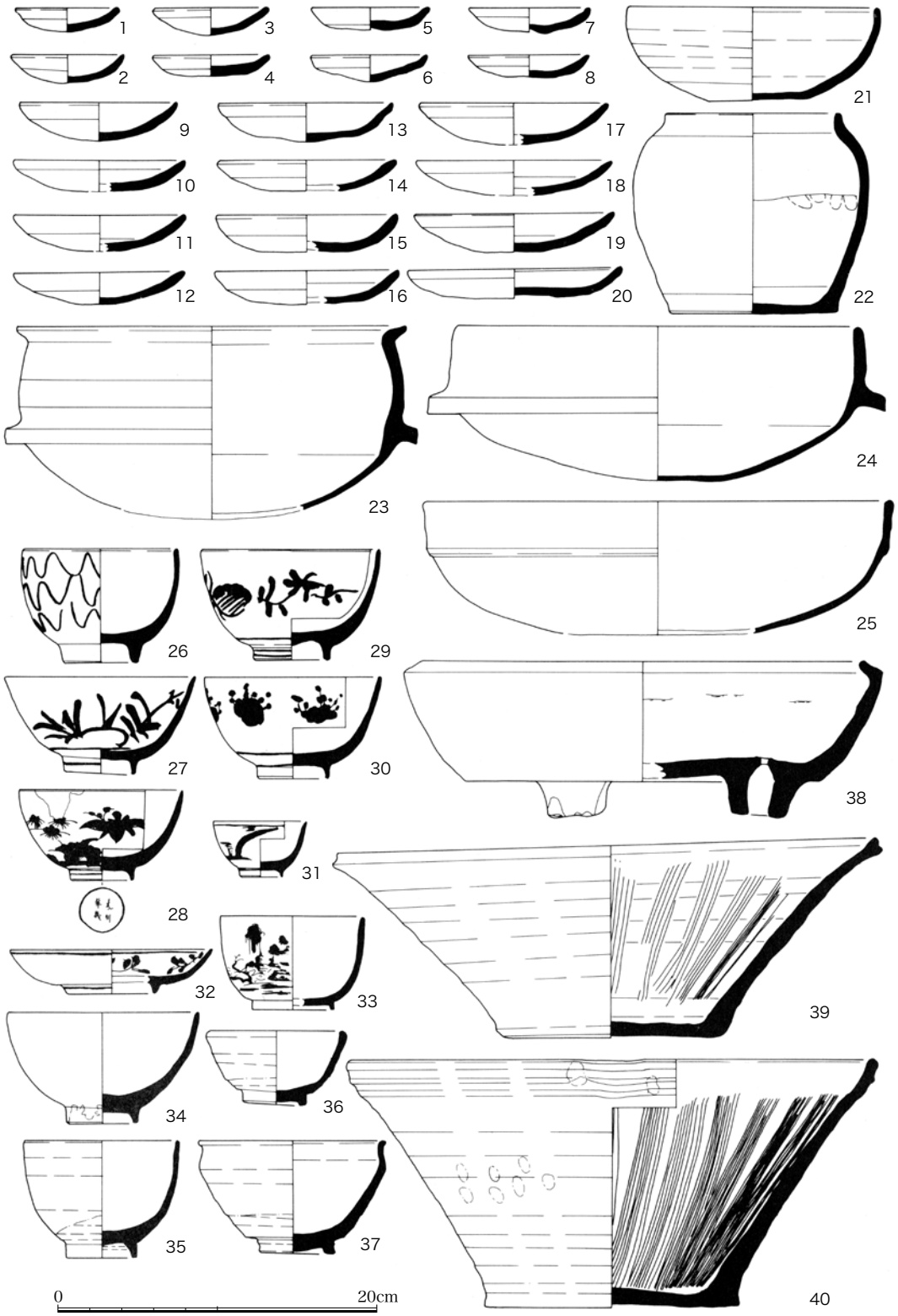


図 102　ＨＪ第 332 次調査　ＳＥ 06　出土土器（1/ 4）

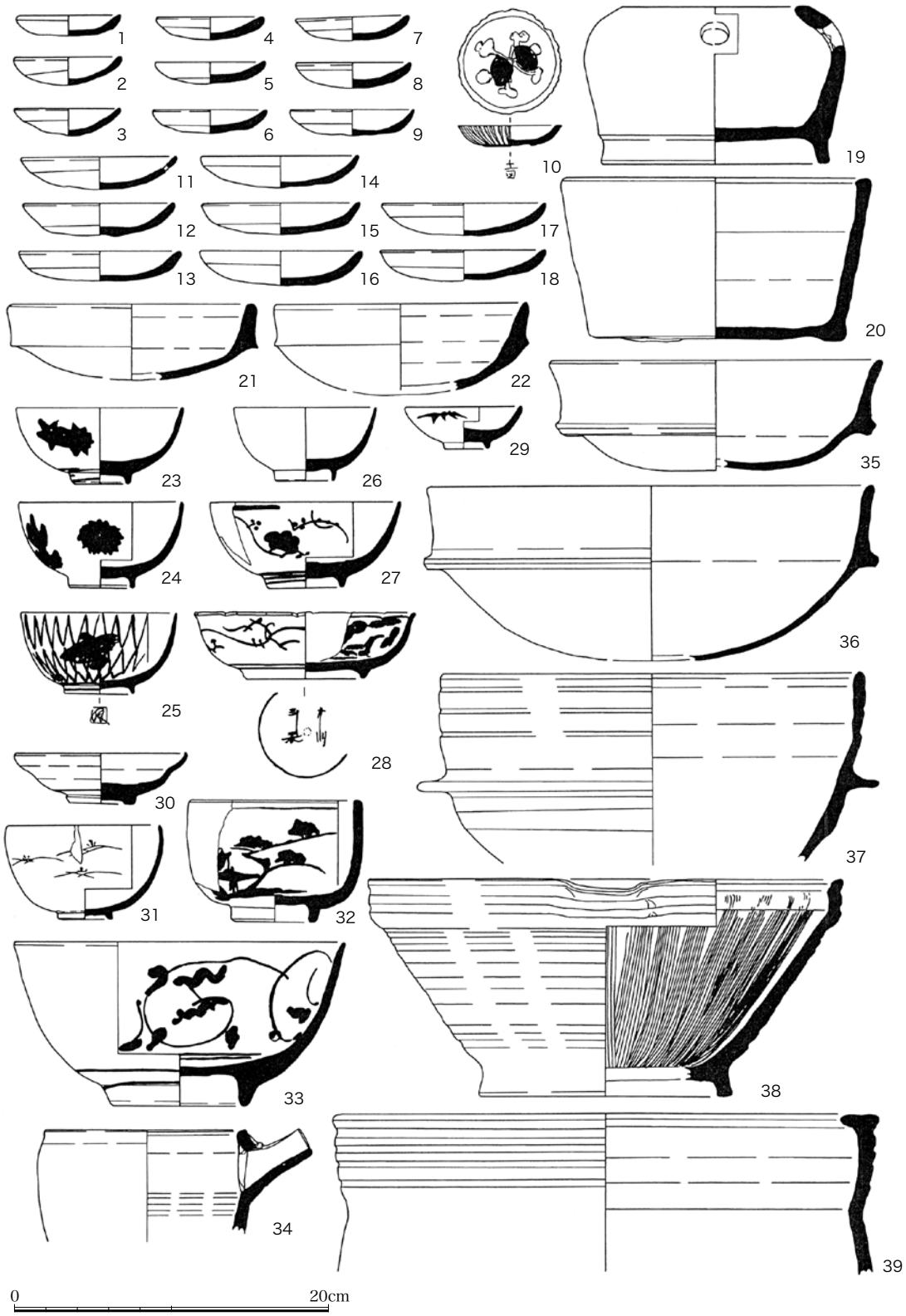


図 103　ＨＪ第 332 次調査　ＳＫ 16　出土土器（1/ 4）

写　真　図　版

ＳＥ 501 出土土器

ＳＫ 613 出土土器

9　皿A

23　皿ＢⅠ小

29　皿ＢⅠ大

34　皿ＢⅠ大

37　瓦器椀

写真図版２　SK618・635

ＳＫ 618 出土土器

53　皿ＢⅠ小

64　皿ＢⅠ大

ＳＫ 635 出土土器

91　皿ＢⅠ小

101　皿ＢⅠ大

105　瓦器椀

103　皿ＢⅡ大

ＳＫ 636 出土土器

125　皿ＢⅠ小

159　皿ＢⅡ大

写真図版４　SK636・638

160　皿ＢⅠ小

151　皿ＢⅠ大

153　皿ＢⅠ大

164　瓦器椀

ＳＫ638 出土土器

175　皿ＢⅠ小

180　皿ＢⅠ大

178　皿Ｃ

188　京都産皿

ＳＫ 639 出土土器

203　皿Ｃ

205　京都産皿

204　京都産皿

207　皿ＢⅠ大

土器図版６　SK642

ＳＫ 642 出土土器

219　Ａ群皿

240　京都産皿

244　Ａ群皿

280　Ｂ群皿

252　Ｂ群皿

S X 808 出土土器

290　A 群皿（SX808）

330　A 群皿（SK651）

304　C 群皿（SX808）

339　D 群皿（SK651）

写真図版８　SK651・SE507

ＳＫ 651 出土土器

ＳＥ 507 出土土器

346　Ｄ群皿

358　Ｄ群皿

ＳＫ 656 出土土器

374　Ａ群皿

384　Ｄ群皿

392　Ｄ群皿

380　Ｅ群皿

399　信楽産陶器　仏飯器

写真図版 10　SK662

S K 662 出土土器

411　F 群皿

428　D 群皿

437　E 群皿

509　赤膚産陶器　皿

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し：白色上質紙110kg/㎡
巻首図版：特アート紙135kg/㎡
本　　文：白色マットコート紙104.7kg/㎡
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：縦開き・糸かがり綴じ

南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡(HJ第559次調査)出土資料—

奈良市埋蔵文化財調査センター資料　No.5

印　刷　平成 26 年(2014)年 3 月 15 日

発　行　平成 26 年(2014)年 3 月 26 日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目 281 番地
ＴＥＬ　０７４２－３３－１８２１
ＦＡＸ　０７４２－３３－１８２２
ＵＲＬ　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目１－１
ＴＥＬ　０７４２－３４－１１１１（代）

印　刷　関西美術印刷株式会社
630-8325　奈良市西木辻町 153– 1

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2014